特116
599

第二回 夏期大學講演集

勸學博士 富士川游先生
醫學博士 藤井健治郎先生
學博士 須藤憲三先生
日下大痴先生
講述

石川縣能美郡佛教會

始

特116
599

緒言

一、本講演集は大正十四年八月三日より仝七日まで開設しました本會第二回夏期大學の講演速記録であります

一、本講演集は昨夏の中に上梓して第一回の時の様に直に、しかも一層完全に出版したいと思つて速記者に依頼したが、不幸期待がはづれて漸く今年の六月になつて其の原稿が編輯者の手許に來りそれが「トンネル」頗る多く其の校正に本會編纂委員は各當時の手記を出して校正に當りましたが藤井博士の第三日分は到底校正することが出來ず之を無理をしては博士の御說を傷ける恐れがあるので遺憾ではあるが編纂員一同は涙を呑んで其の稿を拔いて印刷にしました洵に上梓が遲れた上に此の様な始末で皆様の期待にそむいて居る事は幾重にも御詫びして置きます

一、本講演集は講師先生の校閲を經て居りませんので文責は編者にあることは勿論であります

大正十五年七月

石川縣能美郡佛教會

15. 7. 31
内交

主要目次

◉科學と宗教……一
第一講……一
第二講……一二
第三講……五三
◉人格主義の倫理……五八
◉大乘佛教の原理……八一
第一段　予講……八一
第二段　正講……八四
第三段　餘講……九二
◉自然科學と宗教……九五

科學と宗教

第一講

文學博士
醫學博士　富士川游先生述

科學と宗教と申す題を掲げて置いたのでありますが此處に斯ふ科學と書きましたのは自然科學の事で英語で云ふサイエンス(Science)であります。其の自然科學と宗教との關係を御話し致すと云ふよりも問題を少し小さく限りまして自然科學の見方からして宗教を如何樣に見るかと云ふ極く限られた問題を御話し致さうと思ひます。隨分以前から科學と宗教の事に就ては西洋の學者が種々に議論をして居られますし又書かれた書物も澤山あるのであります。それ故私はそふ云ふ風な事には話は觸れませぬ、極問題を小さく限つて自然科學と哲學との關係に基いて宗教をどう云ふ風に見るか殊に佛教をどう云ふ風に考へるか云ふ事に就て暫らく御清聽を煩はし度いと考へて居ります。然し時間の關係上から詳しく說明する餘裕を持たないのでありますから、それは豫めお斷りを致して置きます。尙又、私が御話をする主意が其處にありますから如何しても話が一方に偏して行くと云ふ事も初めに御了解が願ひ度いのであります。

此自然界の現象を見まするとと、種々な現象があると云ふ事は云ふ迄も無い事であるが、其現象を生物學――即ち自然科學の一部であるところの――の上から見ると味方であるものと敵であるものとは絕えず互に强いものは弱いものを窘めて居ると云ふ事は明らかに認められる現象で、我々人間が一人前になる迄にはどれ丈けの野菜を殺したか、どれ丈の鳥や魚を喰つたか、多量の生物を喰ひつぶして生きて居るのであります。我々が相手を苦めて而もどれ丈けの勝利を得たかと云ふに唯だ、自分を生存すると云ふ事と自分の後繼者を造つて居ると云ふ事を生物學的に示して居るに過ぎぬ、又人間丈けを考へて見ると、遺傳と生計を取る働きを以て段々と發達して來たものである。永い間の時間を經て外界に適應すると云ふ働きがある爲めに今日の形を作つたのであります。左樣な事は生物學の上から見て、生物學の此自然界の現象は細かに掲載する事が出來ませぬ。自然科學の一部である所の化學即ちケミス

トリー (Chemistry) の上から見ると一切の物は無數の原子が集まつて物質を作つて其の原子が集まつたり離れたりする一つの變化に過ぎないと云はなくてはならぬ。理學の方から考へて見れば引力とか力とか夫れが現はれて居る所に無數の電子が集まつたり離れたりする所に理學的の現象が起きて來ると云ふ風に考へなくてはならぬ。斯くの如く、此の自然界の現象と云ふものを自然科學の知識で見ますれば色々其處に說明もする事が出來るでせうが、然し、之は要するに我々人間の身體の感覺と云ふ機關を通して知る。感覺と申せば御承知の通り眼で物を見、耳で聽き、鼻で嗅ぎ、舌で味ひ、皮膚で觸れ、內臟で感覺を起し、筋肉と骨で良く運動關係を起す、凡そ七通りの感覺の働らきで知覺と云ふものを拵へる。其知覺と云ふ働らきに依て其處に一つの觀念と云ふものが出來、其觀念が聯合して意識の働きを現はす時に我々は自然界を認識するのであります。　其の働きが若し我々に無かつたなら自然界は無い譯であります。夫からして今迄申した自然の現象と云ふものは要するに感覺的自然である。感覺の働きが出來なかつたならば認識する事が出來ないのであります。　感覺の働きに依て認識をして居る其感覺的自然の現象と云ふものは、夫を事實としてそう云ふ物を經驗し夫を認めて行く處に科學と云ふものが成立する。換言せば多數の經驗を單純化する所に科學と云ふものがあるのである。もつと簡單に云へば自然界の現象の間に行はれて居る所の法則を認めて居る處が科學で、かくして得た科學と云ふものゝ知識は御承知の通り我々人間に對しては自然を制禦する力を與へる事は確かである。今日の文化の物質的方面は明かに自然科學に對し負ふ所が非常に多い。日常生活の殆んど總てが自然科學に依る事が多いのであります。電話にしても蒸汽船にしても汽車にしても或は近頃流行するラジオにしても或は臺所のマッチにしても、即ち自然科學の研究に依て生れた知識を元にして自然を制禦して行かうと云ふ事であります。ベーコン (Bacon) が云ふ如く此意味に於て知識は力である。即ち、自然科學に依て得た所の知識は明らかに人間の力で科學と自然は密接な關係を持つて居ると云ふ事は云ふ迄も無い事であります。所が斯の如き科學は前に申した通り、我々の認識を元として說明したものである。感覺の働らきに依て起きて來る所の認識を元として認識する、吾々人間はどうしても時間と空間の形式に依らなければならない。我々の感覺で認識すると云へば哲學で考へる實在と云ふ事カント (Kant) の云ふ物夫れ自身—は決して認識して居らぬ。我々の時間と空間と云ふ形式にあてはめてそうして忖度して居るのであるから平易な言葉で云へば科學と云ふものは自然界の一部と見て居るに過ぎないのである。夫故に科學に限りありと申すは無論であります。其科學の限りと云ふ事は、科學の行く事の出來ない世界は精神の現象に於て痛切に考へなければならぬ。今は科學と宗教との御話を致さうと思ひます。

特に精神界の現象と云ふ事は詳しく此處で申述べる餘裕もないのであるが、然し是から後に御話を申すと云ふ大體の筋道丈けを御話致さうと思ひます。今日の自然科學の研究の結果、人間の精神現象と云ふものは身心殊に腦髓の機能に依て起きて來ると云ふ假定は、今現に行はれて居るのであつて、昔の人が考へた樣に精神と云ふものが他にあつて夫が人間の體に誘導すると云ふが如きは、今日の自然科學、心理學、生理學等では考へて居ないのであります。そうして今現に行はれて居る假定は今日迄それを破る材料は何處からも出て居ないのであります。英國邊りに精神現象研究會等がありますけれども此の會にしても之丈けの假定を破るものは出て居ないのであります。其の研究の結果で今申した身心殊に腦髓の機能に依て精神現象が出て來ると云ふ假定は、恐らく破れる事は無いと思ひます。夫れは何方にしても今日は此假定に依て精神現象を說明しなくてはならぬのであります。故に其假定に基いて精神現象を說明するのに對照の爲めに、精神と云ふものと精神現象を分けて申しましたけれ共精神其者の根本は我々に判らぬのであります。我々に判るのは自然科學の上に研究して居る事は精神の現象であるから精神現象と申して居ります。精神其者は精神科學に依て其の本體を究める事は出來ないので、即ち、科學の見解を異にする精神現象に依て著しく感ぜられるのであります。今は其點を申すのであります。即ち科學の研究の結果我々の知る所は精神の現象である。夫は充分に研究し得るし是迄可なり詳しく研究されて居ります。夫を分けて智力と感情の二つに致さうと思ひま

す。西洋ではカント以來、知、情、意の三つに分けて居ると云ふ事は感情として現はれる事であるから學問的の考へとしては知と情の二つで宜いと思ひます。

知力と申すものと感情と申す二つの精神は先刻申す通り其元は感覺にある、眼の働き、鼻の働らき、耳の働き、皮膚の働き、身體の内臓の働き、筋肉や骨の働きかくの如き七つの感覺が充分に働いて自覺が出來觀念と云ふものを拵へて、其觀念の現象を知る事が出來るのである。然し此處に考へなくてはならぬ事がある夫は感覺からして結局意識を起すと申しましたが感覺其物が全體の意識を起すと云ふ事で無いと云ふ事を考へなくてはならぬ。我々が斯ふして生活をして居る五管が何時でも働らいて居る、又感覺機關で何時でも多くの感覺を拵へて居るが其觀念を聯合させる迄出ない事が澤山あります。今此處に坐つて居ても感覺は働らいて居ります。けれ共唯だ諸君の眼と耳だけでは無く、外の感覺も働らいて居る。私の話丈けでなく、餘所に音がすれば皆諸君の耳に這入つて居る。けれ共いくら聽覺の働らきをして居てもそう云ふ觀念迄使つて夫々聯合して居ないから意識に上つて來ない。觀念になつて居ない。然し、それが後に聯合したならば必らず出て來るのである。能く人の名前を忘れて其名前を思ひ出さうと思つて聯想して見るけれ共中々出て來ない、もう斷念してしまつて後にフト思ひ出す事がある忘れてしまつたのを思ひ出す迄には多少の時間がある其間は觀念としては聯合しゝ居らぬから意識に上らないけれ共聯合さへすれば何時でも覺えが出て來る。こんな事は實驗で以て見せる事が出來る。人を催眠狀態に置いて、或程度の催眠狀態になつたら耳に聽いた事等の觀念が聯合しないで居たものが聯合する場合もある然し催眠狀態に置いて其者に云はせますと、其本人が意識して居ないが、實際あつた事實と云ふものを云ひ得る事があります。夫を不思議と云ひますけれ共科學では不思議では無く人間の普通の働らきである。夢等でも或一部は夫である。聯合して居ない觀念が夫れが夢の中に聯合する。さうすると事實を見る事がある。又、意識をして居ない事實を見る事が出來る。夢で占をする事も昔から多々ありますが夢の多くはさう云ふ譯のものでない。併し其一部には必らず左樣な事がある。何方にしても我々の感覺の働きが全體に其意識の

上に來ると云ふ譯ではない。恐らくは意識に上つて來る觀念は極めて僅かなものでありませう。觀念に上らなくて精神の奥にあつたのが何時か出て來る其の觀念が非常に多いものと云はねばならぬ。獨逸の學者は夫を下意識と書いて居る。米國の學者は是を潛在意識と名付けて居ります。獨逸の學者は下の意識で上に意識が出て來ないから下意識、亞米利加の學者は潛んで居るから潛在意識と云ふて居る。私の意見はこれは意識では無いと思ひます、是は潛在した觀念であると思ひます。觀念が聯合しなければ意識に上るものでは無い之は議論でありますが其の考へで見ても觀念の聯合しない狀態が殘つて居ると考へねばならぬ。其の觀念が聯合して意識になり、潛在した觀念が出て來て意識となる。然し西洋の學者も凡そ其意味であるから同じい事であります。斯ふ云ふ潛在した觀念の爲めに我々は非常に動かされて居る。毎日の生活には非常に其の爲めに動かされて居るのである。

それからもう一つ感覺に這入らない自然界がある事も考へなければならない。一方では感覺が働らくと云ふても夫が殘らず意識に這入らない。一方には其感覺に這入らないものがあると云はなければならぬ。早い話が我々の感覺が眼の力でも極く力強いものでは無い一町先でも離れるとさうハッキリと見えない。耳の力でも皮膚の力でも何處の力でもさう充分では無い、さうして動物は階級が高くなればなる程感覺が弱くなつて來る。元は強くあつたに異ひは無い、鷲は人間の二十五倍の視力を持て居る、犬の嗅覺は自分の小便と他のものゝ小便とを良く區別する、猫は夜でも物を見る事が出來るけれ共人間は殆んど見えない。だから感覺は人間は動物の狀態から離れるに隨つて段々弱くなる。我々の感覺が不充分であれば我々の感覺に這入らないものが其處にあると考へなくてはならぬ。是は考へでありますが左樣に考へなくては我々の自然の系統を尋ねる事が出來ない。

我々が感覺的自然と斯ふ云ふて居るものゝ外に我々の感覺に這入らない自然と云ふものは如何してもなくてはならないと假定しなくてはならない。夫を本體的自然と名付けて差支へないものであらう。然しそう云ふ種類の自然は我々の感覺を通らぬのであるから、言ふ事も考へる事も如何する事も出來ない。只そう云ふ

事を論理的に假定するのみである。假定と申しますが其假定は單なる假定では無い、單なる假定では無いと云ふ理由は、かゝる自然と云ふものがあるとか無いとか云ふ事は別問題としても我々は此自然と云ふものゝ一部であると云ふ事が確かであるから、感覺的自然は我々の見た事實を本體とすれば我々の自然の外に如何しても我々の精神に觸れて來ない、意識に上つて來ない、言葉にも表はせないと云ふ其の意識と云ふものがあると云ふ事は疑ひない事である。其の本體的自然と云ふものは如何なるものであるか、其性質は如何と云ふに、我々には判らないが、どうしてもその樣な本體的自然があるべき筈である。否、あらねはならぬ。何方にしてもそう云ふ事に依つて我々の自然の系統が立つのである、如何しても我々は其說を信しなければならぬのである。それは今此處で信仰と名付けて置きます

元來此の信仰と云ふものには色々種類があるのでありますから極く素朴的に人の云つた事を信ずる、子供がお化けの話を聽いて信ずる、或は極く幼稚な考への人が自然界を見て驚いて夫に就て種々な信仰を起す、左樣な種類のものは皆信仰に違ひ無い、素朴的の信仰と云ふものでありませう。然しさう云ふ信仰は智慧が足らぬから起るのであります。智力の働きが充分であつたなら何でも無い。地震は鯰が怒ると云ふ事を信仰せしめた時代もありますけれ共、鯰の信仰は今日では無い事である。雷は雷獸が天で太鼓を叩くと云ふ信仰のあつた時代もありましたがそれも今日では無い。今から約二十年程前に阿弗利加の西海岸で歐羅巴人の足を踏み込んで居ない所へ亞米利加の船が行き、さうして其處であつた事を見て來た記錄の中に書いてあるのを見ると、或時其海岸の部落の者が海岸に出て見た所、何とも狀態の判らぬ黑いものが海岸にあつたので恐る〳〵寄つて見ると何物か判斷が付かない、所が部落民の中の自由思想家と云ひませうか開けた人が觸つて見た、皆なは恐れて遠くに見て居た、自由思想家は觸つて見たが判らない、すると其晩自由思想家が熱を出して寢込だのです。ところが皆の人はアンナ物に觸れるから夫で所謂日本で云ふ罰が當つたと、何ぞ圖らん夫は蒸汽船の錨で、片一方の者には何物か判らん、斯ふ云ふ事も所謂素朴的の信仰で夫を一つの靈のあるものとして其錨が神であるか、佛であるか靈のあるものとして靈の爲めに罰せられたとて多くの人が信仰したと書いてあるが、左樣な極端な馬鹿氣た事は誰が見ても夫が間違ひであると云ふ事は判るけれ共、大體これに似た信仰が我國の大都會に無數にある事は皆さんも御承知の事と存じます。

私共が考へるに一體我々の精神の作用と云ふものをもつと根本的に考へなくては大體其程度の差はあつても矢張り同じ樣に素朴的な信仰に陷る弊があると思ひます。宗敎は殊に其問題に付て注意を深くしなければならないと思ひます。素朴的な信仰は智力の無いものである。智力と云ふものが發達して來て智慧の働きが出來て、錨は船を止める爲めのもので熱を起すものでは無いと云ふ事が判れば恐くは無い。故に其信仰はスッカリ消ゑて智力的の信仰が起きて來る。智力的な信仰は智慧の働きで以て如何しても信仰しなくてはならぬ事になるのである。例へば日常の生活に於ても信仰を使つて居る。獨り宗敎丈けでは無い。學術は一つの法則に依て立つて居るけれ共、どの學術も一つの法則に依てすつと信仰に對するものでなく一切の學術は信仰を元とする、我々の生活も大部分は信仰の上に立つて居る。今此處に大勢お出でになりますけれ共、大勢の足は斯くの如く明日も亦來るか來ないかを明確に返答する人は無い筈だ、然し乍ら明日は必らず來ると云ふ信仰の下に今晩大地震で此邊が潰れると云ふ冗談半分でも云ふものがあれば人心は動搖する。遠方の人がくだらぬ事を云ふても一部では動搖する。今晩十二時に小松が大地震だと云ふと確かに動搖する。明日は必ず來ると云ふ信仰がある爲めに安心する。三度の食事の中に必らず毒がないとも限らぬが夫を一度一度檢査して喰べる人は無い。其處に信仰と云ふものが無いならば一々檢査をしなければならぬ。疑と云ふものがあれば必らず檢査をする。疑はない智力的信仰狀態の下に我々が生活を續けて居る。此智力的の信仰と云ふものは、若し其信仰を絕て失つたならば我々は身體の組立を替へなければならぬ。是は容易に替へる事が出來ないけれ共智力と云ふ事は進步するから人間の智慧と云ふものは確定したもので無い。確固たるものでは無い。夫から智力的信仰と云ふ事は確かに信仰には違ひないけれ共確固たる信仰では無い、夫故に信仰と云ふものはモウ一步進んで、亞米利加のフットの云ふ樣

に、感情的の信仰の狀態が―其處に感情的信仰と云ふものは身體的の感情であります、例へば腹の減つた時には飯を喰ふ、喰へば腹の減つたのが良くなり元の働きをすると云ふさう云ふ信仰が必らず出て來る身體的の感情として必らず起きて來る。夫から今我々が自分の心の働きと云ふものを精密に考へて行つた時に必らずそう信じなくては我々の感情が滿足の出來ないと云ふ―必らず起きて來る。其の感情的の信仰はどうして起こるか、夫を私は今申した身體的の觀念身體的の自然と云ふものに觸れて起きて來る觀念だと斯ふ私は說明するのであります。夫は如何してさう云ふ事を申すかと云ふと、一體、我々の感情と云ふものは外界に對して起きて來る。人が彼是云ふ、夫に依て癇癪が起きる、人が自分の云ふ通りにしない、夫で癇癪を起す、世の中が自分の思ふ通りに行かん、不平を感する心の外に或る生物に對して感情と云ふものが起きて來る。夫から感情の起きる具合は夫は吾々には良く判りませぬけれ共、起きた感情は周圍の人に對して社會に對して、生物に對して即ち感情と云ふものが起る。智力と云ふものが伴つて居る、其の現れ方は如何しても判らぬ。夫は他日の研究に俟たなければなりませぬ。腹が立つと云ふ事は、人が惡口を云ふたからであるが、人が惡口を云ふても腹の立たぬ事がある。親しいものが馬鹿と云ふても腹が立たぬ。仲の惡い人が貴下は利口だと云ふても腹の立つこともある。斯ふ云ふ事は昔からよく知つて居る事であるが、腹の虫の居所が惡かつたと云ふが、ドンナ虫が居るか、虫が居るにしても居らぬにしても自然で無い現はれ方である、是は觀念として出て來るが其の理由は我々に判らぬけれ共今は其の說明の限りではありませんが夫は感情が外に對して起きて來ると云ふ事は確かに認める。如何にしても他の人間に對して社會に對して、一般の生物に對して斯ふ起きて來る。夫故に其感情と云ふものは多くの場合は喜、怒、愛、樂、愛憎の情緒と云ふものは何れの場合でも自己衷心である、自分の衷心に社會が都合の良い時は、道理に背いて居らうとも、居らぬとも良いので、誰でも勝手が惡い時は正しからうと正しからうまいとも、自分は人に對して誠を云はなくてはならぬと說明をする人は私に誠を云ふた時に腹を立てる、貴下は馬鹿だと云は無いで貴下は利口だと嘘を云ふても良いけれ共、

人に對しては嘘を云ふてはならぬと云ふ。何れの場合でも自己中心、正しい正しくはないは其本人以外にある夫だから同じ言葉でも腹の立つ事があり、立たない事がある。馬鹿だと云ふても立つ事と立たぬ事がある。其の感情は今申した通り、相手がチャンと判つて居る我々が見たり聞いたりする所のものに對して起きて來る所が感覺的自然でない限り、本體的思想若くは意識に上つて來ない。潛在の觀念に對して起きた感情は我々の相手が見えない即ち對象が見えない。普通は對象に對して我々の見たり、聞いたりする事から起きて來る感覺である。我々は云ふ事も考へることも如何する事も出來ない時に觸れた感情は又どうする事も出來ない。どうしても感ぜざるを得ず思はざるを得ない、又信ぜざるを得ない、感情的信仰が起きて來る。宗敎で信仰と云ふは此の場合を云ふので此場合の信仰で無ければ即ち宗敎で無いと思ふのであります。

或種類の宗敎は即ち自然的宗敎は素朴的の信仰を持つて居る。例へば自然界を見ると、吾々に氣に入らぬ現象が澤山ある。この前の東京の大地震の樣に誰が考へても天變地異である、誰も氣に入らぬ、あんな事をやられては困る、だから、感情としては人を害しますけれ共相手は大きな社會なり地球のやる事であるから仕方が無い。周圍を自分が考へて見ると、自分が惡かつたから天が懲しめる爲めの天刑だ等とそんな事を云ふて言譯をする。是は自然的の現象である。其處に道德的の意味がある。良く考へて見ると道德的意味は極めて薄い或はどうも一つの天罰であつたから人間が惡かつたので仕方が無いと云ふのなら　そんなら自分を替へなくてはなりませぬ。歷史を讀んで見ると御わかりでせう平安朝時代から天譴、自然は天譴だと信ぜられた。平安朝時代に『其時代の勅を見ると『朕の政治が惡いから左樣な事になる』、百官有司の者は力を盡して良くしなければならぬ』と云ふてある。之は如何にも道德的の意味の深いものである。　天皇陛下御自身が百官有司の者が極めて良い政治を行はなければならぬと云ふ、道德的の詔勅を百官有司に下された然し鎌倉時代になつては天譴は天譴だけれ共夫は人民が惡いから我々人間の惡い事を誡める爲めに左樣な大きな地震が起きたと云ふ樣になつた。夫は道德的の意味がある樣だけれども。それは天譴に漏れた人が後からあきらめの事を

云ふたに過ぎぬと思ひます。其人が死んだから天譴であるが生きて居るから天譴でないと云ふて居る所は天譴が足りないと思ふ。甚だしいのは佛敎を世の中の人が信しないから世の中がこんな事に成つたと云ふたが夫も感心しない。さう迄天譴か偏局つては困る。東京や横濱の人丈けが天譴を受けるのも判らぬ。片一方からやつたので追々此方にも及んで來るならば夫でも一寸承知は出來ますがそれは天のやり方では無い。人間のやり方である。若し我々が死んで居れば天はやる必要が無い。天が時々やると云ふなら時間を置いてやらなければ六十年七十年では多過ぎる。斯ふ云ふ事はもつと徹底的に道德的に考へた人もある樣である。道德的に徹底した考へで其人の云ふ事は良い敎訓を得た。如何にも良い敎訓を得た。此位實地の敎訓の無かつた人間は萬事淨土眞宗の親鸞上人の云はれた『ヨロヅノコトミナモテソラコトタハコトマコドアルコトナシ』の御言葉の如く、石の柱が大丈夫と思ふた所が炎えた金を郵便局に貯金して置けば大丈夫と思ひ郵便局に貯金はしたが返つて來ない。金さへあれば良いと思ふて居たが震災當時私の居た鎌倉に、二萬圓も三萬圓

もある金持が居たけれ共この場合何の役にも立たない『ソラゴトタハゴトマトアルコトナシ』左樣な敎訓ならあんな事を度々やつて貰つては困るが善い敎訓なら二度三度やつて貰はなければならない。平氣て拜聽するならば如何にも尤もらしい事を云ふ樣であるけれ共感情の出工合に左樣では無い。自己衷心に考へて行くのだから良い加減な理窟を付けるが餘程間違つた方で是は佛敎を信仰するものに對して、どうでも人間の力では如何する事も出來ないと云ふ事が判つた時偉大なるものとするから人間が偉大なるものとするのは知れた事である。どんなことを考へても人間が偉大と思ふのは知れた事、其處で偉大な事を大きな事として夫を神とし佛として崇め奉る。夫には自然的宗敎が起きますけれ共其宗敎は我々を助けるものじやなくして、神を使ひ佛を使つて居るのであります。そう云ふ神を使ひ佛を使ふ人が若し使ひ切れ無い時は、神さんには御利益が無い、佛さんは無慈悲だと喧嘩腰である。支那でも信心と云ふ徹底した事を云ふが、自分の思ふ通りに事が出來ないと『天道果して是か非か』等云ふて使ひ切れない時にはこんな言葉が出て居る。左樣な自然的宗敎ではどうしても宗敎と云ふものゝ働らきはある譯でない。宗敎の事に就てはもつと詳しく思ひますけれども今は信仰に就て夫れ丈け御話して置きたい。

如何にしても我々の感情と云ふものは如何にして起きるか判らないけれども、本體的自然若しくは意識に上つて來ない其觀念に伴つて起きて來る感情である。其感情に依て起る信仰である。如何しても我々の力を以て左右する事が出來ないけれ共。若し左樣で無ければ人間の心持ちで以て人間の信仰をどうしても左右する夫で合理的になる。夫では本當の宗敎的の働らきが起きて來る譯はない。極く幼稚な論へを擧げれば、極樂は非常に樂しい所だ。死んだら其處へ行くのだ。斯ふ云ふ信仰が必らずあるとして一生懸命に信仰する。外の人は「そんなものは無い、そんな馬鹿な事が無い。極樂へ誰も行つて來た者が無い」云ふと、ダカラ左樣かナアと云へば所謂安心が崩れる、崩れる樣なものは安心では無い。心に拵へて居るから崩れる。感情的な信仰と云ふものは人間が如何に考へても崩れる事の出來ないものでなくてはならない。左樣でなければ宗敎の働きをしたもので無いと思ひます。人間が智慧を以て素朴的信仰を起しても夫には智慧と云ふものゝ進歩があるから、一生懸命信じても外の人が—偉い人—云ふと又變る。人間の云ふ事は大抵知れたもの、それを外の人が云ふたからとて、サウと。『講釋師見て來た樣な嘘を吐き』と云ふ事があるが、ろくらい事を判つた樣に云ふが、聽いて見たら勝手が良い。人間の周圍は皆自分の形式と時間と空間の形式に當て嵌めて考へる本體的自然から離れて居る。本體的自然に接した場合に起きて來るものは、如何にしても感情に動かされて來る。そう信じなくてはならぬ事になる、其處に宗敎と云ふ心の働らきが起つて來るのであるから、宗敎と云ふものは外なる力を內に入れて內なる力を强くする働らきを持つたものが宗敎で哲學の定義を下すと同等な定義の下し方があります。宗敎學の方から下せば種々定義がありませうけれども、實際的の働らきを精神の考へから外なる力を注ぎ入れて內なる力を强くする夫が宗敎である。夫故に吾人の宗敎は吾人の生活其者が宗敎である。少しも離るべきもので無い。だから感情的宗敎に立たゝねば即ち本當の宗敎心が信仰の上に立たなければ、眞實の宗敎と云ふ事の起ると云ふ事は

無いと思ひます。左樣な精神的宗教と自然的仰敎は誰でも持つて居る宗敎意識である。宗敎意識と云ふものが自然界に對して起きて來る。其の働らきに依て誰でもが起す少しでも纏つた系統がある譯では無い。誰れが云ひ出したと云ふ事は無い。自分の力が足りない、自分の力の多い此の宗敎意識と云ふものが誰れでも起きる。けれ共夫は自然的宗敎で纏つた意識を持つて居るのでありません。かゝる自然的宗敎は銘々勝手に起して、神も佛も幾つあるか判らない。何でも不思議な事は神に强ふる。狐でも神にして何時でも神に强ふる。石垣でも海でも神にして仕まう。人間の死んだ奴でも宗敎的神と云ふ。日本で云ふ神とは違ふは勿論である、宗敎的な神の事である事を御承知置きを願ひ度い。系統と云ふものが無くて勝手に宗敎意識と云ふものを起す是は當然出づべき精神の働らきで夫を敎養して人間の精神情操の圓滿を期さなくてはならないのに他の意識と云ふものは皆敎へる方法が備つて居るのに、飲食の方でも、飲食の衝動が起きても、他の智識の方でも何でも皆夫相當に敎養する智識が備はつて居る。哲學の

方面では學校が盛んに骨を折つて導かれてゐるけれ共宗敎意識の敎養と云ふ事は今日の狀態では全く放任されて居る。お前に宗敎の敎育と云ふものがあるかと驗せば夫は說く者の敎義の注入である。或場合には役に立ちますけれども、宗敎意識の敎養と同じやうに、矢張り心理學と同じ樣に學校に望むと云ふ事は出來ないけれども、家庭には望まなくてはならない。是は單なる個人の問題でないと私は思ひます。中には宗敎が無用であるとか色んな事を云ふけれども、夫は餘程考へが他の方面に向ふて居るのである、是迄さう云ふ方面に付て公にされたものを讀んで見ると、其人等の云ふ宗敎は宗敎の形式を指したものである。宗敎の形式と云ふ事は是から後にお話致さうと思ひますから……宗敎と科學の大体の關係は今日の御話で申述べたのであります、甚た理窟ポイ無味乾燥な御話をして今日は先づ總論としてこれで止めて置きます。

第二講

認識すると云ふ事は確かに周圍の事柄に止まつて居る。一人の人間に付て申せは二歲三歲の子供の精神の作用と同じい事であります夫れからしてそう云ふ精神の發達の程度では自分の周圍に、自然界に精靈のあると云ふ樣な事は認めるものはない。近時人類は此自然界の精靈を認めては居ない。是は前生氣主義(プレ・アミニズム)と申します。夫から二歲頃の子供であると自分の周圍の事物に精神のあると云ふ樣な事は決して認めない。所が段々と精神の働らきが進んで、一個人で見れは二歲から四歲位の程度に相當する人間になりますと、周圍の認識が段々と詳しくなりますが、遂に自分の周圍のものを一つの力として感する。夫で其の力が自分に對して、或は懲罰を加へると云ふ樣な心持を起して來る。夫をプレ・アミニズムと云ふのである。左樣な心持迄進んで參りますと、自然崇拜と云ふものが起きて來る。總ての動物を崇拜する、或は總ての植物を崇拜する、或は天体を崇拜する、一切の物を力として認めて之れに服膺し信賴しやうと云ふ心持が起きて來るのでありますから、所謂、自然崇拜と云ふ狀態が起きて來る。夫が第二段でありまして、もう一歩進むと即ち事物の總てに生靈があると考へて居つたものが其生靈が事物から離れ、さうして夫が地上に彷徨ふか、或は空中を彷徨ふか、或は總ての動物植物から離れて、我々に向つて左右すると云ふ心持が起きて來る。是が人が死ぬる云ふ事實を多く見られます。今迄息をして居つた者が死ぬると息をしない。働らきをしなくなるどうしても精靈と云ふ樣なものが、身体に宿つて動いて居たものが、精靈が離れると同時に働らきを止めるから其處に精靈を認める。もう一つは夢の現象で魂と云ふものがあつて、夫れが身体から出たり、這入つたりして、精靈が獨立して存在すると云ふ事を信ぜしめたる是れが第三段で精靈主義即ち精靈崇拜(スピリチュアリズム) spiritualism と云ふのである。斯ふ云ふ風な精神の進み方は極めて幼稚なものでありまして、時代から申せは四千年も前に印度や希臘に說明されて居る。又日本ではもつと古くから進んだ精神の說明がある。今日の學問中自然科學は四千年の間に發達したので、さう古い考へを持つて居ない。夫で宗敎も矢張り夫に伴ふて發達して居る。然るにかくの如き三千年も四千年もの歷史的の考へが今でも殘つて居る。夫れからして宗敎と云ふ形を持つたものが出て來て居る。前生氣主義、或は精靈主義と云ふ樣な餘程古い學問から申せは、極めて幼稚な考へで、殆んど値打がない樣

な考へであるが、矢張り今日迄殘つて居て、夫れから今申した樣に、宗教と云ふ形を持つたものが其處に出て來て居るので是を自然的宗教と云ふのであります。

自然的宗教と申す意味は吾人人類には生活の欲求があるから生きて行くと云ふ强い衝動かある故に夫が爲めに我々は跪いて居る。所が人間の智識と云ふものと力と云ふものには限りがあると云ふ事は段々智慧が進むに隨つて判つて來る。段々智慧が進むと我々の生活と云ふものは外から何時も束縛されると云ふ事になる自分の力を知れば知る程、人間に何物も出來ないと云ふ事になる。外界から妨げられますから智慧が足りない。從て自分の欲望と云ふものゝ活動が充分出來ないそこで不安が起きて來る。どうしてもそんな不快なもの、不安なものを取除けなければ、生活の欲求を滿足する事が出來ないから、夫を取除け樣とする精神が起きて來る。其れは即ち宗教の意識であるから、生きて行かうとする欲求の强い人間には、どうしても起きて來なくてはならぬ。所が智識が足りないから、其處に宗教意識と云ふものが起きて來る。所謂、宗教の形と云ふものが出て來る、其の形とはどう出て來るかと申せば、今申した通り斯ふ云ふ智識であるから、最考もへ易い事は、身体と精神とが二つに別れて生きて居る間は同じであるが、死んでしまへば何處かに行く。其精神は多くの精神の一部であるから、其の大きな精神に服從して行けば、我々は必す良い方に行くと云ふ考へは當然起るのであります、からして自然的宗教と云ふものは何れの場合でも其形を以て現はれる。故に自然的宗教に神と云ふものが出る場合には、何れも惡い神が出る。而も惡い神が先に出る。生きて行くと云ふ欲求が妨げられる其處に宗教の意識が出て來る。惡い神が出て來る。善い神の出る場合はずつと後で、自分に道德的觀念が起きて來なければ出て來ない。夫が自由な時であるから、何れも惡い神が先に考へられる。夫れから段々善い神が出て來る。自分に道德的考丈け起きた後である。自分が惡いと云ふ考への起きた時でなければ出て來ない。けれ共、夫は苦しい時の神頼みと云ふ種類の考へは全く功利的な考へである。西洋の學者で宗教と云ふ人は此樣な(Heraklejtos)ヘラクライトス云ふものが成立たないから宗教的の意志と云ふた方が宜いと云ふて居ります。私も左樣云ふた方が宜敷いと

思ひます。此樣な形のものを宗教と云つては、吾人の申して居る精神的宗教と間違へられるから宗教的意志と云ふたのであります尙宗教的意識が出たと云へはもつと適當であります。平生は宗教を無視して左樣なものはマア必要はない等云ふ樣な人でも夫れでも危急存亡の場合には何物かに依り縋らうと云ふ心持が起きて來るのが宗教的意識の働らきであります。平常は何にそんな宗教なんど云ふものは必要は無いと考へもし、口にも出して居る時でも、難船で今船が沈む場合、病氣に罹つて命を引取る場合には何物かに頼らなければはならぬと云ふ精神が起きて來る。夫が宗教的意識であります。自然に起きて來る所に宗教と云ふものは宗教の德を備へて居らないのであります宗教的の意識と云ふ樣な、或は前に申した樣に、宗教的の意志の發露と云ふた方が良いかと思ふ。何方にしても左樣な自然的宗教と云ふものは認識の働らきが段々と働らいて、智識の進歩と共に發達して行く。今日の自然科學の研究の結果に依て我々の認める樣な精神の修養になりますと、如何しても自然的宗教では納まりがつかぬ。自然科學の進歩を今此處で說明する遑は無いが、今日の自然科學の進歩は昨日も申した通り、我々の精神の働きと云ふものは身体の機能で、全身殊に腦髓の機能である。腦髓は精神の働らきを纏める所であるが、精神は身体全体から起て居る。極く常識のある人の考へは腦の働きの樣に考へて居るが、人間の精神は身体全体から起きて居る。腦髓は最も高尙な働きを有して居る。夫は精神の感覺から起つて居るから左樣申します。我々の精神の働きは、感覺から起きて居る。全身の皮膚、筋肉、及び細胞の全身に亘つし、感覺の機關と云ふものがあつて、それ等が精神の働きをすると云ふ事は當然で、元々身体を以て精神の働きをしたと云ふ事は人間のもつと始めに溯つて考へて見ればよく判る事である。人間の始めは今日の自然科學の智識にあつたと同しい種類のものから發展して來たものに相違ない。即ち始めは單細胞に違いない。精神の全体は体全体が精神の働きをして居る。所が段々と分化して來て働きによつて段々智識が精密になり、体が段々複雜になり、而して分業にしなくてはならぬ。斯ふ云ふ風に分業を始めてから感覺の機關が增えたのであります。即ち身体が感覺機關である。全体感覺機關である事が段々後に分れたもので

ある。之を考へて見れは精神の働らきの元をなして居る事は明らかである。夫故に身体が無くなれは隨つて我々の精神が消滅するのである。即ち耳が無くなれは聽く事が出來ない。　目が無くなれは見えなくなつて夫等感覺丈け滅するから、　他の感覺は多少起きるが夫でも矢張り今から十八、九年前に亞米利加の泰斗モレルと云ふ内科の所へ眼が片一方なくて、耳がよく聽えないで、尙全身の皮膚が痳痺を起して居る患者が入院した。其の患者は聽感覺も視感覺も無い、外の感覺作用も大部分無いから殆んど無意識狀態に陷て居るものである又誰でも寢れは殆んど無意識狀態たから斯ふ云ふ樣な事は議論ではないので實際にそれは經驗し得る事であります。もつと適切な言葉は醫學の實驗に於て身体の一つの部分か傷けられると、意識の働らきが殆んどなくなるか、或は弱くなる事は明らかに認める事か出來る。夫から身体の働らきに依て、精神の働らきが出て來ると云ふ假定は今日の處、夫を破壞する材料は無い。だから自然科學の進歩の上から、どうしても左樣に認めなくてはならぬ。もう一つ段々人間の精神智識が進歩して行く爲めに道德觀念が其發達を備へて來る。是は人間が生活を本當にする爲めには必らす起きて來なければならぬ心であるから、元々同しものからしてさうして別れて來たものである故に總てに共通をした仕事であると云ふ事を理解すれは、どうしても其處に道德的考へか起きて來る。良くお考へになれは私の今申す事が御判り下さる事と思ひます。極く簡易な例を極く平易に申しますと、人間が此世に出て來た。人間と云ふ者は元卵である。卵が段々發達して細胞が段々分離して、皮膚になつたり、髮になつたりして完全になつたのであります。鷄でも卵が段々分離して骨か出來たり、皮が出來たり、足が出來たりして完全な鷄になる。人間も其の通りである。元々單純な細胞であつたものが夫が發達して頭から足迄種々な機關か出來たのである。さうすれは手の中の何處にも元々卵であつた其時に目的として居つたものが必らす含んで居たに違いない。所が今夫を見ると云ふと足は足手は手と仕事が違ふ。手は物を掴む樣に出來、足は歩くと云ふ風に出來て居る。けれども元に返ると云ふと同し樣な目的を以て出て來たのであるからお互に夫々分業して居るけれども然し此目的と云ふものは人間を

成立せしめると云ふことになる。手は手で勝手な事をやり、足は足で自分の勝手な事をやり、何もしないで昔の神學の話の樣に、目が不服を云ふと下の方がみな不服を云ふと云ふ樣な事になる。元々一つであつたものが同し樣な目的を以て、其目的を達するために分業して居るものである。其間に共通の大きな精神がある。其の元に返る、昔の支那に報本と云ふ話がある。元に返つて考へて見ると、其人が皆同し目的のものである故に、共同の生活の上に於ては道德的觀念が起きて來ると共に又、一方に知識の觀念が發達して來る。其の意味に於て、自然的宗教と云ふものは第一に其の人の知識慾を滿足せしめる事が出來ない。第二には、道德的觀念を滿足せしめる事が出來ない。故に自然的宗教から離れて人間の精神の働らきに依て段々善い所を拔取つて精練された宗教意識を發達せしめる一念が起きなければ、宗教の働らきは充分で無いから、其處に宗教的精神と云ふものが起きて來る。私か昨日も申した樣に、自然的宗教と云ふことは、一方では知識が足りない又一方では道德的觀念が足りないから、全く功利的のものである。所が自然的宗教を離れて、精神的宗教になりますと、所謂理想として、神又は佛を立てる精神から道德的の性質を帶ひて來る。たから段々と外にある神が内面的になる。神や佛の概念の内には全く習慣的道德の觀念に局限されて吐き出されて行く。さうなりますと、全く冷靜なものである。さう云ふ所に出て來る神は精靈でなく全く冷靜なものである。多くの人の考へには此の点に於て誤解がありはしないかと思ふのであります。一つの精靈であると云ふ樣な考へは餘程古い考へで、今日はさう云ふ事を考へるには、自然科學では纖維である。時代が古いけれ共精神的宗教と云ふ事は、知識の發達と道德的發達が逆應して來た共通の觀念である其處に出て來る。人物と云ふものは全く冷靜なものである。其處にヒラ〳〵歩いて居るものでなく、全く習慣的道德、理想が客觀されて吐き出されるものであるから、左樣な精神的宗教では客觀の神とか佛と云ふものを認める譯はないのであります自然的宗教では何時でも客觀的に存在されて居ります自分の心を離れた其處に何物かを求め樣と云ふ、極めて幼稚な意識を出して居る。是は考へて見ても、人間の精神の發達から見て、極く初歩である。夫から段々

進歩して精神的宗教になつて居る。極く早く申せば此我々が生活して居る生活を實際化しやうと云ふ樣な心持が自然的宗教である。だから此生活をする前に實際化しやうと云ふから、さう云ふ宗教で云ふ未來と云ふは、全く現在の生活の延長である。即ち實際化しやうと云ふ心持が自然的宗教である。未來じやと云ふけれ共全く現在の延長である。安心立命と云ふものが出來るものではない。自然的宗教と云ふものは絶對に人格を修養する事が出來ないものを、夫を掴む時に精神的宗教が起きて來る。斯ふ云ふ事は長々と是から御話を致す事を御聽き下されたいのですが然し、或は私の申す心持を御理解出來ないかとも思ひます、然し此處迄申せば己むを得ない事でありますから段々と御話を進めて行きますから、何卒御察しを願い度いのであります

極めて簡單でありますが、今迄御話申した事は科學―此自然科學と云ふ事は感覺を元として而して我々の精神の働らきに現はれた其事を論する學問であるから所謂認識と云ふ事を元として居るので、其處に實在して居る其物を決して取扱つて居るものではなく實在と云ふものは自然科學の範圍に這入らない。我々が自然科學の上に於て、自然じやと云つて居るのは感覺的自然にて自然の一部に過きない。自然の一部には感覺的自然の外に本体的自然がなくてはならない筈である。其の本体的自然と云ふものは、我々の認識に這入らないと云ふ事は、今申した通りに云ふ迄もない事である我々の認識に這入らない、考へる事の出來ない、如何する事も出來ない其の本体的自然に直接に接すると云ふ事、即ち、純粹に經驗する處に、知識の進歩と道德觀念の進歩に依て精神的宗教が起きて來る。我々は其說明を俟たないで自ら我々の感覺的自然を離れて本体的自然を直接經驗すると云ふ其處に本体的宗教が起きて來るのである。故に我々が本体的自然に觸れる場合に其說明に困るから、夫で、其感場を超越したる存在と云ふより外は無いのである。其の超感覺的本体を我々が直接經驗する事によりて起きて來る感情が我々の宗教意識になるので決して我々の思慮詮索に依て得られるもので無い。法華經を拜讀して見ると『思慮分別の能く期する所にあらす』とありまして、我等の信する哲學の中には是を離言眞如と書いてあります。親鸞

上人の御言葉に『イロモマシマサズカタチモマシマサズスナハチ法性法身ニオナシクシテ無名ノヤミヲハラヒ惡業ニサヘラレスコノ故ニ無碍光トマフスナリ』等とあるが左樣な言葉は何者かに觸れた時、其時に我々の心持ちに起きて來る、其感情の働らきに依て宗教と云ふものが起きて來るのである。獨逸の宗教家で最も徹底した、今から百年程前に死んた人であるが、シュライエルマッヒエル氏は『宗教は人間の心の奥底に深く隱れて居る所の神秘的經驗である』と申して居ります。是は私の申した反對の考へから申した言葉であるがともかく我々の精靈の働きから離れて居るものである眞宗で說く樣に人間の惡い智慧と云ふものを離れ、而して其奥に出て來るのが確かに本來の目的である。所謂現象であるから、シュライエルマッヒエル氏の云ふ樣に而も心の自發的の活動で無くして、思慮詮索を離れた、其働き、我々の思慮詮索を離れた時に宇宙に對して起きて來る感情だと申します。宇宙、即ち豫言者の直感及感情であります。全く自働的のもので人間が經營する所の宗教の働きが起きて來る。さう云ふても差支へは無いと思ふ。淨土宗の說教に「自分の計ひを止め」と云ふて居る其の計ひを止める精神の働きに依て起きる所の意識と云ふものゝ働きを假りに除くことが出來たとすれば其後の働きは、どう考へても本体的の自然から起きて來るものに對するに外ならない。精神的宗教は如何してもさう云ふ風に出て來る心持で無ければ、安心立命の目的を達する精神の働きにはならぬと思ひます。佛教は明らかに其處迄教へたと思ふ。殊に佛教の中でも淨土眞宗たと思ふのであります。

其處で、其の話を段々と進め度いと思ひます。自然的宗教の形式、佛教と一元論の御話を致しますが、時間が參りましたから休む方が宜敷いと思ひます。

先刻申上げた樣に、宗教と申す精神の働らきは、人間の心の奥底には常に存在して居るものである。生きて行かうと云ふ欲求の向側には斯くの如き宗教と云ふ心の發達が出て來る。外の言葉で申せば宗教的意識と云ふものは道德的意識、其他總ての意識と同し樣に、心の中に種子がある。機械がある。たから何時でも出て來る。宗教的意識の種子の無い人間は無い筈である

所が其宗教的意識と云ふものは全く此の心の内のものである。主觀のものである、心理學で云ふ所の主觀である。即ち感情として現はれて來るのであります。先刻申した、總ての事柄に對して起きて來た感情は、喜、怒、愛、樂、本体的自然に對して出て來た所の感情は、其處を全く離れ自分の計ひを捨てゝ、欣求淨土の感情が起きて來る。夫故に其處は言葉を以て說明する限りでない。思慮分別の能く解する所で無い。我々の心にも及ぼす、言葉にも絶えたものである。所が斯ふ云ふ性質の宗教其者を我々が口にする場合に、我々の考へに夫れを上ほす場合に、其處に何時でも形式と云ふものを備へる。形式が宗教で無い事は云ふ迄も無い。けれども形式を離れる事は宗教の眞精神を人から人に傳へる事が出來ない。例へば痛むと云ふ事を言葉に出しますが、この痛いと云ふ感情を形式の言葉に出したのである。私が痛むと云ふても、他の方に、自分が痛むと云ふ言葉に依て自分の心持を唯類推するに過きない。感情其者は全く主觀である。言葉を出した時には感情其者が消えて失ふ。唯、其處に感情を知ると云ふ事丈けであります我々が何とか言葉を使ひます所には唯、形式たけが出

て居る。眞の美と云ふものは我々の思慮詮索を離れた直觀に依て出て來るのである。斯ふ云ふ繪を書いて滿足をせよと云ふて出來た所の美と云ふものは恐らく本當の美術とは云はれない。言葉にも及ぼす、考へにも及ぼす、どうする事も出來ない誠を掴んた時に直觀するのである。夫故に以心傳心と佛教に云ふて居りますけれ共左樣な宗教の心持を人々等に傳へる爲めに、美しいと云ふ感情を美しいと傳へる樣に、形式を離れては宗教と云ふものを人間の世界に傳へると云ふ事は六ケ敷いと思ひます。自分が思慮詮索を離れ、本体的自然に觸れた時の直觀である。自分の心を離るれば眞と云ふものが掴めるが、斯ふ云ふ事になると多く議論があります。言葉を離れると申しますけれ共、然し乍ら尙一定の形式と云ふものを人間の世の中には排斥しない。夫故に形式其者が宗教でないと云ふ事を理解すると同時に、形式其者を破壞すると云ふ事は精神的宗教を傳達する上に於て宜い事で無いと思ふ。唯、形式のみに就て宗教を議論する事は考への足らない事たと思ひます。形式を破壞すると云ふ事は、宗教の傳達を破壞する所以であらうと思ふ。所が其宗教の形式と云ふ

ものは、今申した通りに自分の心の中に起きて來る、其心持を言葉に依て傳へる。言葉と云ふのは即ち概念である。概念と云ふものは、諸君に說明する必要はないけれ共、概念と云ふものは實在して居ないもの、例へば、人と云ふものは概念である、人と云ふものは實在して居ない。實在して居るのは男女の區別がある。夫々個人性を持て居る者なれば實在すると云ふ事が出來る。斯ふ云ふ事が澤山あるから夫を集めた——一寸名前を付けて置かないと判らない——人と云ふ概念に依て、頭があり、顏がある人間を考へる、其處に概念と云ふものは實在して居ない。唯實在して居るものは個人てある。其個人を集めて概念を使つて夫を人と云ふて居る。斯ふ云ふ事は多くの佛教の說明には盛んに用ひられて居た。彼の那先比丘の問答の中には斯の樣な事が適切に說かれてある。兎に角、人間と云ふものは具体的に何の某と云ふものが居るので、其處へ人間と云ふ名前を付けた丈けである。我々が言葉を使ふと云ふ事は唯概念として出して居るのであるから、其言葉に囚はれると云ふ事は、結局宗教の眞精神を休認する事が出來ぬのである。故に佛教では、どの宗旨でも夫は喧しいが眞宗で申す、自分の計ひを止める事が夫である。又左樣に云はなければならぬ。我々が形式を用ふると云ふ事に依て其形式に囚はれてはならぬ。言葉の中に含まれて居る本當の意味を了解する事が必要である。甚たしいのになりますと說教を聽いて其の言葉を其儘、素朴的に信仰して、自分の氣に入つた時には良い說教だ、氣に入らない時はあの說教は駄目だ、あれは判らぬ等と批評するが、判るも判らぬも無い、宗教は良く文字を解する所にあるのではなく寧ろ、判つたら宗教では無いと私は極端に申し度いのてある。人間の認識の形式を離れなければならない宗教を如何にして知る事が出來るか、よくそんな事を申す人があります、人が死んた後には如何なるか、如何なるか判らぬ。死んたら又生れ變つて生きるか判らぬ。誰がそんなものを見て來たか。誰もそんなものを見て來たものは無い。死んたなら全く蠟燭の燈が消えた樣なものだ。等と人間が宣い加減な事を書いたり、云つたりして居るが、夫は宗教に何等の關係もない。宗教と云ふものは左樣な事を考へて居るのでは無い。かゝる事は印度の婆羅門に申して居る事で

ある。印度の婆羅門が釋尊に種々の事を聽いて居る其中に

婆羅門。如來と申すものがありますか又極樂や地獄と云ふものが本當に實在して居りますか。

釋尊。お前達はそんな事を聞く爲めに自分の處へ來たか。自分はそんな事を何でも無いと思ふ。人間が人間の智慧を以てそんな事を極めても駄目だと云ふ風な問答がありますが私も實際左樣に思ひます人間が人間の智慧を以て如何なるかを極めた所が、夫は學問としては面白い事であるけれ共、宗教と云ふものは學問では無い。宗教と申すのは自分の心の内に、別なる力を取り込んで、自分の力を强くする事であるもつと夫を判り易く云へば、自分の靈の行先を決める此の精神的の問題、佛教から云へば私一人の往生の爲めの宗教である。私の心の内の問題である。私が死んだら如何なるか、夫を人に聽いて何の役に立つかと云へば全く無駄事でありまして、只死んだら極樂に行きます。夫を信用出來れば宜敷いが、信用出來ない判らぬ事を種々考へて夫で結末が出來れば、學問と云ふ事の結末がつく譯である。釋尊のは云れる樣に夫は人らぬ考へたと云ふ。學問をするなら別である。宗教にも宗教の學問が別にあるから、夫は學問しても宜敷い。講譯をしたり、佛教の歷史を說いたりする種々な學問があるから夫はするが宜敷い。宗教としては學問でなく、我々の智識を離れなくてはなりませぬ。其宗教と云ふ事も精神的宗教として人から人に傳へる爲めには形式は如何しても入る。其處に人間が智慧の働きを使ふ、たから人間の智慧の働きが進むに隨ふて、宗教に對する形式と云ふものは段々變つて來る。夫は概念が變るからである。其の變つた概念に相當して宗教の形式と云ふものが段々變つて來る。其点に於て何時でも科學と宗教と云ふものは親密な關係を持つて居る世の中には科學が進歩すれば宗教が段々と勢を無くすると隨分云ふて居るか、夫は宗教が變つて行くのではなく宗教の形式が變るのであります。夫は變るのが宜敷い。科學と云ふものは外界の機械的作用に順應して、夫を生活の用に供する事であるから、夫で宗教と科學と雖も外界に對して我々の思想が順應して行く所の本當の力に過ぎない。故に宗教と云ふものは全体としての生活を目的として現はれた働きであるから、科學

は生活の一部に過きぬから科學と宗教は餘程性質が違ふ。さう云ふ意味に於て科學と宗教と云ふものは全く領分が違ふものである故非常な親密な關係を持て居る宗教の形式は何時でも相當して居る。智慧が進むに隨つて宗教が違つて來る。其處で自然觀と云ふ事を考へなければならぬ。希臘の古代の人の考へでは人間が萬物の中心である。感覺的に我々の知る所のものが萬物の本性だと、斯ふ決めて、而して丁度子供の樣に極く素直な人間の心持として世の中を眺めて居た。そこでさう云ふ自然觀で基督教と云ふ樣な宗教の形式を拵へた。卽ち、聖靈の起りと云ふものは世界を離れた神の働きでありまして、神は世界を作り、人間を造り總てのものを作り、そうして今日出來たものであるから、我々は神の意志に隨つて生活をすゝめなければならぬと云ふ、其自然觀から、宗教と云ふものが起きて居るのであらう。此の自然觀は十六世紀頃からして段々變つて來て居る。十七世紀では自然科學が非常に盛んになりましたから、すつと變つて來て居る。十九世紀以後になると斯ふ云ふ風な自然科學は用ひて居ない其の爲めに度々、自然科學の學者が基督教の方から迫害を加へられて死刑になつた人もあります。又近頃になつて、新聞に、亞米利加か何處かで問題になつて居る斯ふ云ふ自然觀は今日我國の小學校を卒業し、中學校を卒業した者は勉强して居ない。たから左樣な事を信して居る者はありますまい。左樣な自然觀よりもつと進んだ今日の最も進歩した科學の上に立つた自然觀を學校が教へて居る。故に現代人は左樣な古い自然觀の宗教の形式には近寄り難い事と思ひます。それから左樣な形式は破壞さるへき事と思ひます。尙又それか至當たと思ひます、現に我國の佛教は夫に依て形式を變へて居る。歷史を考へて見れは明らかに變つて居るのであります。どうも今頃の若いものは寺に參らぬと云ふ苦情を聽きますかこれは心から參らぬのてはなく形式が變つて居るからである。然るに宗教の形式と云ふものは宗教其者てはあります。基督教は其点に於てひとく昔の自然觀に基ついて立てられた形式を持つて居るから、其形式に餘程の改正を加へなければ現在の宗教として其の働きをする上に於ては六ヶ敷いと云ふ点が多いと思ひます。佛教は幸と申しますか其教へを樹てた釋尊がえらいと云はふか、偶然と云はふ

か始めから、自然を眞直に見て、而してそこから考へ起した宗教であると云はなければならぬ程の自然觀が今日進歩した自然科學の考へと同しものてある。佛教では人間中心の考へは始からない。佛教の自然觀を一言にして盡せば、諸行無常である。即ち今日の自然科學と云ふものは全く此の諸行無常を說いて居る。諸行無常と云ふ事は、總ての事に常と云ふものが無いと云ふ事である。吾人の身体にしても、世の中のものにしても總て變りつゝある。夫たからさう云ふ風な事であるから、論理的に必す諸法無我、總てのものが無常であり、總てのものは變る。人間の此体でも頭の先迄毎日變つて居る。故に我と云ふ事は畢竟精神の働きが唯、連續して居る、其の連續の狀態丈けを我と云ふて居るので、定つた我のないものを、定た我がある樣に思ふて、其の我が宇宙の我に別れて來たのであるから宇宙の我に歸つて行くと云ふのが婆羅門の教へである釋尊は全く其說に反對して居る。而して無我を主張して居られる。何も固つたものが無い。常一主宰の我が無い。夫故、多くの人の考へて居る樣なさう云ふ意味の魂がある。死んたなら極樂に行く魂もある。釋尊以前の印度の教へでは其の魂が耶摩と云ふ國に行つた。耶摩とは翻譯すれは天上て、魂が天上に行つた。其の始めて死んた人間の行つて居る國の事を極樂といふた果して極樂であるか判らぬ。其の所に――左樣な事は釋尊は全く反對である――常一主宰の我と云ふものが無い諸法無我……人間と云ふものは五蘊と云ふものに固つて居る。精神と肉体とが夫が一所になつて身体の働きである精神の現はれが身体、精神と身体が一つである。夫故に諸法無我と云ふ。故に我々の行先は涅槃寂靜で其處に行つて初めて我と云ふものが落着するのである。此考へは、今日の自然科學の哲學の上に一元論と名付けて居る事と同しい事であります。

精神と肉体を別けて考へ無い。そうして行く所は全く今日の一元論と同しいのてあります。自然觀の上から考へて見ますと、佛教と云ふものは今日の自然科學の考と同しい考への下に立つてそうして夫から宗教と云ふ意識の働きを備へる。西洋殊に獨逸の學者の中には一元論を以て宗教に代用しようと云ふ運動をする人があつた。有名な物理學者オストワルと云ふ人等であります。其一元論の團体には澤山な仲間がある。そして既成基督教に對して反對の方に出て居る。獨逸は御承知の如く基督教が國教である。夫たから彼等は政府から押へつけられて居たが、其運動は仲々盛んであつた、雜誌を見ても全く此の一元論を元として宗教に代用して行かうとして居る。かゝる運動は私共の考へからすれは宗教の形式にあきたらない人が何時でもやる運動で、而して夫か他の宗教に影響して居る。佛蘭西のコント氏等は既成宗教を排斥したけれ共、それに依て精神生活の空虛を感し、其の空虛を塡充するために人道教を起したのてある。佛教て云ふ涅槃は人間の智慧の限りを盡して考へても、到底思慮分別の及ふ所でないから、無我の狀態となつて大きな力に縋つて行かなければならぬと云ふ所迄で行つたらよいのである。どの道から云つても宜敷いので只た行く道が違ふ丈けであります。此頃方々で、宗教の革命と云ふものが起つて參りますが、佛教が若し革命すれは釋尊に歸れと云ふ事であると考へます、宗教は決して學問ではない又知識でない。自然科學は何んな場合にでも昔の人に歸れと云ふ事は無い。どん〳〵進歩して行けと申します。けれ共宗教は概念を捨てなくてはならない、概念を去つて行く所に宗教の新生命があるのであります。宗教に入るには、大學の博士でも何でもよい同しい事てあり、共に概念を捨てなくてはならぬ。其概念を持つて居る人が不幸である、夫れを捨てるのが困難である。其の捨てなくてはならぬ所に今の智識階級の苦しみがある。其概念を捨てゝ、絶對的の所謂自然、本体的自然に接する事が出來たならば、我々は何時でも宗教と云ふものを味ふ。其處で宗教では絶對の罪惡と云ふ事が無い必らす如來によりて許容されるのてあるから絶對の力を是認したる處に我々の行先は涅槃寂靜であると云ふことが出來るのである。夫は佛教で之を三法印と申しまして即ち佛法のきまりでありまして夫がついてしまはなければならぬ。即ち諸行無常印、諸法無我印、涅槃寂靜印の三つを三法印と申して三つの印がかついて居るのであります、此處に於て、佛教と云ふものは、今日最も進歩した考へを持つて居ると云ふて宜敷いのでありょす。自然科學の其考へと全く同しであると云ふ事は、佛教と云ふものを現在の多くの人に味ふ上に於て大變都合のよい教へたと思ひます。都合がよいと云へは只現在の狀態が惡いので、教へ其

ものは正しい教へたと思ふ。所が此頃、一寸した神の御告げたと云つて種々な天啓と云ふものを持ち出して大きな聲を出して御祈りをする。其の宗教の形式は本當の宗教から本當に緣の遠いものたと思ふ。夫から宗教の形式は宗教ではないけれども、我々が宗教其者を味ふ上には形式を必要とするのであります。だから形式は尊いものである。形式は破壞すべきものでないと思ふ。形式を極度に守て、夫を何處迄も動かす事の出來ない事は、宗教に對する人間の精神作用だと思ふ。人間の精神作用は段々發達して其の精神作用を指導すべき形式と云ふものは必らず備へるのである。宗教の形式は左程に固執すべきものでないと思ひます。然し人間は因襲に因はれ易いものであるからそれを急に直す事は出來ないが唯、英斷の人が出て來ない以上は社會に喰付いて後から後からと其の形式が變つて來るのであります。其の形式と云ふものは決して破壞すべきものではないと思ふ、是は其点に付て後から申しますが大概私の考へを御了解下さる事と思ひます。

宗教は心の内を說きますから、山と云ひ、川と云ひましても、心の外で客觀に說く所の山と川とは違ふ。此處に水差がある。是は水指からして光線が反射して目の中に這入つて目の中に是と同し形を結んで心の中に這入つて來る。然し佛教では是れと反對で、心の中が先である。心の中に先に形が出來なければ是がない宗教と云ふものは主觀の問題である、心の内の問題である。此の水指と雖も此水指は私の目を塞いでもある私の目に光線を入れなくとも是は此處にあるに決つて居る。全く客觀的の宗教の上には何でもない。科學では全く客觀のものを問題にする。宗教と云ふものは心の内の主觀の問題であるから、心の内に現はれて來た時問題にする。地理學的に云ふ山や川を問題にするのは地理學。宗教はそんなものを問題にするのではない宗教〳〵と云ひ乍ら矢張り客觀の事を云ふならは夫は宗教學である。學問と宗教とは全く領分が違ふのである。今宗教としての佛教の話をしやうと思ふ。學問としての領分は廣いから、宗教は道德の方から見るも、其他種々の方面から見る事も出來ますが、一切の佛教に對する學問を離れ、唯宗教としての道を行くには、佛教の言葉では『三界唯一心』或は「總てのものか反響する」、左樣な言葉が澤山使はれてあつて、夫に歷史的の意味も加はつて居るから、種々說法は變つて居るけれとも何にしても心の内に其の元があるのである。佛教を宗教として見る以上は主觀の問題にありて客觀的に考へた時は心の學問である。宗教は心の内でなければならぬ。論語の中には『知る事は易けれども行ふ事は六ヶ敷い』と云ひ、我々の心の内に外なる力を取り入れて心の内を强くしなければならぬと思ふ。からして、如何しても左樣しなくてはならぬと云ふ時に現はれて來た心持が宗教心である。人が批評しやうとも動く事のなく、人が何としやうとも頓着しないのであります。こう云ふものは狂人に澤山あるが、狂人とは違ふ。然し頑固な人は無闇に自分の說に固執して、他の人の說を蔑すと云ふが、自分の都合で惡いと思へは如何でも變るならば頑固ではない。宗教の頑强は左樣なものではない。自分の勝手に轉回するのではなく自分の計ひを止める即ち意識の計ひを止める事が出來るから其處に自然法爾の念が起きて來るのである。それが實に力强いのであります。今日御話したのは、其の形式を酷く輕んずるから、私は決して輕んずるものでないと申したので、私の話をして行く内に形式の大切な事も十分御賛成を得らるゝ事と思ひます。

第三講

是迄御話致した事は、今から御話しやうと考へて居ります佛教の科學的の說明とでも申上げてよいと、斯ふ考へて居ります。其說明をする爲めに、昨日先つ概略、此科學と宗教との關係の事に付て其御話の必要と致す丈けを拔いで御話致したのであります。だから今から釋尊の教に付て御話致さうと思ひます。今私の御話致します釋尊は、歷史上の人物で、迦毘羅（Kapilavastu）と申す城を持つて居た、國王の息子で、小さい時から宗教性に强かつた、云はば宗教意識を瞭きりと出す性格の人であつた樣に考へられる。皇太子であり而かも相當に榮華な生活をした人でありますが、三十歲の時に宗教性が强く出て來て、生、老、病、死と云ふ苦しみの中から離れたいと云ふ欲求に迫られ、其年に宗教の形式を踏んで、家を出たのである。所謂出家をしたのであります。さうして、其時に其地方で最も名の高かつた阿羅邏（Alasa）と云ふ學者の所に道を聞きに行つたのであります。此の阿羅邏と云ふ人は

數論學者の親方である。カントと申す人が始めたので其學派の後を繼いで其當時有名な人であります。哲學から申せば偷伽哲學で（Yoga）第一に靈魂を信ずる。第二に冥想をする。第三に苦行をする。實際に申せば強い道德的生活をすることに依つて、生老病死の苦しみから脱れ樣として、偷伽哲學をもつて來て、夫から發達した數論（Sankhya）で其の學派の親方である。數論では今申した偷伽哲學の上に其の抽象的の議論に依て、正しい道に出やうと云ふ說が加はつて居る。其說を阿羅邏に聞いたのである。然し其の敎へでは所謂悟りを聞く事が出來なかつた。此事に付ては、此阿羅邏との問答が此の御經の中に書いてある。此問答の末に「貴下はもう何年修行をして居るか」と斯ふ釋尊が聞かれたら「道に入つてから實に百餘歲を經て居る」そうすると釋尊が「夫れ丈けの年限をかかつて、それ丈け勉强して得る所が僅か夫れ丈けか」と云つて、此の阿羅邏の所を去つて第二番目には優陀羅迦（Uddaka）と云ふ先生に付て調べたが、優陀羅迦の云ふ所も大體に阿羅邏の說と同じい樣であつたから、此處でも悟りを聞くことが出來なかつた。夫れで已むを得ず方

々を歩く事を始めた。尼連禪河（Nairanjana）と云ふ河の邊りにある優留毘維（Uruwela）の森の中に這入つて、而して苦行をして居た。是が或人がお前は八道を求めると云ふけれ共道を求めるには道德を崇拜する道を說く事が出來ないと云はれて、森の中に苦行を始め、其時に五人の弟子が居たと申しますが、是は元々釋尊が城を出た時に追かけて行き連れて來いと云ふ王樣の命令を受けて來た五人の男である。けれども其五人の者も矢張り釋尊と一所に苦行に這入つて了つた。夫で六人が優留毘維の森の中で苦行をした事か凡そ六年間程である。其結果は身體が痩せる一方で骨と皮になつてしまつた。そうして道を得る所は少しも無かつた。是では仕方がないと考へられたのであらうか、或日尼連禪河の水を浴びる爲めに這入られた所か、身體が痩せ疲れて居る爲めに足がふらついて倒れんとせられた。其處へ牛乳屋の娘が牛乳持ちを廻りかゝり含ませた。牛乳をささげたので、釋尊は我に返り、夫から思ひ返して難行苦行をしても何等得ることはないと云ふので優留毘維の森を去つて街に出られた。所が驚いたのは一處になつて居た五人である。道を求めると云ひながら僅か五六年の苦行に耐へる事が出來ないで苦行を止めて而して街に出て行く樣な薄志弱行の人には供をするに足りないと云ふて、其五人の者は釋尊と別れた。釋尊は優留毘羅からベラルと云ふ所に行つてしまつた薄志弱行の者には相手にするに足らぬと云ふ主張の下に又苦行の續けた。釋尊は一人である菩提樹の下に冥想に入つた。それから六年後、十二月八日の朝夜の引明け方と云ふ時に、其時忽然として悟りを開かれた。而して是を傳へやうか、或は自分が獨り道を得たのであるから、自分丈けで滿足しやうかと云ふ其心を決めるのにひどく迷はれた。道を說いて良いか、惡いかと云ふ決心のきまるのを妨げをする惡魔が相をあらはした。此樣な事を御經に書いてある。自分が獨りで得たのであるから自分丈けで滿足しやうかと云ふ事に付てひどく考慮された事でありませうが、結局人に傳へ樣と云ふ事になつた。處が夫を誰に傳へ樣か、其の考へた結果、前の第一番目に敎を受けた、阿羅邏と優陀羅迦の二人に、自分の得た所の道を話すべく行つた所が阿羅邏も優陀羅迦も已に死んで居つた。其處で更に考へられた結果此道を傳へるのに先に薄志弱行と嘲笑した五人の者が居るベナーレス（Benares）に行つて、其五人の者に自分の得た道を傳へ樣と云ふ心を起して夫からベナーレスに行かれた。而して其五人の者に會はれた所が、五人の者の云ふ樣には、御前さんは昔の主人であるから敬意は表するが、あなたの云はれる事は聞かない、又私共もあなたに云ふ事もない、との事で、釋尊の云はれる事を聞うともしない。所が懇々と話をされた結果、其五人の者が服した。其處で其五人の者から夫々知つた人の間に、此事を傳へ、約四五十名の者が釋尊の敎へを聞かうとして仲間入りをした。其處で五十名の者を相手として說敎をされた。之れが釋尊成道以後、第一番目の說敎でベナーレスでせられたから之をベナーレス說敎と云ふて居る。此時の說敎は、當時印度に行はれて居た二つの極端な生活をして居たものに對して說かれたもので、其一つの極端は、快樂を欲する生活で、左樣な生活は下劣で不遜て品位がない、全く無意味である。我々が榮耀榮華な生活をして興樂をすると云ふ事は下劣で品位がない。俗惡だそうして益する所は少しもない。左樣な極端な生活は避けなければならぬ、と天等に敎へ、もう一つ、第二

の極端は、自己を苦しめる生活、其の生活は苦しみ多くして利益なく、且つ品位がない、それであるから難行苦行と云ふ事も極端である。斯の樣な極端は唯だ苦しいのみで品位がない、汝等斯の如き極端に走る事なき一つの中道を見出す、此中道こそ安樂な道である。然らば云ふ所の安樂は何であるか、夫は八正道である。と、斯ふ云ふ說敎をされた。夫れから次に執着する事は皆苦しみである、苦しみの起る原因を說き、此處に四諦の眞理と云ふ事を說かれた。即ち八正道を說き次に四諦の眞理を說かれたのである。この八正道と四諦の眞理は所謂、眞理の認識である。眞理を全く認めたのであつて、而して夫を體驗した、眞理を認識し夫を體驗して、自然の形で夫を敎へ後に云ふ所の佛敎を成立されたのであります。

釋尊は夫から、ベナーレスで第一回の說敎をした後優留毘羅の聚落に行かれて、其處で、迦葉(Kasapa)と云ふ當時最も有名な拜火敎の親方に會はれた。此の迦葉は兄弟三人ありまして皆學者である。火を拜むと云ふ其の敎を受けて居たのであります。其處で迦葉なるものが拜火の敎を講じて居たが、釋尊の敎を聞いて

三人共に弟子となつた。恰度其時にウルクラの山の上に火が炎ゑて居るのを見て其の火の炎えて居るのを說敎の題目として法を說かれた。此時の釋尊の說法は『火より受くる敎訓の經』(Adittapariyava suttra)と云ふ名を以て三藏中に現存して居る　此の經は、釋尊が如何に當代の外敎の宗敎的の儀式の意義を變じ、又普通生活上の事柄の意味を取り來つて、釋尊自身の新しい敎理を諄々に敎へられたかと云ふ事を示す好例であります。此經を見ると、一切のものは炎ゑる、それはかうだと認識し得た概念に依て生じた精神の働らきも皆炎ゑる。我々に依て生じた感覺も炎ゑる。總ての感情も炎ゑる。眼、耳、鼻、舌、身等の感覺の働きに依る精神の印象も皆な炎ゑる。何が爲ゆに炎ゑる。夫は全く自分の心の働きに依て炎ゑる。そうして是を詳しく實際的に說明されてあります。是が釋尊の成道第二の說敎である。是から後の說敎は、多くの人を集めて其者に向つてされたと云ふ事は極く少い。是からの說法は皆な個人的であつた。所謂、對機說法、應病與藥とも云ふ事が出來やう。これは極めて必要な事と思ひます。今日の我々の知識に依て考へて見ると、如何にも宗敎的宣傳の態度である。宗敎と申すものは今御話した樣に、宗敎意識と云ふものを、段々發達させる上に於て必要であるかも知れぬが、一つの知識として注入すべきものでないと思ふ。知識を注入せしめるのが宗敎の學問である。宗敎は學問ではない。段々發展する樣に努めるより外はない。釋尊の說敎と云ふものは何時も左樣であります。夫を最も明瞭に云ふて居られるのは、法句經と申して、釋尊の言葉を申された御經であります。可なり古く出來た御經であります。獨逸語にも和蘭語にも、支那語にも飜譯されて居りますから　どんな人にも讀まれます。此中に『如來は只だ法を說くのみ』と書いてあります。ともかく多數を集めて學問的に知識を注入されたと云ふ場合は八正道を說かれたものと、四諦を說かれたのみと思ふ。情熱が炎ゑると說かれた言葉の後は人を相手に種々な事を說かれて居る。全く對機說法である。今日の言葉で云へば傳道式であり講釋式である。全く其人相應に法を說いて、其の人の宗敎意識を發達させる樣に說かれて居る。私共の知つて居る範圍、殊に親戀聖人がさうであり、蓮如上人もさうである。人を集めて說敎した事が少しもない。宗敎として、人から人に傳へると云ふ場合には、どうしても言葉を以てしては、唯、形式に渡るのみで、體即ち身體の言葉を以て動かねば動くものでないから、言葉だけを聞くのでない。唯だ心が一致せぬからどう　ても夫に依て宗敎意識が充分に出て來る譯はない。釋尊の說法はいつも左樣であるから、其事は特に御承知置を願ひたい。キサーゴータミー(Kissagotami)と云ふ女が子供が死んで非常に落膽して、どうかして此の死んだ子供の息を吹き返す樣にと醫者に賴んだ。無理な話で、醫者から、死んだ者はもう生きては來ないと拒はられた。其處で仕方がないけれども、如何しても此子供を生かし度いから再度賴み込んだ。醫者はそれは到底出來ない事であるから、自分には出來ないが私の師匠は夫をするからと云ふと、キサーゴータミーは、あなたの御師匠は誰ですかと尋ねたので、醫者はそれは釋尊だと答へた。そこで彼女は死んだ子供を抱へて釋尊の處へ行つた。所が釋尊は彼女に藥を持て來いと云はれた。— 印度では醫者が病人を診まして其藥は、患者の方から揃へて持て行き、醫者が夫れを調合して患者に與へる、左樣な習慣がある。—

そこで彼女はどんな藥を持ちて來ませうかと釋尊に尋ねたので、釋尊は芥子の粒を持て來い但し人の死んだ事のない家の芥子粒を貰つて來いと云はれた。彼女はあらゆる家を尋ねたが何の家も皆な死んで居る。夫で釋尊の處へ歸つて來た。釋尊は芥子粒があつたかと尋ねられると、人の死なない家は一軒もないと答へると釋尊は、お前は自分の子供だけ死ぬると思ふたか、人間は總て死ぬるのだ。と云はれた、其處で彼女は參つて失つて悟りを開いて夫から尼さんになつて弟子になつた。女に對して女らしい事を、偉い人には偉い事を少しも飾らずに說かれた。ともかくも、應病與藥の方法を以て眞の宗敎意識を皆に起さすべく傳道的のやり方をせられたのである。釋尊は成道第二の說法を濟ませられて夫から王舍城（Rajagriha）に行かれた、そうして其國王、頻婆娑羅（Binbisara）と云ふ方がひど釋尊の敎を信じて居た。此時、舍利弗（Sogalla na）と申す、是は系統的である婆羅門の敎へを講じて居た舍利弗ともう一人の目捷連（Mogallana）と云ふ此の二人が弟子になつた。其弟子になつた手續きが面白い舍利弗は智慧第一と云はれた偉い人である。婆羅門の

中の難行苦行の方の大家である。其の舍利弗が或時道を歩いて居た所が向ふの方から非常に態度の麗しい、非常に人格の尊い沙門がやつて來た。舍利弗はひどく感じて、其の沙門に近付いて、貴下は一體誰人を師匠として學問をせられたかと聞かれた。訊かれた人はアシバシッドと云ふ人で前に申した五人の中の一人である。アシバシッドは私は釋尊に付て勉强を致しましと答へると、舍利弗は、貴方の先生の釋尊は何と云ふて敎へましたかと聞けば、アシバシッドは日尙ほ淺くして全體は判りませんが、略して云へば、總ての現象は因に依つて生ずる。世の中の一切のものは種子ばかり生ずるので、如來はあらゆる苦みの原因を知つて其の苦しみを亡ぼす事を知つて居るのであると申しました。舍利弗は非常に感心して、其の敎への意味を理解して、「總て生じた因は亡びる、若し法と云ふものが汝の云ふが如きものであるならば、汝は實に過去嘗て見る事を得なかつた苦しみのない世界に到達するであらう」と云ふアシバシッドの言葉を言葉を聞いて分れたそうして前の師匠の所へ行き、今日途中でアシバシッドに會ふた所が、彼を通して釋尊の說かれる敎に會ふ

た事を話しそうして、其の說に敬服したから貴方の處を逃れて釋尊の處へ行きますと舍利弗が師匠に云ふた師匠は間違つた人の說かれた其の樣な敎は聽くものではないと云ふて止め樣としたが、舍利弗は夫を振り切つて釋尊の下に走つたのである。

釋尊が舍利弗に對し敎へられた其敎へが、今現に傳はつて居る。佛敎としては最も有名な言葉で『諸惡莫作、修善奉公、自淨其意、是諸佛敎』と經文に書いてある。舍利弗は非常に難行苦行をやつて居る大家であるから、左樣な人に向つては、諸惡莫作修善奉行自淨其意是諸佛敎と敎へ、是々の惡い事をしてはならぬ、これ〳〵の善い事をやつて行けと云ふ風に敎へられた。我々は斯ふ！た釋尊の敎に對機說法である事を常に考へなければならぬ。此樣にして段々歸依する者が澤山出來て參りましたが、又一方には反對の者も出來て參りました。其の反對した中で最も有名なのは、釋尊の從弟で、提婆達多（Devadatta）と云ふ人で、此の人は釋尊が結婚した時から恨みのある人だと傳へられて居る印度ではお嫁さんの妾る時には、嫁さんを、嫁婿さんの方で競爭で以て勝つたものが貰ふ事になつて居る

候補者が出て來て夫がお互に競爭をやつて勝つた方に嫁さんが行くのである。耶輸阿羅（Yaśodhara）と云ふ婦人に對して澤山の候補者があつて——其中に釋尊も提婆達多も其他も入つて居る——其の候補者が競爭の結果、耶輸阿羅は釋尊の嫁さんになつた。此時から提婆提多の恨みが骨髓に徹して居た。夫故、釋尊が法を說き、段々其の信從が多くなるに連れて提婆達多が反對した。釋尊を殺さうとした事も幾度もありますがそんな問題は別として、敎へ其者に反對したのは如何樣な反對かと申しますと、提婆達多と云ふ人は、激しい苦行と用意をしなければ道と云ふものは修められるものではない、僧侶と云ふものは、即ち、山の中に住んで、人の里に出るものしやない。人から物を貰つて喰ふもので、人から寄附を取るものではない。身体には襤褸を纏つて居ればよい、木の下に寢、石の上に寢魚の肉等は喰つてはいけない。それに反對するものは敎團から追ひ出さねはならないと主張した。然し釋尊は左樣な身体を苦しめるのは極端である。誠の道を說くのたから生活は其まゝでよい、苦しい生活をするには及はぬ、そんな苦しい極端な生活は無用であると全

く反對され、彼等の說を斥けられた爲めに、提婆達多は五百人の人を連れて釋尊の下を去つてしまつた。さう云ふ具合にして釋尊に感情的に反對して遂に感情の炎に燒かれて死んだのである。こんな事は釋尊の傳記書を調へて見ると著しく出て居ります点である。釋尊が宗敎として起された敎へと云ふものは、生活を其儘、進んで行くべきであると云ふ事は段々我々は理解する事が出來る。提婆の事はまたあるのでありますけれども一寸休憩致します。

釋尊の敎へは、釋尊の說敎に依て明らかな通り、四諦の眞理を原則として行く事である。四諦の眞理の認識は、夫を體驗する所に宗敎が現はれて來ると云ふ事は云ふ迄もない。四諦の眞理と申すのは、苦、集、滅道で、諦と云ふ事は、眞理を審かにすると云ふ意味であります。生、老、病、死、皆苦しみ、人間の心に現はれて來るものは皆な苦しみと云ふ眞理を知ると云ふ事である。夫れはどうして其苦しみが起きるか、夫は無明である。業に依て、我々の心の働らきが無明であり、業である。所謂煩惱がある爲めに苦しみ、之を治めるが爲めに四諦の道理をきはめるのである所謂苦しみを亡ぼすには如何するかと云へは其の道を跡んで行かねはならぬ、其の跡んで行く土臺、其の土臺を八つの正しい道、即ち八正道と立てる、八正道の事は明日御話しを致します。結り道を跡んで行くと云ふ事であつて、これは小乘の敎への書物に書いてある。後の佛敎の書物には書いてなけれとも、佛敎で小乘、大乘と云ひますが夫は後の人が云ふたので自らして小乘と云ふ事は云はない。小乘と云ふ事は自分丈けの乘る車で人は乘せないと云ふのたからそれを後の人が誤解して佛敎は極めて個人的な、妄利的なものたとして、佛敎は小乘的なものたと云ふて居るが眞の佛敎は小乘と云ふ原始的な考へから、大乘と云ふ發展した考へを持つて來る樣になつたのである。全く進んたものである。釋尊の側に居て聞いた者、左樣なものが、聽いたり考へたりした事を集めて書いたと云はれるものが阿含經で所謂小乘敎である。左樣なものは一般のものを救ふ事が出來ない。乘物が小さいからもつと大きくしなければならぬ。釋尊の言葉、其儘、若くは夫に近いものを、阿含に書いたものとすれは　大乘に書いてあることは釋尊の言葉と違ふ故に、大乘は佛說に非すと云ふて居る。大乘否認說、左樣な事は唯、言葉の戲れである。大乘が佛敎であらうとも、小乘が佛敎であらうとも、否、無からうとも我々が釋尊の精神を知るには小乘から始めて大乘に渡つて、一般のお經から知るのである。人間の思想と云ふものは、突如として起つて來るものではない。釋尊の思想と雖も殘らす釋尊の思想ではない。釋尊の說かれた流轉の問題、夫れから婆羅門で說かれた釋尊の業の說等は阿羅邏や優陀羅迦等について研究したのを用ひられて居るので、其の說を段々と進步せしめたのである。大乘の後になれは昔の小乘の事を說く必要がないから、夫を說かぬと云ふ事は當然な事である。說く必要がない。說く必要がないけれとも、順序がなければならぬ。發達した思想には必らす順序がある。進む上に於ては順序をふまなければならぬ。離れて居る譯はない。離れて出て來たものてはなく連續して出て來たものである。四諦の眞理を說いて而して八正道を跡まなければならぬと云はれたのを段々と後の人の心から釋尊の敎を味ひ、其處に種々の事柄か出て來たのである。それからして八正道と云ふ事を云はないと、今ては眞宗の敎へでは六度萬行、今は普通に三學と云ふ。三學と申すのは、戒、定、慧と申して、心の散亂を滿たす、智慧を磨くのである。六度云ふ事は之を分けたもので却ち八正道である。縮めれは三學である、中程にすれは六度、大きくすれは八正道である。釋尊が八正道と云ふて居らるゞのであるから八正道と云ふてよい。兎に角、其の八正道と云ふものを踐んでさうして行き着く先は解脫である。左樣な敎へであるから、釋尊の敎は六ヶ敷い。以前印度に行はれた敎へを通して種々の点に於て違つた特長がある。夫を考へなくてはならぬ。其一つとしてマーガンヂッドと云ふ婆羅門があつた、マーガンヂッドは婆羅門の敎へを奉して居たが、遂に御釋迦さんに歸依して、自分の娘をお釋迦さんに進めた。其時に釋尊の云はれた事がとう云ふ事を云はれたか、言葉其者は判りませんが書物に書いてある所では「大便や小便を包んた袋は人らない」と云　れたさうてある。隨分徹底した事と云はれたものである。そうするとマーガンヂッドは「あなたは如何なる哲學をやつて居られますか」と尋ねた――印度で左樣な偉い人は相當に哲學をやつて居る――。其處て釋尊が云はれる樣には「自分は何

れの哲學の學派にも屬して居ない、總て哲學と云ふものは何れも哀れむべきものである。佛の敎へるところは哲學の系統ではない。哲學に依らずして得らるゝ所の解脫の要を說くのである。如來の說く所は、哲學でもない。理論でもない。實際、我々人間の行くべき正しい道を說く、其の道のつきる所は涅槃である』と斯ふ云ふ風に云うて居られる。たから、其言葉を一面から考へると、釋尊の說かれた敎へは一面では實際倫理と同し樣に考へられる。一面に於ては哲學は何の役にも立たぬと云ふて居る。是は善く敎へなければならぬ事たらうと思ひます。

又一つには矢張り婆羅門の敎へに屬して居た、カーバチカと云ふ男が、釋尊に向つて、『私の己前に奉して居た婆羅門では昔の人が、古代の仕組が正しいもので其他のものは一切謬りである』と斯う主張して居りますが貴方の方では如何でありますか」と云つた。左樣な事は今でも善く云ふ事である。昔の敎たけが眞理で今の敎は皆な嘘た。私の方の婆羅門では昔の人が……と云ふのは吠陀聖典（VeDa）に書いてあるとたけは本當で後は皆な嘘たと云ふ意味で、釋尊に對して貴方の云はれる事は嘘であるがと聞いたのである。釋尊はカーバチカに對して聞かれる樣には、『お前の師匠は名は何と云ふか』カーバチカは答へて「誰某である」。釋尊は『それでは誰某の師匠の名前は如何』其の誰某の師匠の師匠は名前は何と云ふかカーバチカ「それは分りません」と答へた』そこで釋尊はカーバチカに對して云ふ樣には『お前の云ふ事は恰度盲目に手を引いて貰つて居る樣なものだ』と申された。手と手が縛つてあつても判るものでは無い。宗敎は眞情を人から人に傳へるものでない。宗敎はさうでなければならぬ。其處に哲學の系統を持ちそうして進んで行くと云ふ場合には、何處迄も哲學である其の哲學を体驗して、而して宗敎となつた場合には、例へば宗敎意識が發達して、其の宗敎意識と云ふものは皆な、同し事に違ひない。夫は人間の知識を超越するから同しい。即ち貴方の佛と違はぬ。私と貴方の極樂は違はふと云ふ事はない。然しながら、知識に依て行くとすれは違ふ。宗敎の精神——宗敎の智識に依らず、哲學の系統に依らないで行く所の道は、皆、同し事である。何の眞情がある。如何云ふ眞情がある。釋尊の說敎は對機說法であるから、隨分

譬へが多い。盲目が手を引張つて行つてもなんでもなは。斯ふ云ふ樣な譬は阿含の御經からすつと行はれて居る。御經をすつと讀んで居れは方々に斯ふ云ふ事が出て居る。さうして夫から進んで段々と、今日の大乘佛敎と云ふものが起きて居るのであります。即ち一つの眞情の原因と云ふものを與へて、是を信すると云ふ事は決して信仰でないと、釋尊はカーバチカに云ふて居る。即ち、其の自分の智慧を以て進む事は、一昨日も申上けた通り、私の信仰が智慧が變れはとうしても變らなければならぬ宗敎は智慧で以て左右すへきものでない要するに釋尊の宗敎は四諦の眞理と云ふ事を明らかに認識して、而して其認識に依て得た所の眞理と云ふものを、夫を驗体して、夫を自分の身体で味ふて、而して智識を離れ、思慮詮索を離れて、靈の動くまゝに、解脫の境に行くと云ふ事は、明らかてある釋尊自らの言葉には、「大法に依て自分は成佛する」と云ふて居る。夫はとうしてもさう考へなけれはならぬ事であります然らは解脫といふ意味はどうか。解脫といふ意味は、是は種々、專門の御方の說明がある。又ある事が當然であるが、然し釋尊の敎へを宗敎として考へた場合に、解脫と云ふことは、其當時行はれて居た言葉である、其の行はれて居た言葉の意味は「再生から脫れる」と云ふ事である。夫は如何しても考へなくてはならぬ樣な當時の思想である。再生、即ち吾々は二度生れて來るから苦しむ。生死の苦海を脫れる。無視して全く生れぬと云ふ事になれは、暗い苦しみからのがれる。此位に徹底した解脫は無いものである。前に述へた芥子の譬の主人公であつたキサーゴータミーと云ふ尼さんが釋尊の弟子になつた或時座つて燈をつけ樣としたら、臘燭が炎えて居たのが消えたのを見て、生きて居るものは必らす滅するのは恰度、燈火が消える樣なものである。只涅槃に入つた者たけは再ひ現はれて來る者はない、と斯ふ云ふた其時、恰度、釋尊が來られて、汝の云ふ通りた、我々の苦しみは生死であるから、生死の苦海を流轉するから苦しむ。業の綱に縛られ、生れたり死んたりして、苦海を流轉するために苦しみがある。全く生れないと云ふことであれは苦しみはない筈たと、夫を懇々と說かれた。キサーゴータミーの云ふ事を最もたと保証をして居られる。是はもう少し詳しく說明をしなければならぬ。多くの我々は死にたくな

い道を求めるために生れたものであるから、ほつたらかして、感情の滿足を得られる事がないと云ふ事を左樣云はれる人がある。是は考へが足らぬ。是は充分考へを進めなければならない。然し其事の御話するのを控へて、後世に書いてある解脫と云ふ事は外の言葉で云へは、とう云ふ言葉であるかと云へは、是は云ふ迄もない涅槃である。涅槃と云ふ、元來の意味は、全く消えると云ふ意味である。消滅すると云ふことである然し釋尊の使はれた涅槃と云ふことは、なくなると云ふ意味でない事は明らかである。外に種々な說明がありますが、種々の說明を合して見ると、夫は釋尊自身の言葉でないけれとも、釋尊の意見を最もよく傳へたと云ふ、舍利弗の言葉がある。舍利弗が或時行脚者に云ふた事がある。行脚者が、舍利弗よ、涅槃と云ふ事はとう云ふ事か、と聽いたことがある。そうすると、舍利弗は、苦しみの消滅、惑ひの消滅、夫れが涅槃である、と云つた。釋尊の涅槃も左樣である。我々が解脫をすることが夫れが涅槃である。それは經文を味つて見ると、舍利弗と同じく、苦みの消滅、惑ひの消滅と云ひ得るでありませう。

第四講

是から宗教としての佛教の本體に這入らうと思ひます。先づ、釋迦教の御話をして、それから彌陀教に移る筈であります。釋尊が入滅されましたのは、我國の神武天皇紀元前、約三百年に當ります。二百八十九年から四百年の間は阿含の御經に書いてあります樣な意味の佛教が盛んに行はれて居つたのであります。後に人が云ふ所の小乘の教へで、それから、二百年程經て即ち釋尊入滅から六百年の後、馬鳴菩薩の大乘起信論が出來て、それから佛教が哲學的に一つの組織を立つる樣になつたのであります。それから、百年經て、龍樹菩薩が第二の釋尊と云はれて、所謂釋尊の立てられた教へを、宗教的に實際的にしたのでありますと云ふて、差支へない。夫故に、釋尊入滅後七百年程經て出た、龍樹菩薩は、八宗の祖師と云はれて居るけれども哲學的に組織したのは大乘起信論であります。斯くの如くして夫が、宗教的に行はれて行つたのは龍樹菩薩、それが支那に這入つて、そうして我國に入つて來たのが、御承知の通り、欽明天皇の頃であります。それ故、我國に這入つたのは始めから大乘佛教であります。其の大乘佛教と名付けるものは、色々宗派と云ふものに分れて居るのであります。華嚴宗、法相宗、乃至、眞言宗等種々の宗派に分れて居るのであります。然しそう云ふ宗派に分れる、其の理由と云ふものは、心理の方から考へて見ると云ふと、宗教意識と云ふ事は、唯、それを開發する事に依て、外から力を加へて其の宗教意識を開發せしむる事に依て、各々が夫々の意識を發達することであると云ふ事に歸着するのであります。釋尊の口から出た一つの言葉が、八萬四千の法に分れたと申すのは、人々の宗教意識を、それを釋尊の言葉に依て夫々に特殊なる働きを以て、さうして現はれて來たので、宗教と云ふものは元來さう云ふ性質を持て居る筈のものであります。それだから、どう云ふ宗派が間違つて居ると云ふ事は、宗派を維持する上に於て必要な事でありますが、宗教其者に付ては、何の必要も無い。一つの宗派を維持して行く上に於ては信仰が違ふ、安心が異なつて居ると云ふ事も、恐らく云ふべき必要がありません。然し、宗教其者に關しては、安心も異安心もない。宗教意識は自から出て來るものである。自分の力を以て出す所其物が信心の宗教でない。惡い智慧を捨てゝ佛智を證得する所の、眞宗其他の宗教の教へがあります。我々が人間の意識の働きを普通に働かして到達した所は信心の宗教でない親鸞聖人の所謂方便の教、其者は宗教心理學の上から申すのであります。宗教と云ふものを一つの心の働きとして考へるには、どうしてもさうである。だから、我々は何れの宗派の教へを奉じても、どうしても行先は佛の本願であります。どんな教を奉じても、到達點は一つで其の事は明日又私の考へを御話致したいと思ひます。其の大乘佛教と申す事は、今申した通りに、釋尊の說かれた言葉、行はれた行ひ、夫を見て考へて其處に起つた一つの教へであるから、區々である。區々であると申すのは一つの統計と云ふものがない。それは阿含の御經を讀んで見なければ判らぬ。どう云ふ事が釋尊の精神であるか一つの統計を拵へて居ないから、それを取る人の心に依て如何樣にも取る。それで八萬四千の說が出たのであります。だから教へとして人から人に傳へると云ふことについて、極めて不便なものである。けれども、どう　ても、纏めて行く動機を作らねば不便であるから、それで自ら一つの統計と

云ふものが出來る。即ち、一つに纏める其纏め方も、理窟の上から考へて見れば、種々あるに決つて居る。實際あるのであります。然し左樣な事を一切拔きにして考へれば、佛敎の肝要は、法華經と華嚴經であります。それからして、大乘佛敎の根本原理は、法華經である、又華嚴經にあると云ふてもよい。さう云ふ意味に於て差支へないのであります。昨日も申した通り、釋尊の說は大乘說法で、それを纏めて、一つの敎へとして說く時には、どうしてもそれを統一しなければならぬ。華嚴經は智慧の方を主として佛の敎へを說き、法華經は佛の慈悲を主として敎へやうと云ふ。華嚴經は全く人の理性を說き、法華經は全く慈悲を說いたものであります。此の二つの御經に依て、釋尊の敎へを體驗して、それを說くのがそれが釋迦敎であります。此の釋迦敎と申すのは、宗派は別に論じないとして、法華經を主として、それをやらうとする所の代表として立つて居るものが、所謂天台宗、華嚴經は華嚴宗、華嚴經の事は暫らく置きまして法華經と云ふ經が一體どんなことを說いてあるか、是も廣く行はれて居るから、御承知の事と思ひますが、法と云ふものは、我々

人間の思慮分別の良く解する所ではない。左樣な妙法を體驗する所に、佛の敎へがあります。左樣なものを說いてありますから、其の說き方が我々によく判る樣に例へて「三界は火宅の如し」と云ひ、火事があつてどん〳〵火が炎え出したが、其親達が幸ひにして火を免れて出て來たが考へて見ると、子供が家の中に殘つて居る、火を見ても出て來ない。親の心配はどんなであらう、此の親の慈悲を示し、又長者窮子の譬への如く、親里を迷ひ出て、終に乞食に迄で零落した我子を尋ね探して親子の名乘りを上げ、遂に、其全財產を讓つたと譬へをして、如來の御慈悲と云ふものを、懇々と說いてあります。其の法華經からして、哲學的の考へを廻らした結果、所謂、天台宗と云ふものが出て來たのであります。天台宗では、哲學を本として、其宗派が起つて居りますから、其の法華經に書いてある、其事柄からして御承知の「諸法實相一念三千」と云ふそれを本として、天台宗と云ふものが出て來た。決して宗敎の理窟を話すのではない、天台宗の話をするので、斯ふ云ふ事は、宗敎として佛敎を味ふ上に、先づ知らねばならぬからである。諸法實相と云ふ事は、それは、實相と申すことは眞如、總ての法は皆な眞如の現れと申す。我々の事は一念三千の中に含んで居る。其の法華經を本として、それを哲學的に組立て、天台宗から、日蓮も、惠信僧都も、親鸞聖人も出て來るので、それを飛び越へて出たのでは無い。法華宗と云へばすく日蓮宗の事を申しますが、それは天台宗の事である。法華經を本として出た敎でやはり天台宗なのである。其の諸法實相と云ふ哲學はそれは六ケ敷い事と申すと、私の御話は、範圍から外へ出るけれども、私は此場合御話をするは適切と考へて居る。と云ふのは其法華經を本として起された、天台宗で、天台宗の歷代の僧侶の內で、支那迄名前が傳つて、支那では如來として敬つて居る、惠信僧都即ち源信和尙——淨土眞宗にも是人を七高僧の一人に入れてある——其人が天台宗であります。其著、往生要集で多く人に感化を及ぼしたのであつて、其中に說かれた眞如觀に說明してある所は、諸法實相であつて、世の中の事一切が皆、眞如である。極樂も眞如であるならば、地獄も眞如で總てのものが眞如の現はれであると、一念三千の哲學を實際的に說いたのであります。所がそうすれば、世の中には色んなものが澤山居る、或は蟲螻(むしけら)の樣なものが居れば、蓍生の樣なものも居るそれを皆な佛とする事が出來るか、成程、哲學の上から云へば、一切のものが皆な眞如の現れでありませうが、今我々の前に出て居るのは現象となつて種々出て居るので、それが皆な佛と云ふ事は如何して云はれるか。其處を惠信僧都が說明して、一切の衆生は皆な佛なりと云ふ事を心得す。若し一切が佛だつたなら、佛の難行苦行は始めから必要がない。衆生況んや此人間の中にも蟲螻の樣なものもあるが、左樣な一切のものが皆な佛と云ふ事は理由が分らぬ。又普通の人間が佛と云ふ事には、相好圓滿で三十二相を具へなければ、又、八正道をしなければならぬ、又智慧が一切のものに優れて居なければ佛にならぬ。左樣な事で佛と云ふてこそ厭けないと思ふ然るに烏の如きものを如何して佛と尊ぶ事が出來る我も人も是は元より同感であると、斯ふ極めて叮嚀に說いてあるのであります。斯ふ云ふ話を唯だ御聽きになつて釋迦敎と云ふ所の意味をよく御考へして戴きたいと思ふのであります。成程、哲學の上から考へたら、諸法實相に違ひない、即ち眞如から出たに違ひない。

其眞如から出た事を、我々の心に差別に生活して居るに違ひない。差別の生活を起して居るから、よいとか惡いと云ふけれども、左樣な事は一切、方便である。哲學の上から云へば是を一切、方便と云ふ。カントの哲學で云ふ樣に、時間と空間とに當て嵌めて云ふ眞如それ自身が眞物であるけれどもそれから出た考へは、皆な嘘である。是は哲學的に申すのである。そうして其究竟は觸れる事も考へる事も出來ない。其究竟を假りに眞如と云ふ。其の眞如は本體であるから、我々はどうする事も出來ない。其の本體から受けて來る現象は、何時でも差別的であるから、それは我々の迷ひだと、斯ふ說く、カントの哲學では矢張り、物其物は不可知的で、實踐即ち結局行ふ事を說く、斯樣な哲學に基いて釋迦敎と云ふものが起きて、さうして其の釋迦敎と云ふものを行ふ宗敎として、奉じて行く所に實際的宗派が置かれて居る。然し私は此の敎へと云ふ事は宗敎として我々が味ふ上に於てはもつと深く考へなくては味ふ事は六ケ敷いことゝ思ふ。今申した樣な敎へをそれを單純に唯た聞くと、而も驕慢な者が聞くと多くの人が驕慢であるから、多くの人が我れ直ちに佛と云ふけれども、聞く人が驕慢であるから、それだから我心眞如と思へば佛である、故に我心を眞如と思へと云ふ事になる。例へば此コップを山と思へ、と云ふ樣に此の哲學に徹底しなくてはならぬと云ふ事であります。此哲學の體驗しなくてはならぬと云ふ。多くの人は驕慢である、多くの人は智慧が足りない、我が心を眞如と思へとある。思へないと云ふ事をば少しも考へない。我が心眞如、コップを指して、是を山と思へと云ふ事である。けれどもこれを山と思ふ事は出來ない是をコップと思へと云ふならば思ふが山とは思はれない。コップは矢張りコップである。我が心眞如。是を山と思つた積りで宗敎を說くのであります。我々が驕慢であるからであります。我々が一致半解である。是は多くの人の心持ちであらう。哲學が徹底して宗敎になると云ふ事は容易な事ではない。宗敎と云ふものはそんなものを云ふのじやない、宗敎は人間の心を離れた眞實の智慧を得る所にあります。又さう云ふ哲學を聞いても其の哲學を宗敎とするに付てはもつと深く考へなくてはならぬのでそれには色々考へがありますけれども左樣な事は長くお話をすることが出來ません、

宗敎的の方面から御話致します。哲學的方面から考ふれば、大乘起信論を分拆すればよい、その大乘起信論の內容を分拆すれば、其哲學が宗敎になりませう。今は宗敎の方面から分拆して御話しする。云ふ迄も無く釋尊が家を出られた事は道を求める爲めであります。生老病死の有樣を見て世の無常を感じ、チツととして居られんからと斯ふ書いてありますけれども、それはチツと話しが過ぎる。無常を感じ、其の無常を感じたから道を求めると云ふ心が起きた。そうして、其結果人生は苦しみだと云ふ事を强く感じ、苦行六年程して人生の苦しみから脫れる事を知つて、思ひを變へて徒らに外の形を直す事では、心の內を直す事が出來ないから、心の內を直す。愛と云ふ執着の否定にかかられた。是は全く宗敎的の御話をするので、釋尊は渴愛と云ふ言葉を使つて居られる。私は唯、普通の意味で愛と申して置きます。愛と云ふ執着を否定する上に於て我々は苦しみから脫れる事が出來る。愛と云ふ執着の否定はそれを全くなくすると云ふ事が最も徹底して居りますから、釋尊のすぐ側に居た者は愛と云ふ執着をば全く取らなければならぬと云ふので全くな嚴肅生活をした。愛と云ふ執着は我々と云ふ迷ひから出て來るから是を引くるめて我と云ふてもよい。其の我と云ふものをなくすれば迷が全く晴れる。それには心の働きを考へて見ると感覺の働らきで起つて來る。見るものを見ない、聽くものを聽かないで、感覺と云ふ働らきを止める。其感覺がなくなれば、全く、我と云ふものがなくなる。さう云ふものは單なる理論である。人間が死んでしまへば見るものを見ない、聽くものを聽かないと云ふ風に人身の働きを止めてしまへば、詰り死んでしまうが、生きてこそ宗敎が必要である。釋尊の精神と云ふ事をもつと眞面目に考へて見なければならぬ。一體我々が世に生れて居ると云ふ場合に、存在するものは意識だけである。今斯ふして生きて居る、生きて居る時が現在の意識で、過去と云ふものは過ぎ去つて居る。未來と云ふものは未だ見ない。だから現在の意識に我々は左右されて居る。我々の云ふ所の機能と云ふものも現在の意識の中にあります。其心を改めて行かうと云ふ處の釋尊の宗敎が起つたのでありますが現在ある所の、其の意識の何者をも、其哲學には、一含三千と說く。今法の內容と云ふ事の中には、何萬年

前の事、何千年後の事もありますが、然し現在の今の法に包括して居る。釋尊は無我と云ふ事を主張されたのも、我其物を否定すると云ふ事を決して云ふたのでない。我と云ふ概念を否定された、左樣な事を宗教的に瞭きりと氣の付いたのが、八宗の祖師と云はれた龍樹菩薩である。龍樹菩薩は釋尊の說かれた宗教を統計的に纒めたのであると思ひます。龍樹菩薩は親しい友達が死んだので、我々の欲望と云ふものは苦しみであると感じたのであります。夫で愛欲を否定する事が、其の苦しみを除く唯一の方法であると考へたから、それを說くことろの佛教に歸依した。所が愛欲を除くと云ふ事を實際的にやつて見ると、直ちにして難局に出會した。愛欲と云ふものは絕つ事の出來るものであるか、若し絕つ事が出來るとすれば、人間の愛欲を絕つ事の出來ない自分は實に悲しいものである。愛欲が絕つ事が出來ないことをそれを絕たふと云ふのは尙更効力がない。此の二つの思想上の難關に出會した。其結果一つの體驗を得た。それは、愛欲を除くと云ふ事、愛欲に對して否定的の態度を取ると云ふ事に氣がついた釋尊は始めからやつて居た譯で、そうすると今の通り二つの難關に出會して愛欲を絕つ事の出來ない事を考へた結果、我と云ふ概念を否定する事と體驗したので我と云ふ概念を否定すると云ふ事は、畢竟、愛欲に對して、否定的態度を取る事で、左樣な體驗をしたのであります。愛欲と云ふものは、全く方向を轉じて一つの功德になるのであります。煩惱があつて菩提があると斯ふ考へる。さうすると云ふと、二つの關係に何時でも迷ふ。こちらに煩惱がある、こちらに菩提がある。斯ふ二つ並べると、其二つの關係に迷はねばならぬ。然しよく考へて見ると理由がある。煩惱に沒頭した時には煩惱がない、即ち煩惱を自覺しないからであります。又煩惱の目が覺めてしまへば煩惱がないのであります。夫故に煩惱と菩提とは全く同じであり、煩惱即菩提と云はなければなりません。因果に迷ふ。因果を否定する時に初めて我々は因果を知る。煩惱と菩提が互に働けば必らず迷ふ。因果を二つにして考へれば迷ふのである。だから一切空と考へた場合には我々はすぐ、迷の世界から離れる事が出來る。是も龍樹菩薩が行ひ考へた事で、一寸御聽きになると哲學でありますが、一切空と云ふ自分の考である哲學を體驗して

佛教を統計的にしたのであります。一寸休みます。

龍樹菩薩の考へが今申した通り、一切空と否定すると、さうすると、一切如實の姿である。我々が世の中の事を一切空と斯ふ否定する事が出來たから、否定的態度を取ることが出來たから、其處に一切如實の姿が現はれる。だから之を外の言葉で申せば、我々の人間の智慧と云ふものは、自分の本能を滿足せしめるために働く力であるから、人間の智慧と云ふものは、自分と云ふものを保つて行かうと云ふ、其働きをして居るのに、其智慧と云ふものを空であると否定的態度を取つた場合は、佛教で申す般若の智慧、佛智が出て來る一切空と否定的態度を取つた時に、一切如實の姿が其處に出て來る。我々の心に誠あり、嘘ありと、斯ふ並べて考へた場合には迷はなければならぬ。一切空と考へを決めて、否定的態度を取つた時は、其處が迷ひの姿であるから離れる事が出來ない。其の考へを龍樹菩薩の次に出た。世親菩薩はひどく感じて、一切空と見る事を見ませんでしたけれども、左樣な理論であるものと實際との間には大分距離のあると云ふ事を示した一切空と否定的態度を取ることの理窟が判つてもそれを實際にやると云ふ事は中々骨が折れた。菩提を認めてから、我と云ふものゝ存在が菩提を認めると云ふ心をふさぐ。どうかして菩提を認め樣と云ふ心が起きても、其心の次に又、煩惱と云ふ心が起きてそれを妨げる。而も其煩惱の奥に、自分と云ふものがあると云ふことが判つて居るから、其煩惱を捨てる事も出來ないそれを肯定する事が出來なければ又た否定する事も出來ない。其の苦しみに苦んだ結果、世親菩薩は限りなく、自己を反省して、反省した結果、今目の前に見える自己を否定する事は、夫が我々の心の働きとして、當然な事であると考へた。現在の自我と云ふものを否定する事が出來たならば、其奥にある眞實の我と云ふものが現れる。我々が我と思て居る我は有限の我であるが否定に出て來た其の働きは不變なものであるから其處に眞實の我が出て來る。惠信僧都か「我が心眞如と思へば佛たり」と申された其哲學は明らかに宗教である。そんなに反省しないで、どれでも眞如である、直ぐ佛と思へば遂に人間の佛が出來る。世親菩薩が、其處迄で變りない自己を反省して、其反省の結果、我

々が肯定して居る我々と云ふものは、有限なるものである。我々の心には誠の我と誠でない我との二つある様に感じなければならぬ心の有様になつて來た。それ故に、世親菩薩は、迷ひの心の強い我に一も二もなく何の條件もなく「我一心に盡十方無碍光如來に歸命すと申された。これは世親の宗教的體驗である。所でさう迄體驗した偉い人に、其跡を見ると、我々が多く考へなくてはならぬものがある。世親の後に出て來た曇鸞大師はさう云ふ風に考へる事は、今迄申した様に、偉い人が考へて來たのはそれは他力である。左様に變りない自己を反省すると云ふ事は、他に何か我々をして反省せしめるものがあるのではないか。だから曇鸞大師は他力と云ふ事を強く說かれた。其次に出て來た道綽禪師は、それは我々のやる事は一切自力である。それを排斥しなければならぬと云ひ次に善導大師はさう云ふ風な自力の働らきを以て世の中の事を解決しやうと思ふて、我々の惡い事を直し其處に佛智の働きを以て、我々を否定して、佛の本願と云ふ事を強く說かれた。さう云ふ風に考へる時に、釋尊の說かれた宗教の心持を、どの道から這入つて行ても、我々の行く所は、善導大師の說かれた樣に、佛の本願海に這入ると云ふ事を考へなければならぬ。私一個の考へでは、釋迦教を彌陀教と云ふものは、それは宗教意識の發達の順序を記すに過きないと思ふ。有名なる宗教學者である、露西亞のロ－ゼンと云ふ人は、日本の佛教には三つの種類があると云ふて居る。元來四つあるのであるが、日本にあるのは、哲學を元とした天台、眞言の如き道德を主とする教へと、それから、淨土の教へと斯ふ三つの種類があつて、印度で云ふ樣な戒律の教へはない。斯ふ書いたのが出版されて居りますが、私はさう考へない。釋尊の口から出た其教へが、多くの人の宗教意識に依て、夫れが組立てられた場合、反省の程度に依て、即ち、自己を反省する程度に依て其處に釋迦教が先づ起きて、段々と進んで彌陀教と云ふ一つの本願の教へを說く所迄で行くべきものだと思ふ。私一個の見た所では、釋迦教と彌陀教とは階級であると思ふ。彌陀教を奉じて居るものゝ内にも釋迦教が隨分あります。早く申せば釋迦教と申すものは、自分の力を磨いてさうして佛にならうとする、成道しやうとする所が釋迦教と云へば眞言宗、天台宗等でありますが、其の眞言、天台の人でも夫れでも皆な、往生と云ふ事は認めて居る。所謂、念佛はやつて居る。而も念佛道は澤山ある。彌陀教と申せば最も進步したのが淨土眞宗である。淨土眞宗の中にも自分が佛、極樂になつて居る人もあります。總ての人が釋尊の精神を體驗してそれを宗教とした場合は、彌陀教の所迄行かなければならぬ。私は宗教として釋迦教は永久に進んで行くものでないと思ふ。是は私の私論でありますが、昨日の話と、今申すことを合せばよく判ります。我々の一切の宗教心を取つて失ふ事が出來たら、其處に佛智が出て來る。即身成佛と申しますが、眞言宗で出來た眞言秘密安心集の中に、古來、日本、支那を通じて、極樂に往生した人が弘法大師一人であると書いてあります。後の者は皆な、外の所へ行つて居る、左樣な事は普遍的の宗教でなく、たつた一人佛になつた。依て凡ての人を佛にするのが佛教である。故に、即身成佛と云はうか、是心是佛と云はうか。此の自分と云ふものを極く謙遜的に見た人は、成佛する事が出來ない。夫故に、即身成佛と說きながらそれは何年か生をかへなければならぬと書いてあります。此まで佛になると云ふても五十年や六十年では間に合はない。さう云ふ事になりますと何時でも唯だ言葉の慰めに過ぎない宗教であるが、其處で今申した樣に、善導大師の云はれるやうに佛になる事は六ヶ敷いから、それで佛の國に生れると云ふことをしなければならぬ。それは内省の結果である。是を外省しないで佛の國に生れると云ふ事は即身成佛と同じことである六ヶ敷い事てある。それは佛と云ふものを釋尊以前の人が考へて居つたやうに、例へば自在天であるとか、總ての心が考へれば此儘で往生が出來る。釋尊はさうでない、自在天があつてもそれは心を救ふには役に立たぬ。「爾自からの燈を以て爾自らの道を開け」。だから吾等が此煩惱具足の體を以て、内省しなければ行けるものでない。いづれの宗派、宗教でも内省と云ふものが根本である。けれども其内省が先づ強く起きなければならぬ。淨土は佛の國である。佛教佛の力であるが所謂淨土たる彼の國に行つて往生するさう云ふ事は全く、自然法爾である。自然法爾と申すことは專門的の言葉である。法然上人が說教の内に、法爾と云ふ事の道理を說明してある。それは、菓子が

甘い、煙は上に上る、水は高きから低きに流れる、夫れが自然の道理だ。全く我々の計ひを止めて自然の道理の方に行くを云ふと申され、親鸞聖人が自然法爾の夫れに依て言明して居られる。親鸞聖人の八十五歳の極めて圓熟した事を申して居られる。『自然と云ふはおのづからといふ行者の計ひにあらず、然といふ時は、しからしむといふことばなり、しからしむといふ自は行者のはからひにあらず、如來のちかひにてあるがゆへに法爾といふ、法爾と云ふはこの如來の御ちかひなるがゆへにしからしむるを法爾といふなり』と云ひ全く、今迄私の申した人間の計ひを捨てゝ、我々と云ふものを否定した場合に佛智が出て來る。我々の心で以て計られ得ない極めて圓熟した彌陀教の思想であります。どうしても其處まで佛教と云ふものは、宗教として進んだものである。哲學としては又別の方面に行くことは當然であります。さう云ふ風に釋迦教から彌陀教へと行くのである。近頃流行する佛教は學問をする。佛教を一つの道樂にして居らるゝ人も多いのであります。此處には左樣なことはありますまいが、世間によくありますから、……さう云ふ意味で、さう云ふ研究的態度を取る人には大乘起信論が一番よいと思ひます。是は、人間の心には心眞如と心生滅と二つあります。心は人間の心、眞如は我々の考への及ばない考へでありますから、本體的精神と現象的精神、の我々の心には二つあります。眞如と云ひ心と云ふ事は佛性と云つたらよい。心生滅は眞如と云つた方がよい我々の心の中には二つあります。明日の朝早く起き樣と思つて人に賴んで早く起して呉れと云ふて寢る。朝になつて見ると寢むたい。折角起して呉れた者を叱り付ける。それは惡い方の眞如だ。成程、我々の心にも多少よい心があります。惡い心もあります。自分の心に煩惱があると云ふ氣のついた時、其時は煩惱を厭ふ心が起る。内省してそこに厭ふ心が起る。夫を起信論では内薫の力だと云ふ。其の内薫の力と云ふものはそれは眞如だ、佛性だと、佛性が内薫の力となつて働いて煩惱をどうかしやうと云ふ心が起る。其内薫の力が段々働くが結局、煩惱が全くなくなつた時が、佛だと云ふ。それ故、斯ふ云ふ意味に於て云ふ所の佛は理想である。理想に到達する間を修行と云ふ。修行して佛になる。内薫の力に浮かされて菩提心が起きて夫れから修行する。それが所謂、聖道自力の教で、それが釋迦教である。所が誰が考へて見ても、自分等の其心に内薫の力が足りない。成程、内薫の力に依て段々煩惱と云ふものが取れるのだけれども、其力が足りなければ、どうしても佛になる事は出來ない。さう云ふ事に氣がつくと云ふと我々の心に外の眞如の力を借りると云ふ事を考へる。それを外薫と云ひ、是は心の内の外の眞如であります。夫故に心の外にある所の眞如と云ふものが、我々の心に活動して現はれた場合には佛である。心の中で眞如が活動しなければ佛になれない。外なる眞如の力をそれを佛の力として考へる所謂外薫の力それを別緣とも申すのであります。馬鳴菩薩は譬へを以て「火の内に火の性」と申して居られます。火はマッチ等で點ずるから炎ゑる、然し如何に火の性があるからとて其處に火をつけると云ふ事をしなければ炎ゑはしない。即ち、内薫の力があつても別緣と云ふものがなければ炎ゑるものでない。丁度それと同じ樣に衆生の教へと云ふものは外になければ我々は到底自ら煩惱を脱して涅槃に入る事が出來ない。内薫の力には依るけれども別の緣と云ふものにも依るのであります別の緣と云ふものは、或は衆生の心持に應じて、其れが或は父母眷族となり、或は小使や傭人の樣な賤しい身分となり、友人となり、或は種々な方面から其人の心を浮かして、そうして段々と煩惱と云ふものを斷じさせるやうになるから、それを善巧方便と名付ける。其方便に依つて我々の煩惱と云ふものは段々と消ゑる。其の別緣で以て我々が物を聽く、知る。内薫の力强きは其別緣を見て知る事が出來る。我々の知れる限り、力の强いの力は阿彌陀佛であるから。阿彌陀佛の教に依つてに依つて、慈悲に依つて、助けに依つて段々と我々がの佛に近くなる。其の道を踏んで行く事が出來る。斯ふ考へる時に夫が徹底した場合には、所謂彌陀教が起きる。所謂、他力と云ふ教へが起きて來るのであります他力と云ひますけれども新聞に書いてある樣な、自分が困つた時に、恰度其處に居た人に助けて貰ふた樣な事を他力と書いてあります、其樣な事ではない。自分がさう云ふ事を求めないで起きて來ることを他力と云ふ二人が斯ふして力の强いものが喧嘩をして居る。其の喧嘩が段々盛んになつて、最早や片一方が負け樣として居る、力の强い人を見込んで助けて呉れと叫ぶ。斯

ふ云ふ場合も他力であるが、淨土眞宗はさう云ふ他力ではない。自分の力が足りないからお願ひしますと云ふ他力ではない。第三者から見ればあんな力の弱いものは喧嘩すれば負ける、自分が力強いと思つて威張つて居るけれども、あんな力では直ぐに負ける、彼は金を儲けたと云ふて居るけれども、あんな經濟では直ぐなくなる、可愛想だ、不憫だ、強く働くために本人は威張つて、力が強いと云ふても、場合によつてはどうしても助けなゞてはならぬのである。其働く力が淨土の他力である。此の敎へを通俗に示す必要があると思ふ。他力と云ふと自分の力を捨てゝ置いて他人の力を賴む、そんな卑怯なものではない。是は全く佛敎と云ふものが如何云ふものであるかを考へて居ないから、それは以ての外である。論外である。他力は稍もすればさう云ふ風に誤解される例があります。それから親鸞は他力の本願の力だと申して居らるゝ。本願の力と云ふものは自分が賴むから落ちて來る。自分の力では足りないから人の力を借りて來るのである。佛の本願と云ふ事は一切の事を纏めて行かなければならぬと、自然法爾の働く力、斯ふ云ふことは新しい學問をやつて居らるゝ御方は自然の觀察から御考へになれば、もつと近道に理解出來ると思ふ。要するに此の一切と云ふ事は同時と云ふ事に働いて居る。それは如何云ふ事かと申しますと、此始めに人間の身體の事をお話しゝたが、身體でも何でも一切のものは同時に働いて居る一切のものは同一の海に働いて居る。手でも足でも夫々自分のすべき事をして居れば、それが集つて自分と云ふものを拵へて呉れる。それが勝手に働けば人間は死んでしまう。世の中の事は一切統一されて行く樣になつて居る。それは元々一つから出たからである。人間だつても左樣で、人間と云ふものは元から澤出居たのではない。元は二人か、始めだつたら一人であつたかも知れぬ。一つから多が出たのであるから、どうしても統一しなければならぬ。夫を纏める力は自然法爾で、さうして其の自然法爾は人間としては或は間違つた事であると考へる時にもそんな事はないと考へるかも知れん。人間としては種々な事を考へるけれども、我々の計ひでない。人間の計ひでない。纏められる力の中に抱擁される所に人間の安心がある。自覺がなくてはならぬ樣に段々働く事でなくてはならぬ。佛の敎

には「衆生が若し往生しなければ我は正覺を取らぬ」と斯ふ云はれて居る。一切の事が統一しなければ世の中のことが成立たぬから、親と子の關係について考へて見れば、それもゝつと明瞭であらうと思ひます。親と云ふものは先つ一つの家族を率ひて居る。其家族と云ふものは親から出たものである。それを纏めて家族を作つて居るから、家族としては一番上に立つ者が纏めなければ立つて行かない。夫故にどうしても統一しなければならぬ。放逐してはならない。放逐しては統一が出來ないから放逐しない。惡い事をすれば、それを辯護したり訓戒を加へたりして種々なことをして、自分の内に取入れる樣にする。上に立つ所のものが居らなければ、其家族は成立たぬから、統一が出來ないから、自然にある所の力に浮かされて其處に働きが起る。其の力を佛の方から本願と云ふが、我々の方では慈悲と云はなければならぬ。其力は自然法爾に働く力であるから、我々の自力で本體的自然に觸れることが出來る。觸れた所に我々に安心と云ふ心が起る。本願の力と云ふものは、自然法爾の働くことである。夫を感じた時に、其時に念佛と云ふ眞實の聲が出て來る。親が何處かに居るだらうと云ふて、親の名を呼ぶのが念佛でない。それも念佛であらうが神聖な念佛でない。佛の本願に接すると云ふのは暫らく會はなかつた子供がお母さんに、其處にお母さんと呼ぶのが夫れが南無阿彌陀佛、念佛は喜びの聲、佛の心を戴いた時、喜んで來る所の聲で、此事は明日もつと通俗的に御話しゝたいと思ひます。今から大分前の事でありますが、明治二十八年に東京に可なり大きな地震があつて煉瓦の煙突等が倒れて、人が多少死んだ事があります。あの時に私の知つた家に大變に其の姑に良く仕へた嫁さんがありました。又、其嫁さんの妹になる人がありました。嫁さんの婿さんも他の家庭から來て居た嫁さんもみな其の一家の人は實に善い人で、實に圓滿な家庭であつた。他の人が其の家庭を非常に賞めて、如何して其の樣に圓滿であるかを嫁さんに聞いた時、嫁さんが、御母さんは私を本當の子供の樣に思つて戴くから私も本當のお母さんと仕へて居ります。と答へた。普通の家庭には嫁さんと姑さんとは可なり仲が惡い、それが餘程仲が善かつた。それから又他の人が妹に聞いたら嫁さんの答への樣ではなく、お母さんに對しては左程特

別に考へて居ない、詰り何とも思つて居ないと答へた所が二十八年の秋地震がいつた。ところが、「本當の親と思ひます」と云つた嫁さんは一番先に家を飛び出て來て、本當に思ふ親即ち姑を殘して來た。「何とも思はない」と云つた娘さんは家の外に洗物をして居たが、地震が搖ると同時に、家に飛び込んで親を助け出したと云ふ。嫁さんは矢張り自分の體の方が大事と思つて外に飛び出たので妹さんはお母さんが危いと云つて動く家の中へ飛込んでお母さんを出したと云ふ事である親鸞聖人の言葉は如何にも適切で、何と云ふても人間の意識は自己衷心に働くものである。親鸞聖人の言葉に、「善惡の二つ總じてもつて、存知せざるなり、其故は、如來の御こゝろによしと思し召すほどに知り通したらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめす程に、知りとほしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづの事みなもてそらごとたわごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはします」と申されたがそこ迄我々の心持ちが進んで行つて、其處に彌陀敎と云ふものが發達して行つて眞

實の宗敎と云ふものが生れて來ることだと思ひます。左樣な心が、龍樹菩薩の云ふ、一切空と感じて我（法）と云ふ言葉を口にした時には何時でも出て來るのであります。唯だ、それを出す事をしないのは一切の智慧の働きをして居るからである。一切の智慧の働きを指導して居るから氣に入りますけれども、お說敎を氣に入つたら、あれは良いお說敎だ、氣に入らぬ時はあれは間違いだと云ふて居る。安心と申すのは佛と佛の計ひである。佛のする事を人間がして居る。助けると云ふ事は川の中に落ちて居るのを手を引張つて助けるのでない。宗敎で救ふのは自分の心、それを佛の心の中に入れる。さうして自分の心の內で說くことをそれを言葉の外で話をして居るから、宗敎そのものを話して居るのでない。宗敎を外に出して言葉に出して話して居るから、それを體驗しなければ佛になれない。佛敎は充分研究の必要はあるけれども、然し佛敎の學問は一二の專門家に托して置けば足ると思ひます。宗敎と云ふ事は世の中一般がやらなければならぬ。自分の心の問題である。其の宗敎は多くの人がやらなければならぬ。多くの人が內省しなければならぬ。色々言葉をつくしてくだらぬことを申上げた樣でありますが、要するに釋尊の敎へは內感の敎へで、其內感さへすれば、其處に我々は佛の本願の力に救はれて居ると云ふ事を感知する事が出來る。內感さへすれば外にないのである。其處に佛敎と云ふものが存して居ると思ひます。此意味を通俗的に御話し致すために又、明日、念佛及び安心生活の事を御話し致さうと思ひます。

第五講

昨日迄御話を致して參りましたことは、釋迦敎と彌陀敎と此昔二つに分れて而も今も現に行はれて居ります。宗敎としての佛敎、科學の考へからして夫に對して說明を加へたに過ぎぬのであります。左樣な事が果して當を得て居るか居ないかと云ふ事はそれは私としては別段に問ふ所ではないのです。夫は正しからうが正しかるまいが、夫は私としては問題ではないのであります。唯だ私が御話を致したいと考へ、而して此席で唱導したのは、學問としての佛敎は、夫々專門の學者が仰せられる事でありまして私の範圍ではないのであります。然し宗敎としての佛敎は、學問としての佛敎よりも實際の必要を感じて居ることであるから、お互に是を味ふて共々に佛敎に隨ふて實質の道に進みたいと斯ふ云ふ考へから私が自分を省みないで、此席に立つたのであります。

左樣な精神であるから、是から私は宗敎としての佛敎を味ふて居る事を其儘御話して御參考に供しやうと思ふて居ります。繰り返して申す樣でありますが、釋尊の說かれた敎へが本當に御經に書いてある、所謂原始佛敎の敎典に書いてある所を見まするとと、眞理を明らかにして、夫に依りて涅槃の境に入るには八正道を踐んで、夫に依て我々が佛になる。斯ふ明らかに說いてあるのです。夫から、其の釋尊の精神を體驗する事が出來たら、誰でも釋尊と同じ樣に釋尊の說かれた敎へで知ることが出來るのであります。所が前日から申す通り、宗敎意識と申すものは自ら起きて來る。意識を夫を各自が他から促がされて、其促がされた結果として夫々出て來るのであるから、八萬四千の法が出たと云ふのであるが、夫を大別して釋迦敎、彌陀敎の二派に見る事が出來ます。眞宗の御寺へ行けば、本尊が阿彌陀佛であります。夫は大体形式の上で細かに論すれば、釋迦敎で居ながら彌陀敎の精神の人もあるし、彌

陀教で居ながら、釋迦教の精神の人もあります。然るに講釋をする教へもあります精靈の計ひを止めるものが而も反つて計ひをする。色んな事をして矢張り智刀の働きをする。弊害を申せばいづれにもあるけれども又何れも誠である。宗教として味ふ場合に於て、人間の區別を眼中に置かないで八正道を踐んで佛になろうと云ふ釋迦教の精神になれと申すのである扨て正見と云ふのは文字の通り、見る事を正しくする。認識を正しくするので我々の考への正しくないのは認識を間違へるからであります。それで考へが間違ふのである。智慧を正しくする場合は認識を正しくしなければならぬ、認識を正しくすれば智慧が正しくなるのである。即ち正思惟であります。正語と云ふ事は、言葉を正しくする、我々が間違つた事を云ふのは、畢竟、智慧が足りない。智慧が足りない所から起きて來る。考への違ふことを正しくしなければならない。さうして行ひを正しくする。正業と云ふのは行を正しくする事である、即ち今の言葉で申せは生活を正しくすると云ふ事で忠實にやつて行く事である。佛教の教へには正業と云ふのは思慮の行ひだけとなつて居りますが、宗教としては思慮丈けでは一般の生活を正しくすることが出來ないとあります。正命と云ふのは出家に相應の生活をなすことで、正精進云ふのは一生懸命に努力すること、倦らず努めとる事で、正念と申すのは專門の方の説明は色々ありますが、意識を申すが正しくすることであります。佛教で念と正しき意識を其處に出さなければならぬ。正定と云ふのは散亂する我々の心持ちを確りと動かぬ樣にする事であります。釋尊は此經を説かれた。其教を奉して行くものは皆佛になれる。釋尊が死なるゝ時に阿難陀がお側について非常に悲んだ、さうすると悲んだ事を止め、自分が説いた所の法と、自分のした所の行ひと云ふものは何時迄も殘つて、手本になるからと云はれた。三千年の昔に死んだ釋尊は死んだものでない事は明かである。釋尊は其の大法に依つて成佛した。其の大法は我々の云ふべき所でない。專門の言葉から云へば八正道を踐む事である。釋迦教では八正道をやつて而して佛にならうと努める。此道を踐めば、釋尊は必らず報償があるから佛になることが明らかなことゝ思ひます。ならぬ迄も努力してやつて見なくては判らぬ。努力もしないで捨てると云ふ事は道を求める心ではない。

出來ないと考へるから判る譯はない。やつて見ないと分らぬから此道を進んで行かねばならぬ。夫れからして彌陀教には菩提心を起す。修養を起す事もあるけれども努力もしないで、心も磨かないで、何も考へないで夫か其儘佛になる事は、佛教に於て説く所でない。左樣な事は、幾等彌陀教と雖も、佛教の一派である以上は根本の考へに反した考へてある。夫故、誰れでも佛教を宗教として味ふことがあつたら、必らず釋迦教の教へになる。年取つて道を求めると云ふ事を、釋尊の説かれる所を更にやつて見なければいかぬ。夫でなければ釋尊の教へを奉じた譯ではない。自分の教へである。佛教は奉じて行くが、釋尊の云はれたことを必ずやつて見なければ判らん。やつて見ないから出來ないとすれば佛教ではない。此處には昔の人の誤解が潜んで居ると思ふ。其の誤解はいたづらに結果丈けを説かれて居るからである。是迄の説き方は何時でも結果であるけれども、山を越へ谷を越へ、海を越へ、而して苦勞して行つて行き着いた先は立派な所であるから、越へたと云ふ結果だけを考へれば、誰れでも行き度い事であらうが、夫には海を越へ山を越へ、谷を越へなければならない。其足許を見なければ判らん。唯、講釋して云はれるのであるから、誰れても行けると云ふ事はない事は明らかである。是は釋尊が懇々と繰り返し繰り返して、よく自ら求めなければならぬ、唯だ棚から落ちて來る牡丹餅を得やうとする樣ではいかぬ「汝自からの燈を以て汝自からの心を磨け」と斯樣に説いて居られる。又さうであるべき筈であらうと思ふ。八正道を段々踐んで行つてさうして考へて見ると、正見と云ふ事が出來る。或程度迄智識を磨く事が出來るけれども然し或點迄來るとそれが出來ぬ、詰り釋迦教に入つて味ふて見ると段々正見がいけなくなる。凡そ正しくすると云はれるけれども、一生懸命にかゝつても左程正しい行ひが出來ない。人に慈悲を垂れると云ふ事は確かによい行ひであります。然し乍ら慈悲の心を垂れて居るかと思へば其處に名聞利養の心が起きて來る。乞食が錢を呉れとせがむ、五厘か一錢の金をやる、そうしてやつた心持ちは大慈善家になつた心算だから、乞食が禮を云はないと心持ちが惡い。さうすれは禮を云ふて貰ひたさに金をやつたのであるから、慈善の心持ちでない。慈善と云ふものは目的のないものであるから、

其慈善のために禮を云ふて貰ひ度いとは結局、　寄附して受取が入るので、　受取が欲しいために金を與へる事になる。けれども、よい事を見る、見るとすぐ名聞利養の行いが出て來る、すると段々それが驕慢の心になる。自分が煩惱で困る、其の煩惱を修養の結果段々煩惱が少なくなつたと考へる事が驕慢の心である。さうして煩惱に返る。內省しなくて、吾々は智識を磨いて居るから、自分の考へは正しいから、行ひは正しいからと斯ふ云ふ風に考へて居れば、すつかり佛敎ではなく、無宗敎である。さう云ふのが世の中に澤山ある。自分の行ひを道德的に內省せぬ人が澤山ある本來の心持ちを非常に發揮して居る、それは全く佛敎から離れて居る。夫故に宗敎として佛敎を行ふ時には八正道に氣が付かねばなりませぬ。龍樹菩薩の云つた樣に釋尊の云ふた樣に行ふ事が出來ない。どうしても我々は迷はなければならぬ。所で我々にも多くの智慧があるから、是を少し考へて見なければならぬ。是は心の智慧から考へて行ひを正しくすると云ふは道德である所謂道德本位である。だから宗敎を求め樣とするならば、どうしても自分の心を先づ第一に反省しなければ

ならん。自分の心を反省しないで起きて來る宗敎は、自然的宗敎である。さう云ふ場合には勝手な佛を使ひ神を使つて勝手な事を神に願ひ、佛に願つて萬一滿足の得られた場合には、神や佛の利益を崇めもするが、利益のない時には、神や佛を貶す。夫では宗敎にはならぬ道德の反省が出來て、而かも釋尊の說かれる八つの道の內で何れも悉く道德的の生活であるのに夫が出來ない。出來なければ我々は釋尊の敎へに依て佛になる事が出來ないと諦める。釋尊の敎へに依て佛になる事の出來ない事は、我々の意識を働かしてさうして道德と云ふものを其處に考へるからである。道德生活と云ふ事を反省するからであるけれども、正念と正定と云ふことは道德ではない。我々は正しき意識を出すと云ふことは、我々の意識を散亂させないと云ふ事は、道德の働きでない。是は直觀の生活、我々の意識を離れなければ、我々の正念と正定を得られるものではない。我々の計ひを以て是を行ふことは決して出來ない。夫は道德生活であるから、我々が智識を磨いて、斯ふ云ふことをすべきだ、すべきものでないと云ふことを分けて進むべきもので、正念、正定はさう云ふものでな

い。夫は確かに直觀の生活である。夫で釋尊の敎へは道德生活をし而かも道德生活を超越した所に、其處に直觀の生活が出て來ると斯ふ云ふ事を說かれたに決つて居る。法華經の言葉に「惡い事をせば其の果は限りなく多くの惡の因を生む」と說　てある。夫はどうしても左樣なことに依て、我々の精神の働きを段々精練して、涅槃に入る事を說かれた。釋尊自身も法と云ふものは說くことの出來るものでない。說かるべきものでもない。其境に至るべきには、八正道の順序を說いてあります。嚴密な意味で申せば、釋尊の敎へは正念と正定を得ることである。それが宗敎である。其前の道德生活はさう云ふ宗敎生活に入る前の階級である。階梯を踐まなければ宗敎生活を得る事が出來ない。是は私の私論では無いのであります。私は思ふ。夫は此邊は淨土眞宗の盛んな所であるから、親鸞聖人の敎行信證と云ふ御本書(御本典とも云ふ)と名付くるあの書物の中に正信念佛偈が入つて居るから始終御讀みの事と思ふ。本願の意味は南無阿彌陀佛である意識を働かすには南無阿彌陀佛と斯ふ申すのであります。もう一つ他力の方の稱名は「能く衆生の一切の無明を破すなり」

稱名は即ち是は大乘の稱名である。だから釋釋の佛敎を宗敎として考へた場合には正念と正定である。其の正念、正定は親鸞の敎へに依ると、南無阿彌陀佛の念佛である。夫故に佛敎を宗敎として味ふ場合に私は夫れを申したい。私の考へを表す爲めには親鸞の言葉は幾つもある。即ち「本願の名號は正定の業なり」と斯ふ出て居る。徹底して佛敎と云ふものを宗敎として考へた場合には、親鸞の一切の說明は正念と正定とに當つて居ると私は味ふて居るのであります事をお話し申上げる樣なわけであります。お暑い折から私のくだらないお話を御靜聽を煩した事をひとへに感謝する次第であります。

人格主義の倫理

京都帝國大學教授　文學博士　藤井健治郎先生述

私は此度御話申し上るのは豫て豫定して置きましたが少しく都合がありまして當方へ參りましてから講題を變へることに御願ひ致しました。人格主義の倫理と云ふ御話をしたいと思ひます。今日は其第一回と致しまして道德と幸福と云ふ御話を致す考へであります。諸君が此世に生れて一体何をして行かうといふ御考へで今日居らつしやるでありませうか、人間と見れば唯たた食つて寢て起きてと云ふことを日々繰り返すのみで此の五十年七十年をばつと夢の如くに過して行つて了ふと云ふことは誰しも詰らないことであると御考へてあらうかと思ふ、何か目的を樹てゝ一生の中にや何か此の目的を實現して行きたいものである五十年が五十年、七十年が丰年生きて居つた効のある生活をして見たいものであると云ふことを冀つて居らない方は恐らく一人もなからうと信じます。其處でどう云ふことをやつて此一生を過して行かうと云ふ御考へであらうか、夫は色々商賣に依り又身分に依り夫々斯ふ云ふことをやつて行かうと云ふ其目的は變つて居るのであらう。決して皆樣が同じ目的を以て居るとは又考へられない。或は先代から讓られた田畑を十分に耕して一俵でも二俵でも自分の忰に渡してやる時には高を餘計にして讓つてやりたいものであると云つた風に考へるのは農家に居らるゝ方々の御考へであるかも知れません。或は出來るだけ手固くさうして最も手廣く商をして家の身代を若干なりとも殖やして行きたいものであると云ふのは街方に居なさる町家の人々の御考へであらう。夫は自分自らを修養し、一切衆生をよく佛の道へ導いて行つてやらうと云ふやうなのは宗門に居られる方々の御考へであらう。乃至敎壇に立つて生徒兒童を出來るだけより良くして行きたい一生の仕事を其處に置いて骨を折らるのは敎育者の身柄でありませう。斯樣に取る所の職業に依り得る所の身柄に依りまして一生の間に

やつて見やうと思ふ事柄は皆な各々違つて居るのでありませう兎に角人々は皆な左樣な目的と云ふものを立てゝ其目的を實現して行かうと云ふのが是が人間の世の中と云ふことであります。さて斯くの如く或は農或は商或は宗敎家或は敎育者に依りまして目指す所の目的は違ひますけれども更に溯つて考へて見ましたならば人間の一生が色々農に依り商に依り或は宗敎家、敎育者に依て違ふやうに見えたことも詰りは皆な同じことである。歸する所は畢竟一つであると云つたやうな風にも考へることは出來はしないか、然らば云ふ所一つになる、其一つと云ふのは何であるかと云ふと此處に現はれた幸福或は仕合と云ふとか此の世を仕合に過ごして行きたいものであると云ふことで、夫がためには商賣も勉强し寢ずにも勵む自分の理想とする所を努める或は忠實に職業をやるとか或は熱心に事を成し遂げるとか或は勤勉に職務を努めて行くとか或は正直に商賣をやつて行くとか、斯ふ云つたやうな忠實、熱心勤勉、正直と云つたやうなことを一生懸命でやつてさうして、詰り、此一生を出來るだけ仕合に生活して行く、斯ふ云ふのが所謂農と云ひ商と云ひ宗敎家と云ひ敎育者と云ひ總ての人が冀求めて居る所のもので、謂所人間の世の中は此の仕合とか或は幸福とかと云ふことを目當てとして、或は忠實或は熱心に勤勉に正直に已々其業とする所を進んで行くのであると斯ふ云ふ風に考へることが出來る。是は誠に結構なことで出來るならば皆な不幸のないやうに、不仕合のないやうに仕合に此の世の中を過して行くと云ふことは誠に結構なことで是がためには忠實、熱心、勤勉、正直と云ふやうにやつて行くことは誠に結構なことであると思ふ。而しながら忠實、熱心、勤勉、正直と云ふことをやれば必ず仕合せになることが出來るかどうか、是が問題である。第一に正直と云ふことを考へて見ると正直に百姓をしたり正直に商をしたり又正直に學校の職務を勉强したりして居る人は必ず仕合せになるかどうかと云ふことである。夫を考へて見まするとさうもさうでない場合が可なりある。正直よりも寧ろ不正直な行ひをやつて大分世の中に仕合せになつて居る人もある。商賣と云ふやうなことは殊更である商賣と屏風は曲らにや立たん。どうも馬鹿正直でやつて居つては算盤珠が彈けない。珠を彈くためには多少誤魔化しもや

らにや多少お客の目を掠めて行かにや馬鹿正直に商賣が出來るものでないと、まさか、口には出して敎へなくても目で敎へたり腹で敎へたりするのが是が商賣の道であるから正直が必ず仕合になるかと云ふとどうもさうは行かん。又敎育者だつてさうである正直に生徒や兒童のために一生懸命にやつて行く先生が果して立身もし出世もし仕合になるかと云ふと仲々さうは行かん。夫よりは寧ろそつちのけにして村の重立た連中とか町の重立た連中と宜しく交際をする、さうして夫等の人々の御機嫌を伺つて置く、さう云つたやうな人が月給も早く上るし、立身も早く行くと云ふやうなことになつて其方面から見ましても正直は必ず仕合になるとも限らない。乃至忠實とか熱心とか勤勉と云ふやうなことも同樣忠實、熱心、勤勉で色々の職業をやればきつと仕合になるかと云ふとどうもさう行かん、店のお店の白鼠と云ふことがある、白鼠寧ろお店のものを掠めて甘味いことをして居る連中がある。却つて不忠實な不勤勉なことをやつて仕合になつて居る。あれは白鼠だと云ふ。さう云ふ譯であるから人の世の中は仕合にならう幸福にならうと云ふのが目的であると考へて

も、さうして其ために忠實、熱心、勤勉、正直と云つたやうなことをやるに致しましてもどうも此の世の世の中に於ては通らない、夫が通らない、此世の中は夫が通らん計りでない寧ろ木の葉か沈んで石が流れると云つたやうな隨分逆な譯で沈むべき筈の石が流れて流るへき筈の木の葉が沈んで了ふと云ふのが世の中、夫故に仕合と幸福と云ふことを以て目的として忠實、熱心、勤勉、正直をやつたとすると夫は見當違ひ、却つて忠實熱心、勤勉、正直なことをやつて不仕合になると云ふことをも此世の中に於ては隨分期待しなければならないものである。一生此世の中をどうかして樂に暮して行きたい、斯ふ云ふことがお互ひ一生の目的であると云ふことが一寸怪しくなつて來た。正直と考へると、幸福である、仕合を考へると夫を實際得ることが出來ない、と云ふことになりますと仕合が此世の中の目的であつて仕合に暮して行くと云ふことが我々一生の理想だと云ふことが少しく怪しくなつて來た譯である、其處で更に考へて見まするとと云ふと然らは普通の仕合と云つたのは一体何を云ふか。普通にあの人は仕合な方であると云つた時自分は誠に仕合者であると云つた此仕合であると云ふ意味はどう云ふ意味であるかと云ふと第一に人間として身体は丈夫でさうして長生をする是は普通の仕合と云ふことの重なる要素に違ひない

体は丈夫で長生をすると云ふのはお金は如何にあつても始終病身で以て始終床に就いて居る、　あの人は御金はあるけれども不仕合な方であると云ふ、其時には矢張り健康と云ふことが我々の仕合の重なる要素であると云ふことを意味して居ると云ふことである、幸福と云ふのは長生をすることであの人も不幸な方で何一つ不足はなかつたが若死にした若死にと云ふことは不幸の一つに相違ない。隨つて長生をすると云ふことが仕合の一つである。夫から一つ仕合の要素はお金持でさうして立身出世すると云ふ「富にして貴だ」是も矢張り此の仕合と云ふことに相違ない今一つは子供が澤山にあることである、あの人は丈夫で長生をする金もあるけれども子供がない、子寶がないと云ふ、即ち、子寶がないのも一つの不幸になつて居る。隨つて子寶があるさうして子孫が多いのも幸福の一つに相違ない

先づ普通の仕合と云はれて居る、事の要素は此三つで盡すことが出來る。第一は体が丈夫で長生をする。第二は金持で立身出世をする。第三は子供が澤山あつて福々として居る。是か普通の仕合と云はれて居る所のものであるが、さて此一つ〳〵に付て考へて見ても或は總体に付て考へて見ても、例へば人間は幸と云ふことに付て考へて見ましても身体が丈夫で長生をしてさへ居れば夫で人間一生の意味があると云ふことが出來るかと云ふとどうもさうでないと云ふ事實か澤山ある。体が弱くて若死をした人で偉い方か澤山ある。長生をして体が丈夫で詰らないやうに危介者になつて居つた人が澤山ある。昔から「顏回の夭、陶跡の壽」と云ふことがある。顏回は御承知の通り孔子十哲の内の第一人者で孔子の後を嗣くものがあつたら此顏回である、最も偉い人間で、其顏回が世の中と云ふものは若死をする、夫から堯の仇になつて居つた泥棒の跡と云ふ奴、是はひどく長生をした、長生をして仕合であると云ふことが人間の目的であるならば顏回よりも泥棒の跡の方が餘程偉い人間である。餘程偉い現世生活をしたと云はなければならんが而しお互の心持から云ふと如何に短くても如何に病身でも泥棒跡(セキ)よりも顏回の方が偉いやうに考へる又、お互ひとして若し人間の御

手本として行かうと云ふことであるならば無論陶跡を選ばずして顔回を師匠として行かなければならんと云ふことは當り前のことである。さうすると身体が丈夫で長生をすると云ふことが仕合のことであるかも知らんけれども而し夫は我々が此世の中に生きて居るのに是非とも是でなくてはならん。是を缺いては我々人生の目的はあるものじやないと云ふことは明かな事實である、若しさうであつたならば顔回より陶跡の方が偉い、陶跡よりも顔回が惡いと云ふことになると我々は健康にしてやはりもつと外に何ものかを選ばなければならぬと云ふことである。或は富にして貴も同じことである、二宮尊德が伯父萬兵衛の家に預けられて萬兵衛の家に田を耕す、其田を耕す餘暇を以て、僅か猫の額程の場所を自分で開墾して其處に零れた苗を植付けて夫を自分の「ほまち」として耕して居る、何年間やらかゝつて漸く一俵の收獲を得ることが出來たと云ふやうに二宮金次郎は何年間かゝつて僅かに一俵の收獲を得ることが出來たやうなものである富とか財産とか立身とか、出世とか云ふ方面から見れば誠に採るに足らないものである又他の一方今日の例へば道義上から相場をやる連中を考へて御覽、相場をやる連中のことを考へて見ると手を一つ叩くと一萬兩儲かつたとか十萬兩儲かつた等と云つて居る。金次郎は何年間かゝつて僅かに一俵の米を收獲した。今の相場師は手を一つ叩いて何萬兩を儲ける若し富にして貴なれば金次郎より無謀な馬鹿な者はない譯である、一つ手を叩いて賣つた買つたと云つて十萬兩を儲けるのか餘程利口な話で富にして貴と云ふ目安からならば省な蠣殼町東京で云へば蠣殼町へ行つて手を打つ方がよい譯であるけれどもお互の心の中で蠣殼町で手を打つて一攫千金をやつた方が偉いか何年間かゝつてお米を作つた金次郎の方が良いか、どつちに敬服しどつちを尊敬する、お互の胸を虛心坦壞にして考へた場合にどつちを尊敬するどつちを偉いかと考へたならば蠣殼町に手を打つ連中よりも矢張り何年間かゝつて一俵のお米を拵へた金次郎の方か偉いと云ふ風に御考へになることは御異存なきことと思ふ。若しか此言に對して御異存がないとならば皆樣の御考への中には富裕にして貴と云ふとも必ず此世に生きて居る目的じやない。此世に生きて居ると云ふ意味は富裕にして貴と云ふことを云はんがためにやつて居るものでないと云ふことを點頭かれねばならぬ。又子孫が多いと云ふことも是も同樣である、矢張り子供のない人か必ずしも詰らない、人間じやない、子供の多い人間か必ず偉い人間じやない、斯樣に幸福と云ふことを認識して第一に身体が丈夫で長生をしてお金持で立身出世をするとか子寶が澤山であると云ふことを幸福と考へると此幸福と云ひ、仕合と云ふことが我々が此世に於て是を持ち來たさうと思つて居る所のものでない、我々が此世に於て何か實現して行かふ何か此一生を意味あるものに過こして行かふと云ふのには此仕合とか、幸福とか云ふ以外に何物かゝあると云ふことを暗示して居るものと云はなければならぬ。以上此處に一段落を切ります、一段落を切つて申しまするとと云ふと第一に仕合と云ふ事を目的としてやつて見ても、此世の中の善因善果、惡因惡果と云ふことが卽ち當つて居ない。善因善果、惡因惡果でないから仕合と云ふことを目的として忠實、熱心、勤勉、正直でやつて行つたら大いに失望落膽することがある。夫だから忠實、熱心で以て行くときには仕合とか幸福と云ふことを目當として行つては駄目であると云ふことを第一段に御話する夫から第二段には更に進んで仕合と云ふことを分析して考へて見ても其仕合と云ふことは我々が人間として尊い人間であるとか、立派な人間であるとかさう云ふ人間であつて見たいと云ふ所のものとして此仕合と云ふことが違つて居ると云ふことを現はして居るものであつて、其處で今度第三段に人間の價値、人の價値と云ふことである仕合と云ふことは別のことであると云ふことを考へて行かなければならんと云ふことになつて來た譯である。夫はどう云ふことであるかと云ふと人間の價値と云ふものは人間其物の價値である、一寸六ヶ敷いことであるが、だから段々話をして行くと判りますが人間其物の價値、處が幸福とか仕合であると云ふことは、仕合と云ふことは何であるかと云ふと人間なら又外物の價値である、即ち先に例へた富にして貴と云ふことを考へる、第一にお金持で財産と云ふことを考へる、財産が餘計にあると貧乏人よりも命持の方が仕合であるけれども夫は其財産とかお金と云ふものは夫は其人の價値じやない、人間其物の價値じやない、何故ならば人はお金があつてもなくても其人の價値は變らない、貧乏人になつたか

らとて其人の價値は下る譯じやない、お金持ちになつたからとても決して價値が上る譯じやない、人の價値と云ふものは我ならん外物である、財産は自分じやない、自分其物と違つたものが人其物の價値夫は財産の外物の價値として丸ッ切り違つたものである人の價値と財産と云ふものは大分違つて居る。今其事を話しますが若しや其仕合せ、幸福とか云ふものがお互の人生の目的であり一生を何とかして仕合になりたい、幸福になりたいと云ふことは人間の價値であり目的であるとすれば、仕合であるならばある程、人間として偉いと云はなければならん、仕合が人生の目的であり此世に生れた意味であるとすれば其仕合を自分の身に得ることが出來た人であればある程仕合である、其人の價値は高いと云はなければならん即ち仕合であればある程其人の價値が高いと云ふことはどう云ふことであるか、先に仕合を富にして貴と云ふあの調子に隨つて云へば身體が丈夫で長生でお金持ちで立身出世したいと云へば云ふ程人間の價値が高い立派な人間と云はなければならん、若しも仕合と云ふことが此世の目的であるならばさうであらう、けれども先ずさう云ふことを考へてさう云ふことを御互の胸に問ふて見て果して納得の出來るかどうかと云ふことを御考へになつて見れば判る、お互の胸に問ふて見て決して夫は納得の出來ないことである、是迄の忠臣、孝子、義士、烈婦と云はれて居たやうな人、誰れが立身出世をしたお金持ちになつた長生をしたと云ふ人があるかと云ふに寧ろ此の忠臣、孝子とか云つた此世に道德上の鑑と謳はれ傳へられて居る多くは寧ろ不仕合であるやうに思ふ例を擧げて見ると大石良雄は小野九太夫より大石が不仕合であり、吉良よりも淺野の方が不仕合である、或は佛御前にしても靜御前、常盤御前にしても所謂烈婦と云はれた人も事實皆不仕合な人間である、或は近く本縣でも定めし此春に孝子烈婦等の表彰があつたでありませうと思ひますが夫等の方々は何んな方であつたかは存じませんけれども私の縣等でも五人あたが、其五人の人を見ますると貧乏で食ふや食はずに生きて居つた人が多いやうであります、私の住んで居ります京都府で先日表彰された子供がありましたが夫等も矢張り貧乏で親類の家に預けられて居つた子供が正しい道を守つたと云ふ廉に依つてゞある。此世の龜鑑と云はれ

て居る人々は此世に於ては寧ろ不仕合な方々が多い、決して身體が丈夫で長生をして居る金持で立身出世したやうな人は我々が立派な方である忠臣である孝子であると云はない、かやうな人にどう云ふ人を見出すことが出來るか、さやう考へて見ますると云ふと偉い人間が此仕合である所の人間が人間としての偉いと云へないことは明かである、お互の胸に問ふて見ると判る實際話をした書物に依て聽取した所を考へて見ると偉いと云はれて居る人は皆な不仕合である、不仕合であればある程人間が偉いと云ふことが云へることは明かである、是は私が云ふのでなく諸君が諸君の胸に問ふて見れば私の云ふことが最もであることを信ずることが出來ると思ふ。所が斯樣に申して參りまするとと云ふと夫は斯う云ふ風に議論を立直して來れば仕合なることは確かに道德上偉大な人間であると云ふ風　云はれるかも知れん、夫はどう云ふ風に論を立直すかと云ふと道德上偉い人間であるとか、或は人間の鑑となるべきやうな人と云ふのは事實仕合になつた人を云ふのじやない、即仕合になつた人を云ふのじやない、仕合にならうと奮鬪努力して行く所の人が是が本當の偉い人である。仕合になつた人が偉いんじやない、仕合にならうと奮鬪努力をやつた人が偉い人間である、夫だからして是迄の人間にしても事實に於て不仕合せな人間で道德上我々人間の手本とするやうな人があつたにしても一向差支へない。斯う云ふ風に論を立直して或は其論が立つかのやうに考へられる、然らば其論は成立つ事が出來るかどうかと云ふことを更に進んで考へて見ると仕合になるやうに舊鬪努力する所で、例へば先に大石良雄と小野九太夫の例を取りましたから赤穗義士に付て云ふならば天川屋儀兵衛は淺野家の一大事と聞いて大阪からして息を凝らしてすた〳〵播州迄駈け付けてさうして良雄に向つて此際何とかして料見して貰はなけりやならん、と云ふた所大石は自分の鋒先を暗ますために敵討等をやる考へはない、お前は町人の身分であるからして唯だ町氏が偶々淺野家に出入りを計されて居つたと云ふに過ぎないからお前が何も義理立をする必要がないから歸つて商賣の道を勵んだらよからう、是は淺野家分散に當つて分けた淺野家の寶だと云ふて一つの包金を與へて歸さうしたさうである、若し天川屋にして幸福を獲得するに努力すると云ふことで

あるならば其大石の一言に隨つて、さうでございますか、夫ならば御言葉にあまへてさうして大阪に歸つて又商賣を始めませうと斯う云つて歸れば一番仕合である。良い加減に金を頂戴して行つて店繁昌をやつて行かうと云ふなら是は幸福へ向つて奮闘努力したものと云はなければならん譯である。けれども其事を諸君の實際に胸に自問自答して見たらどうか、あの時天川屋が大石の言に隨つて左樣であるかと云ふて退いて昔の通り天川屋の店を張つて居つた方が儀兵衛としての男が立つて居つたであらうか、こんな鈍な國家老良雄を叱咤して腹一文字に掻き切つて殿の御供をして行かうと云ふ忠誠を見せた。其忠誠を見せたがために大石が大事を明かして愈〻四十七人の武器の心配を頼むと云ふことになつた譯であるが、其忠誠を明かして良雄に頼まれた方が儀兵衛として偉いのであるか、夫を自問自答して見たら私の與へた問題が解決出來ると思ふ、何方が偉い、幸福仕合である、仕合を獲得しやうと云ふ所へ向つて天川屋が奮闘努力したならば元來た播州道を大阪に向つて歸つた方が幸福に向つて努力した方が良い、さう云ふ風が偉いか、其處で腹一文字に掻き

切つて殿のお供をしやうと云ふ天川屋が偉いか、何と云つても腹一文字に掻き切つて殿のお供をしやうとした天川屋が偉いと云ふことは皆樣の胸に聞いて判る。一つはお金を貰つて商賣をする、一つは掛替のない腹一文字に掻き切る、是は比較にならん譯であります、其善も此上の善はない、其善をやる所に天川屋が偉いと云ふ以上は、確かに相當確信されると思ひますが其天川屋が偉いと云ふ以上はさうすれば人間は幸福に向つて奮闘努力することが善いのでないと云ふことが判る。夫が人間の目的じやないと云ふことが判る。さうすると更に仕合とか幸福とかと云ふことを云ふ所に人が更に論を立直して行くことが出來る。夫はどう云ふことであるかと云ふと是は斯う云ふ譯である天川屋の例を取つて云ふならば夫はお前の論は一を知つて二を知らざるの議論である、天川屋が腹一文字に掻き切つて殿のお供をしやうと云ふのも實は彼は幸福或は仕合に向つて奮闘努力をしたんである、我々普通の俗人の根生から云へばお金を貰つて大阪に歸つて商賣する方が仕合のやうに思はれるけれども我々の俗人考へで天川屋のやうな考へを、仕合と云ふのはさう云ふやうな

ことでない寧ろ是迄の鴻恩に感じて殿のお供をするのが幸福である、夫だから天川屋は幸福仕合と云ふことを、大阪に歸つて商賣をやつて行くことも幸福、腹一文字に掻き切つて殿のお供をすると云ふのも幸福仕合である、何方も仕合であるけれども天川屋は自分の望む所の仕合は商賣をやつてお金持になる等と云ふことじやない、此處で殿のお供をすると云ふのが自分に採つての仕合と斯ふ考へたから腹を切らうとした天川屋が幸福を望んで進んでやつて行つたならば幸福、仕合が我々の俗人の考へとは違ふ見樣である。或は正成の場合でも同じことである。若しや北朝に簡を通じて自分の立身出世を計らうと思ふならば彼の力と才とを以てして（欲する所でないであらうけれども）正成が夫をやらずに何處迄も南朝に忠義を立てゝ遂に湊川で討死をすると云ふことになつた、其事を正成の腹の中に這入つて斯う云ふ風に考へることが出來る、北朝に簡を通じて立身出世をすることも幸福であるが又何處迄も南朝に對して誠忠をぬきんで此際湊川で戰死するのも自分に採つて幸福であると云ふ所からして正成は普通の立身出世と云ふやうな意識から考へて仕合と思ふ

所のことをば退けてさうして自分の幸福に即ち南朝に對して忠義をたてると云ふ其幸福を望んでやつたのだからして矢張り正成は何處迄も南朝に忠義を盡したと云ふのも是が正成の彼の幸福と云ふことを望んでやつたに違いないと云ふことを考へることが出來る、左樣に天川屋の場合にしても正成の場合にしても仕合と考へる考へ方が出來る、即ち仕合と云ふことがどう云ふことが仕合であるかと云ふと其仕合の考へ方が違ふだけで矢張り彼等の仕合と云ふことを目的として行つたに違いないと云ふ斯う云ふ風に論を立て直して行くことが出來るが、其論は然らばどうか、其論になりますると此處では少しく面倒だ、先の目同自答で解決が六ケ敷いことになる而し段々良く御考へになれば夫も判らねばならん筈であると思ひますが此時の幸福と云ふことですが天川屋が腹一文字に掻き切つて殿のお供をするのも仕合、夫れから商賣をやつて店の繁昌を圖るのも仕合、夫を假りに判り易くするために商賣をやつて段々天川屋が金持になつて行くと云ふ方の仕合は下等の仕合である是に反して殿のお供をする方は仕合の中の上等な仕合である、又正成の場合には、幸福は我南朝に

忠勤を勵むのが上等の上等の幸福であると考へたのである、夫だからして彼等天川屋にしても正成にしても彼等は下等の幸福を捨てゝ上等の幸福を求めたのに過ぎない。やつぱり幸福を求めやうと奮闘努力した點には同一である斯う云ふ風に考へることが出來るけれども而し其考へ又其論に付ては、どう考へなければならんかと云ふと、云ふ所の下等の幸福と上等の幸福とは一體何に依て分けるか、何處に其上等下等の法則差別があるかと云ふことを考へて見ると其處に更に前の人の價値と物の價値の區別を付けることに到着するのである即ち上等の仕合と云ふ時の仕合は是は正成にしても天川屋にしても忠義とか節義とか廉恥とか云ふ其人間の價値を發揮しやうと云ふ所の仕合を認めてある、即人其物の價値である忠義と云ふ心其物である、廉恥と云ふ心其物は即ち人間其物の價値、夫を幸福と考へ是に反して大阪に歸つて商賣をやつて財産を殖やすと云ふ處の仕合は財産と云ふ我ならぬ外物の價値、財産と云ふものは己れ自らの價値ではない。財産が己れじやない、財産があつてもなくても人間其物の價値には變らない、百萬長者の養子でも忠義の論は忠義の論である、水飲百姓だからと云つて偉い者は偉い、百萬長者だからと云つたとて水飲百姓より決して良いとは云はれない、人間の價値は我ならぬ外物の價値とは丸つ切り違つて居るものである。其處で今の天川屋が大阪に歸つて商賣をやると云ふのは我ならぬ外物の財産と云ふものを目的としたのである、或は正成が北朝に簡を通じて立身出世するのも我ならぬ外物の價値を認めたと云ふ。さう云ふことを捨てゝさうして忠節其物廉恥、忠義人間其物を幸福と考へたと云ふのであるからして等しく上等の幸福下等の幸福と云ふ言葉は幸福と云ふ言葉でございますけれども同じ言葉で現はすことの出來ないことであると云ふのは人の價値を指す、他は我ならぬ外物を指して云ふ所の意なるが故である。斯樣に考へて見まするとどう云ふ風に理窟を立てゝ行くか、先に申した仕合とか幸福とかゞ世に生きて居る目的である。仕合になるのが五十年七十年の意味であると云ふことはどの方から考へても考へ付くことが出來ない、其處で今日提供した眞先の問題、人間は何か人間である以上飲んで食つて寢て着て行くと云ふ譯に行かず何か目的を立てゝ理想と云ふものを立てゝ夫を

實現して行かなければならんのである。其處に我々の人間と云ふ者の生活の價値がある譯であるが其目的とか理想とか云ふことが仕合でなく、幸福でない、仕合を獲得し幸福にならうと思ふて稍もすればまかり間違つて幸福を望んで得られんと云ふことがある、又幸福を得ても夫が我ならぬ外物を自分の身に獲得したのでは手前の價値、手前の命は五十年七十年息があるものでないと思ふ、どうしてもお互は唯此世に安樂とか仕合と云ふことを願つて此世に生活して行かうと云ふのは間違ひである、さう考へないでは人間の生活を生活したと云ふことは出來ないと云ふのが今日の結論である。然らば五十年七十年の命はどうして行けば良いか我々の目的理想と云ふものはどう云ふ所にあるかと云ふことがどうしてもお互ひに人々靜かに考へて行かなければならん、さうなければ我々は一日も生きて行くことが出來ないと思ふ其處で今日明日の二日を通じて此五十年七十年に對し意義ある生活をどう暮して行かうかと思ふことを解決したいと思ひます、今日は是で終了致したいと思ひます。

昨日は仕合すると云ふことは此世の目的ではないもつと外に我々が此世に處して行くべき目的があると云ふことを御話して置いたのであります。今日は其處で然らば我々の人生の意味と云ふことが何處にあるかと云ふことを、或は生れた効があるかと云ふ其問題を御話するが必要かと思ひます。昨日は我自らの價値と我ならぬ外物の價値とは違つたものである、例へば財産と云ふやうなものは我ならぬ外物である、隨つて財産が幾等多くたつて我自らの値打かそれで高まる譯ではないし我ならぬ外物の財産が少くたつて貧乏だからと云ふて我自らの値打が下る譯でない。我自らの値打は我ならぬ外物の如何に依て決して制限されるものじやない左右もされるものじやない。影響もされるものじやない。或は社會上の地位と云つたつて同じことである例へば社會上に地位と爵位を持て居る人がある、爵位があるから偉ひ晋通の人間だから詰らんと云ふ譯じやない。華族の馬鹿殿とは昔から言ひならはしたことである。稍々もすれば有爵の人に却つて人間其物としては詰らない者があるお互ひの方面の中に偉い人間が存在して居る詰り財産とか地位とか其他　切の我ならぬ外物の値打と我自らの値打は全く違ふことであると云

ふことを申したのでありまして、其處で我々としては我ならぬ外物を幾等多くしたつてそれで此世に生れた効があると云ふ譯のものでなくして是に反して我自らを少しでも是を高めて行かう是を增して行かうと云ふことをやると云ふこと其事が此世に生れた意味である此世に生活して行く奴隷であつてはならぬ約言すれば我自らを出來得るだけ擴大し出來るだけ增進し發展して行く夫が此の五十年七十年の意味であると云はなければならぬ。然らば其處迄判つたとして然らば云ふ所の我自らの値打とは何んなことを指すのであるか是が問題である、だから我自らの値打と云ふことを御話する譯であるが我自らの値打と云ふことを御話する前に我自らと云つたら何であるかと云ふことから御話してかゝらねばならん。我自らは何であるか、何處にあるか何んな物であるか、此問題は或は極めて無雜作に判るやうな問題であるかの如くにも考へられますが又良く考へて見ると是程六ケ敷い問題はない、我自らは何であるか、何んな物か、私が左樣な問を皆樣に向つて發したならば皆樣はどう御考へであらうか、なーにそんな問題は譯はない此体此頭此心を持つて居る是が我じやないか、それがお前じやないか、我が此處に嚴然として存在して居る是が我と云ふものである、何も六ケ敷いことでない、生れ子でも判ると斯ふ第一に御答へになるかも知れない。けれども諸君の御答へに對して滿足することが出來ない。六十點以上の點數を上げることは出來ない、先づ落第である、何故落第であるかと申すと恐らく皆樣はお寺に於て色々御說敎等を御聽(コウシンノケウゴー)問であらうかと思ひますが此体と云ふことは五蘊假和合と云ふて色、受、想、行、識の五つが假りに集まつて出來て居るのが此の人間の体、それが散じてしまへば体が何處へ行くか、譯の判らんことになる。お互は散髮もする、毛を長くして居れば長い毛の先迄自分であるけれども、切つてしまへば自分でない、爪もそうである、湯に這入つてシャボンで体を洗へば垢どなつて落ちて行く、其の垢でも自分にある限りは自分であつてシャボンで落されると自分でなくなつてしまふ乃至一切の汗でも何でも体の中にある場合は自分であるが汗となつて外に出てしまつたら自分でない、其他人に依ては或は蛔虫であるとか條蟲であるとか云ふものを蓄へたものが無理に蓄へたわけでないけれども蓄へて居る、それ等の虫が腹の中に居るとすればその虫も自分であるやうであり、ないやうである我の中に收つて居る限りは自分の如く思ふが例へば蛔蟲であるならば「虫下し」でも飲んで了へば落ちてしまふ、さうすれば自分でない、それだから体が自分である等と云ふことは是は誠に淺薄な考へ方で、そんな答をしたものにはどうしても六十点やる譯に行かん。然らば此心は如何…、心もやつぱり同じことである、六ケ敷い言葉で申すと其心は經驗的の心であるが日常色々泣いたり笑つたり考へたりして居る心此心と云つてもやつはり体と同樣に此我々の心と云ふものは幼稚であるから小學校から中學校及大學に上るに隨つて段々變つて行く、昔の通りの精神なりと云ふことはあるものじやない、若しか昔の精神の通りのものであつたならば是は少し御目出度い低能とか白痴(ハクチ)とか少し足らない方て値打のある人間であるならは必ず時と共に段々進歩もして行く、時と共に進歩する計りでなく自分の環境に段々順應して變つて行つて居る。始めは家庭だけ後は幼稚園、學校夫から世の中と斯ふ家庭から幼稚園學校社會と自分の居る環境が變るに隨つて段々と内容が變つて行く即ち世に出て揉まれるとか世間の荒波に當るとか世間の辛苦を嘗めるとかと云ふことをやつて段々頭も進歩して行く人間も練れて行く夫であるから色々であると云ふことも時と共に環境と共に段々變つて行くものであります、体の方であると所謂新陳代謝で毛の延びた時には散髮屋に行つて切る爪の延びた時には切る垢の溜つた時には錢湯に行つて流してしまふ斯云ふことをやるのであるが心の内にもさう云ふ新陳代謝があるかと云ふとやつはりある。生れて出るからの中に這入つたものが一切減らないと云ふ程厄介なふ事はない、人間の倉であるから二度這入れば減らない心ならば仲々環境と共に進歩した内容が這入り切るものじやない。先から先と段々忘れて行くから、倉が空になるから頭に這入つて行く、又さう云ふ變化があるからこそ人間が生きて行くのである例へは凡そ人生の悲しみで親に別れた程の悲しみはない、私は夙くに兩親に別れて居る、是程悲しいことはない其當時の心持ちであるならは日も夜も居られない悲しみである、一生こびり付いて私の頭に悲しみが殘つて居つたならばまあ神經衰弱か何かで到底命は滿足に行く譯のものじや

ない、親のことは忘れるんじやない、親のありがたみは年を取るに隨つて泌々と味はされる、是は皆様の實驗されることゝ思ひますがそれで私自らだつて決して亡くなくなつた兩親を忘れる譯じやない、其當時の身も夜も判らない思ひが必ずしもこびり付て居る譯じやない、それだからこそ神經衰弱にもならずどうやら親の心を立て通して行かうと云ふ心持で今日の職務として努めることが出來て行けるのでありますそれだからして矢張り此精神の中にも新陳代謝と云ふものがあるので我々實際生きて行けることゝ思ふ体と同じもの、さてさう云ふ風に考へて見ましたならば此体も此現世の經驗的な心も自分であると云へる筈はない、それであるから此經驗的の學問的の言葉で云ふと經驗的の体と經驗的の精神と云ふものは決して我自らと云ふものじやないそんなものが我れ自らだと云へない事は明らかであると思ふ、然らば我れと云ふものは何であるか何處にあるか何んなものであるか又、此頭が自分じやない体が自分じやない、それじや何處にあるか是は實に大問題である大問題でありまして、私が此處で其問題に對して千言萬句を費して說明してもそれは判らない

私が幾等御話したとて御話だけでは私を代ゆるに富樓那の辯を以てしてもそれはとても判らない、私が說明することを止めて暫く諸君自らい胸で考へて戴かなければならない、諸君自らの胸に考へて戴きさへすれば私が何等說明を加へなくとも、うんさうか、うんさうだと云ふことがお互に分明的にちやんと判る、我、自と云ふことは何んなものか、うん判つたと、判つたか判つたと云ふ分明的に事が判ると思ふ、諸君に考へて戴くと云ふことは外でもない諸君の心の中に斯ふ云ふことはありはせんだらうか、俺は死んで居るものじやない、生て居るものじや又生きて居るけれども生て居ることが大根でも蕪でもない生きて居ることは猫でもない、犬でもない、即ち我は植物でもない、動物でもない、生て居る人間であると云ふ、さう云ふ御心がないであらうか、簡單に云へは我は人なり我は人じや、人じやと云ふさう云ふ御心持が諸君の胸の何處かに響いて居はせんか、其我は人だと云つた時に人であるかそれはその人と云ふはこの体とか或は經驗的の心であると云つたやうなことゝは違つて居る、其人と云ふことは始終使つて居る例へば此經驗的の心に付て經驗的

心の方では非常識なことをしても、多く儲けてやりたい、人に迷惑を掛けても自分の利益を取りたい、と云つたやうな經驗的の心が働いて居ることがある、佛者が是を邪念とか煩惱とか云ふ、其邪念とか煩惱とか云ふ心が經驗的の心として働く其時にそれじやいかぬ、俺は人だ人である以上は人の迷惑に關はらず自分さへ儲けれは良いと云つた風でなくそれは止めなければならん、斯ふ云ふ風に色々煩惱邪念、經驗的心が起つた時にそれを押へ付けたりしば〳〵良い方に導いたりする所のものが自分である、我は人であると云つた時の人である夫故に是を學問上の言葉で申しまするとと云ふと我は何であるか、我自らと云ふものは何であるか何處にあるかと云ふことは我自らはどう云ふことか判らんけれども各自が我は人なりと自覺すれば其處に我がある、我は人だ動物じやない、大根や木の株じやない生きて居る、人間であると云つた自覺のある所に我と云ふものが存在して居る、夫故に自覺と云ふ、皆様が此處で我は人なりと云ふことをとつくりと自分の腹に問ひ自分の腹で答へることが出來るなれば我は人なりと云ふことを自覺しさへすれば私が千言萬句の說明を加へなくとも前申した通り我と云ふことはどう云ふものであるか判つたか、うん判つた自問自答のやうなことをして我と云ふことを確實に引掴まへることが出來る、所が其我と云ふ我、人なりと云ふ人は人であるが其人は段々考へて見まするとと云ふと餘程面白い働らきをして居るものであると云ふことを看破することが出來る。どう云ふ面白い働きをして居るかと申しまするとと此我と云ふことが學問上の言葉で申しまするとと云ふと超個人的のことであると云ふことを認めることが出來る。此超個人的と云ふ我はどう云ふことであるか、是は理論の方と實行上實踐の方と兩方に別けて見ることが出來るのでありますが理論の方で申せば例へば此處に三段論法、論理上に於ける三段論法と云ふものがありますと大前提、小前提、斷案の三段に排列する論理の方式の動物は生物なり。虎は動物なり。故に虎は生物なりの如く、斯ふ云つたやうなのが是が所謂三段論法の極く普通の形であるが此三段論法は是は誰でも承認しなければならん道理であらう、即ち人は死ぬものである大閑様は人である。だから死なければならぬ、此三段論法は誰でも承認しなければならん、若しか是を承認

することが出來ない者は是は少し頭が狂つて居る所の人で普通の者じやない、此道理が判ると云ふことは是は誰が判るか、猿等は猿智慧と云つて半ば人間よりは餘程氣がきいて居る、人間より餘程氣がきいて居るけれども悲しいかな道理が判らない毛が三本足りない矢張り此道理が人間じやなくては判らん、人間でなくちや判らない道理だ、人は我、我は人なりと云つた此人の道理が、人と云ふものは純理論の方から考へて俺は人であると云ふ此の道理の判る者は人でなければならん、我の人と他人の我を、思ふ時同じ人じやないかと云ふ事に氣が付きやせんか是は純理論の方であるが例へば忠孝なれば忠孝、人民としては必ず上御一人に對して忠義の道を勵まなければならん、人の子供としては親に對して必ず孝行の道を踐んで行かなければならんものであると云ふ事も是も所謂煩惱とか無明の心と云つたやうなさう云ふやくざな心で考へた時には不義不忠も、親の云ひ付けも踏臺にして一向守れないで自分の得手勝手に事をして見たくなる、それは所謂煩惱とか何とかの心の働きで我に返つて考へる時是はいかぬ凡そ人として、人である以上は子供としては孝行

でなくてはならんのは人間の道である、臣としては上御一人に仕へなければならんのは人間の道である、若しか子供にして孝行の道を、臣としては君に仕へる道を間違へたら、人間にして人でなくなるぞと云ふ警戒を與へる心は何であるか、それは我の心である、其我は今云ふ通り誰が考へても、甲の人が考へても乙の人が考へても凡そ人間であるならば必ず人としては孝行でなくてはならんもんじや實踐の方から考へて見ましても我れと云ふことは超個人的の者であると云ふことは考へられ得る譯であります、即夫は總ての人の甲乙丙丁……普通の人の一般なれば普通の人であると云ふ斯ふ云ふ風に考へることが出來る、其處で「自覺した我、超個人的」、自覺した我と云ふことは學問的に云へば普遍的な超個人的なことであると云ふことは判つて來たのであるが是が此自覺した我と云ふことが是が我々に對する絶對的の權威である、自覺した我と云ふ事が絶對的の權威と云ふ事は何であるかと云ふとそれは先に申した例へば理論の方で云ふ、理論の方で大前提小前提斷案の三段論法と云ふことが何故是が確かなるものであるかと云つた時に何故と云ふ道理はない唯だ我が此普遍的な超個人的な我と云ふ者が尤もじやと承認するから夫が眞理である、而も其我と云ふ事は自分の今申した三段論法以外の論法をやつたならば夫は間違ひである、謬論である、謬論であると云ふことを宣告する所に俺の道は正しい三段論法の道は正しい道である、間違つた道であると云ふことを宣告する我々は唯だ夫に隨ひ夫を奉じて行くの外はない、又是を實踐の方面から見ても今の忠孝と云ふことを以て說明致しますれば忠孝と云ふことが人間の道じやぞ、夫が本當の人間の情であり正しい道である夫以外に這入つたならば夫は邪路、邪な道であるぞ普通の人間の道じやないぞと宣告する所のものでない、我々は唯だ其我の宣告に隨つて其命を恐れ畏みて夫に隨つて行くより外に仕方がない、其意味に於て自覺した我、普遍的な我と云ふことは我に對する絶對の權威であると云ふことが云へて、もう一度其事を繰返して申しますと云ふと此絶對の權威に對するものは欲求と云ふ、斯うしたいあゝしたいと云ふ欲求、望みである、飲みたい喰いたい、と云ふことが望みである、さうしたい斯うしたいと云ふのと自覺した我が孝行である忠義であると云つた時の氣分と同じいのでありますかどうかと云ふことを考へて見まするとと云ふと決して同じじやない、飲みたい喰いたい寢たいと云つたやうなさう云ふ自分の欲求と云ふものであるならば自分の心持で飲みたいから飲む寢たいから寢る、喰ひたいけれども我慢する寢たいけれども我慢をするどうでも云へる夫に對して何等不安と云ふ事がない、寢たいから寢る飲みたいから飲むちつともそれに隨つてもそれに逆つても何等不安と云ふやうな感じがないけれども自覺した我が親には孝行である君には忠義であると云ふ考慮を發した時に其考慮に逆らうと云ふことは何んとなく濟ないやうな氣がする何となく何物かの尊嚴を冒瀆するやうな氣持がする、唯だ飲みたいから飲む、喰いたいから喰ふ、と云ふことは自ら違ふやうに思ふ、夫は自覺した我と云ふものは應て夫が絶對の權威であり一つの尊嚴を持つて居ることである、或尊さを持て居るもので其尊さを持て居ることが權威を持て親に孝であり君に忠義であると斯ふすることが夫が自覺した我、我とは何ぞやと云ふ、自我は何であるかと云ふことが段々判つて來たと思ひますが以上申したやうな譯であるから

して、其自我、其自覺した我と云ふことは凡そ人である以上は誰にも存在して居る所の人である我と云ふことのない者はない、さうして夫れが我々人間を或は理論の方面實踐の方面に於て指導し正しい道を導いて呉れる正い道であると云ふことが判つて來た、さう云ふことが我と云ふ者であるが其我は神と云つても良い佛と云つても良い、詰り我即神であり我即佛でありますお互ひの心の中に各自皆佛が宿つて居る一方から見れば千差萬別な凡夫であるが他方から見れば皆な佛性を備へて居る佛に成り得る素質を持つて居る人間である其尊い尊嚴なるものを持て居る尊嚴なるものが或は佛であり、神であります、其の佛と名付けられるものがそれが我、其處で我と云ふことは先づさう云ふものであるとして判つたと致しまして我自らの價値と云ふものは此の次の問題であるが我自らの價値と云ふことは其處でどう云ふものであるか、我自らの價値と云ふことは今申した意味の我、各自の中に宿つて居る各自の心の中にある絶對の我或は神佛と云はれる我、其我の尊嚴を冒瀆せず其權威を妨げないやうにして行くと云ふことは是が我自らの價値である、我自ら我と云ふことの尊嚴を冒瀆したり權威を傷けたりすると云ふことは巡て我自らの價値を毀損する所以でありまして是に反して我の尊嚴を冒瀆することなく我の權威を傷けることなく我自らの命を恐れ畏んで其通りにやつて行くと云ふことは是が我自らの價値であります、換言すれば夫故に我自らの尊嚴を冒瀆しない、我自らの權威を傷けないと云ふことはどう云ふことであるか我自らが我を敬ひ自らを敬する自敬、我は絶對の權威者である我は絶對の尊嚴を持て居るものであると云ふ其我と云ふものを自ら敬つて行くと云ふ所に我自らの價値があります、即ち我自らの價値は一言以て自敬にある、我自らを敬ふと云ふ所に我自らの價値がありますと斯う云はなければならぬ、扨て我自らを敬すると云ふことは判つたのでありますけれども我自らを敬すると同じに又他の人をも敬しなくてはならんだけ自ら敬すると同時に他の人間をも敬つて行かなければならん、けれども此處に大問題である他の人間を敬ふと云ふことはどうして出來るかと云ふ問題、是は簡單に考へて居る人は極て無雜作に考へて居るのでありますけれども良く考へて見ると非常に六ヶ敷い問題であります、我自

らを敬すると云ふこと又は、他を敬すると云ふことがどうして出來るかと云ふことは仲々容易な問題でない先ず第一に我自らを敬すると共に他の人を敬する他の存在と云ふものがどうして判ると云ふ第一の問題であります、我の他に此席に四百の人が居ると云ふことがどうして判るかと云ふことが第一の問題であります、是はそんなことをどうして問題になるかゞ判らないと云ふかも知らんが、誰でも云ふでせう、目を開けば四百の人間が居ると云ふことが判るじやないか、目を開かないでも手で觸つて見ても判るじやないか、何を苦しんで戸迷つてそんな問題を出すかと、寧ろ皆樣にそんな問題を出すかと云ふことを怪しむが、けれども私に暫く言はしめて下さい、私の目を以て見、手を以て觸るのが人間じやない、是は或は人形かも知れない、動物かも知れない、少くとも良い加減の肉の固まりの我か判らない、是が人間であると云ふことをどうして目で見たり耳で聽いたり手に觸つて見たつてどうしても判らん、然らば私のぐるりに四百人の人間がをると云ふことをどうして判るかどうも其私のぐるりに居る人は色々の顏付をせられて居る、おかしいやうな顏付をされたりして居られる方もありますが顏付は心の現はれ、心と云ふことはどうして判るか、私がいくら眼鏡をかけた所で心を見ることが出來ない、心を持て居ると云ふことはどうして判るか、是はどうしたつて色んな感覺で以て諸君の中に心があると云ふことを認めるのでありますが心がないならば動物である人間にならん、さう云ふ風に考へて見ますると云ふと自分のぐるりに四百人の人間がをるかと云ふことは大問題である心と云ふものがどうして判ると云ふことが必ず問題になつてこなければならん、それはどうして判るか、心があるから、手に觸はることが出來なければ心があると云ふことがどうして判るか、それはどうも自分のぐるりに他の人間が居ると云ふことが判る道がないが唯一つあります其一つは何であるかと云ふと自分の先に云つた自覺の我、人が何と云つても我は人間であると云ふ自覺があります、其自覺した自分と云ふことも暫く諸君に色々顏付とか擧動とかと云ふもので自分の心を映し入れて其映し入れた自分の心を反射的に考へると云ふことに依てのみ自分のぐるりに人間がをると云ふことが判る動物でない人間であると云ふことが判る

是を學問上感情移入自分の我は人なりと云ふ感情を諸君に此形の中へ入れてそれを反射的に考へると云ふことに依て始めて諸君が我に對して人間になつて來る譯である、是を或は同情とかと云ふ言葉で現はし或は名付けて神祕的と云ふ形容詞を使つて神祕的の同情、實際どうしてさう云ふことが判るかと云ふ説明が付かぬどう云ふ意味に於て神祕的なのである、さう云ふ感情移入に依てのみ我のぐるりにある所の人間であると云ふ事が判る、其處で大事な事は自分のぐるりに人が居ると云ふ事を認めると云ふ事が自分が人であると云ふ自覺が彼我で深い程他の人をも人間であると云ふことを認めることが彼我と云ふことでありまして隨つて自らを敬することが出來る人には更に他を敬することが出來ると云ふ極めて重大なことが生じて我自らが我の尊さを、我の中に佛、神樣と云ふものを敬ふことが出來る、人間には更に人の中に於ける、他人の中に於ける神や佛を敬ふ人がある自敬の精神がなければ他敬の精神が起きてこない大事な問題である、而して其事が聽て道德の根本である、さうしてお互ひに自己自らを慫慂して行く、第一我々自らを敬する崇敬と云ふこと

が道德的の根本である道德を慫慂して行く第一歩が其處にある人を輕蔑するとか人を蔑むとか人の迷惑を省みないと云ふやうな事はどうして起つて來るかと云ふにそれは自分自らを敬することが出來ないから他を敬することが出來ないと云ふことになつて來る、或は反對に親切とか博愛とか人情と云つたやうなことはどうして起つて來るか、夫は我自らを敬することが出來るから他を敬することが出來ると云ふことになつて來る、茲に一人の人がありまして自分の目上の人と見ると前に腰を屈めること約九十度、是に反して自分の目下の者と見れば後の方に反ること約三十度要するにさう云ふ一種の人間があります、上なる者に諂ひ自分より目下の者なれば威張り散すと云ふ人間があります、前に九十度屈め後に三十度反る、是を三太夫根性と云ふ、三太夫根性と云ふのは道德上より結構なことでない、どうしてさう云ふことが起きて來るかと考へて見ると己れを敬する、自らを敬すると云ふことが判らない人間、己れを敬すると云ふことを知らないから唯だ我ならぬ外物の爵位とか何とか身分の高いと云ふ人には無闇に腰を屈める、自分より目下の者と會するならば自分を敬することが出來ないから自分の對てし居る人間を敬することが出來ない隨つて其三太夫根性の病根は何處にあるかと云ふと自敬の精神の缺乏にありと云はなければならん、小作人に威張り散す地主、勞働者を蔑む資本家是もどうして起つて來るのであるかと云へばやつぱり小作人を蔑すむ地主は、地主自ら自分を敬する意味を知らない、それだから小作人は我も人彼も人と云ふて地主を蔑すむ、勞働者を蔑げる資本家又然りである、要するに高が感情の行違ひ衝突と云つたやうなことは皆な各自己れを敬し他を敬することが出來ないから起つて來る己れを敬する事を知るならばどうしたつて他を敬せざるを得ないのであります、又博愛同情、慈悲と云ふことを考へてごらんなさい同情とか慈悲とか云ふことはやれ身分じやとか金持、貧乏と云つたやうな差別、己は金持である彼は貧乏人である資本家である勞働者である斯う云つたやうな差別の感に囚れて居る限りは決して無能である、無能である人と人は一致することは出來ない、本當の慈悲とか本當の人情とか同情とか博愛とか云ふものはそれをやる時は我は金持だ俺は何爵を持つて居る身分は高い、地主資本家と云つたやうなことを集めて己も人彼も人、神、佛、と云ふ我と彼とは人の精神、神であり人であると云ふことがあつて蟠りのない生一本の純粹の博愛と云ふことが起つて來る、心と心と一致した時に本當の神聖、博愛、同情と云ふものが起つて來るのであります、「雪の日や彼も人の子樽拾ひ」冬の雪の降る日に金持が雪見の酒宴をして居る所へ布子を一枚着て樽拾ひをして居るのを見て、人として同じ者じやないか自分も彼もちつとも變りはない、自分も彼も人であると思ふ我が即ち純粹無垢の我と云ふことは其處に結び付いた所に尊い立派な美しい博愛同情と云ふこと起るのである、斯樣に考へて見ますると我は人なりと云ふ自覺を持て其人と云ふものを敬する、自らを敬すると云ふことが道德の根底であると云ふことは明かであるが而して我自らを敬することが出來る人間には更に他を敬することが出來ると云ふことならば我を敬すると云ふことが道德の第一歩であると云ふことは明かである夫故に我々は自らを敬すると云ふことが所謂人としての價値である夫が道德の根底である而して同時に我自らを敬すると云ふことは修養の第一歩であると云ふこ

とは明かなことであらうかと思ふ、此敬と云ふ敬ひと云ふことは是は我が神道に於ては我日本の神道に於ては非常に八ヶ間敷く云ふて居る所のものであるがそれはまあ神道にもさう云ふことがりあますが支那にも陽明學に於て敬と云ふことを八ヶ間敷く云ふ、日本に於て陽明學を以て後に堂々神道を開いた所の山崎闇齋と云ふ人等は敬と云ふ一字を以て身の守り本尊として良いと徹底的に論じて居る、が矢張り敬を以て操縦して居れば人間は誤りがないと申して居ります、此敬と云ふことは道德上重要な大事なことであると思ふ、而も此敬の中で私が段々御話した自覺と云ふことは一切道德の根本であり修養の第一歩であります、人間の價値は自敬の念を發揮することにあるのであります明日は昨日申したこと丶今日申したこと丶を引括めて申さなければならんから今日は是にて擱めて置きたいと思ひます。

大乘佛教の原理

龍谷大學教授　日下大癡先生述

第一段　序講

第一節　大乘の名義

及ばずながら思懸け無い勝緣で、お招きに預かり、提出致し置いた講題に就いて、暫時御話をさせて戴きます。

凡そ佛教には大別大乘と小乘との二種有つて、抑其乘とは如何なることを意味するかと云へば、乘は運載の義で、何を載せて何處へ運ふか、即ち吾人を乘せて迷妄の生死海から悟りの彼岸に運び着けると云ふ意である。

今此の中大乘佛教は、大、多、勝の三義を具へてその範圍は無邊にして、一切の人をして同一佛果の悟りに迄運載する。之を最初の大の意義とする。又その内容は無量で自利利他共に圓滿ならしむ、之を多の義として、さうしてそれ丈高尚であるから、そこで勝の義を有するのである。

小乘は之に反し、この三義が缺けてゐる。その範圍には制限があり、又その内容にも際限が有つて、それ丈地位が低いから小乘と呼ぶのである。而して今説明せんとする所は大乘佛教の原理である。お話は比較的高尚で、それ丈難解な點があるかも知れぬが、可成解り易く説明を運びたいと思ふ。

此の大乘佛教の中に又權實の二種が有つて、權とは權假の義で、實とは眞實と云ふ意である。此權實二種差別の標準は、即今の原理を徹底して説くと否とに依り存する。即ち此原理を諒解し能はぬ未熟低級の人達のために誘引の手段として、其人に應じて、此原理を若干引下して、暫く假りに説かれたのが權大乘である。それで勿論實大乘は眞實の佛教で、圓熟した人の爲めに、徹底して今の原理を説き盡された佛教である。若し是を現存の佛教各宗に當つれば、即ち華嚴、天台、眞言、禪宗、淨土宗の各派、眞宗、日蓮宗の各派、時

宗及び融通念佛各宗がこの實大乘である。

第二節　佛教の組織

佛教の內容は實に廣汎である。然るに大別二種の要素に由て組織されてある。一には佛陀自身の證理、即ち御悟の境界の紹介、二には吾人に對する實踐窮行の御勸めである。然るに、實大乘の相手は、等しく圓熟したる人ではあるけれども、其人々の個性が各異で萬差である故に、其說明法も亦隨つて一定でなく、實に重々無盡である、けれども其の內容を淺深次第の標準を以て大別せば三段となる。

第一には時代の常識との調和、第二には實踐窮行の規範、第三には佛陀自身の證理である。此中第二の實踐窮行の規範を大別せば、則ち善惡の相對にして、罪惡を誡めて之を廢せしむる事と、及び善德を讃嘆して之れを實踐することの二項となる。

そこで更に以上の三段を開けば四種となる。而して之を名けて四悉檀と云ふのである。

四悉檀の名は、一に世界悉檀、二は對治悉檀、三に爲人悉檀、四には第一義悉檀といふ。第一に世界悉檀とは其時代の世間と云ふ意味で世界と名けたのである。

第二に對治とは通俗に云ふ所の惡魔對治の對治で罪惡を對治する事である。第三に爲人とは廣汎な字義であるが、今は特別に善德を敎へて以て是を實踐せしむる事を意味するのである。最後に第一義とは無上殊勝を意味する語で、換言せば大乘佛敎の極理とも云ふべきである。

短時間の講演ながら茲に序を以て、一寸御禁告申上げたい事がある。と申すのは、今は既に故人となられた藤井宣正先生が、嘗て私等の青年時代にお話なさつた事で、その頃藤井先生の先輩なる相當の見識ある某碩學が、先生に語つて言はれるには「佛敎の聖典は意外に亂雜なる內容を持つたもので、一部分には頗る高尙な哲理が輝かされてゐるが、又一部には頗る低級な材料が散見してゐる。」と言はれたと、撫然として物語られた事が有つて、その頃から私は夫れには必ず動かすべからざる有力な理由がある事だらうと、想察して居たが、追々懇篤な敎を受けて見れば、抑々佛敎は所謂對機說法で、其人に應じて敎化を施されたのであるから、其時代又は其地方相當に、各種の材料も混入せざるを得なんだので、寧ろ之に依つて宗敎としての効果も偉大であつた事を思はねばならぬのである。

而して、此時代相當の說明敎化の材料が即ち今の四悉檀中の最初、世界悉檀なのである。然るに某碩學の如きは、蓋し未だ此点にお氣附が無かつたので有らうと想はれる。

悉檀とは漢語と梵語とで成立つた言葉で、悉は即ち悉皆で、換言せば周到といふこと、檀は梵語の檀那で施しのことである。即ち佛敎は低級なる時代の思想迄をも利用して、而して最後には遂に高尙な無上覺の佛陀に迄も同化せしめ給ふ所の、眞に周到な法施であるから、そこで悉檀と云ふ名が成立するので有る。是に由て諸君が佛典を繙かれる際には豫め好くこの点を諒解されねば疑問百出で、動もすれば、某碩學の樣に、誤つて輕侮の過失に陷る虞なしとせない、此点に就ては深い注意を以て、敎化の高恩を感戴せねばならぬと思ふ。

以上三段、即ち四悉檀の中、今の所謂大乘佛敎の原理と云ふは、最後に於ける佛陀自身の證理のことで、善惡一如の絕對界、即ち第一義悉檀である。

第三節　敎理の兩系

第一義悉檀即ち佛陀自身の證理の說明法として二種の系統がある。一には萬有の成立、二には萬有の存在である。一に萬有成立の說明系統を、近來一般に緣起論と名け、二に萬有存在の說明系統を實相論と名けてゐる。此中今大乘佛敎の原理を說明するには、緣起論の方が比較的使宜であるとも考へてゐるが、然しながら原理其の者の說明としては、寧ろ實相論の方が適切である。何となれば、大乘佛敎の原理は即ち實相と名けられてあるからである。況して此實相を大乘佛敎の印信と定められてあるに於てをやである。印信とは印判、即ち證かな証據と云ふ意味で、此意味を以て亦は之を實相印とも大乘の一法印とも名けてある。之れを一法印と名くるのは、小乘の三法印に對する意で、小乘の三法印は、科學との調和に於ても、又宗敎としての自覺に於ても、誠に尙ぶべき意味を有する。けれども夫れ以上の尊高なる意味を含んだのが、今の一法印である。此三法印と一法印との連絡關係を一言せば、もし禊敎化の人の思想を立場とすれば、三法印より進んで一法印に入るものと言ふべく、又能化の佛陀を立場とすれば、一法印より說下ろされたのが、三法印で

あると言はねばならぬ。

法印の印の語義には、亦心印といふ意味も有つて、即此實相の法印は推測に非ず、想像にも非ず、又概念にも非ず、大覺者の直觀する所、體驗する所、証悟する所であることを意味する語とも爲つてゐる。此場合には印は印現の義で、如實に理の如く、覺智の上に現はれた眞相と云ふことに爲るのである。

是に由て以下説明せんとする所は、佛陀が智慧と慈悲とを以て、自利と利他との德を圓備したる、實踐躬行の結果として、体現せられた所の証理で有つて、そこで他の一般の哲理、即ち哲學者の創造に屬する眞理なるものとは、固より其撰を異にすると御承知置きに成らねばならぬ。

第二段　正講

第一節　總説

大乘佛敎の原理即ち實相は、天然の性德である、決して佛、天、人の所作ではない。他の多くの宗敎中には種々雜多の原始説が有つて、或は唯一神を立てゝ、以て萬物創造の元始者と爲し、或は大自在天を以て造化の元始と定むるなど、其他各種の創造者を立てゝ、以て宇宙の元始とする宗敎も有るけれども、是等は總べて大なる謬見である、抑々時間なるものは、萬象生滅推移の行程上に於ける假定にもせよ、其假定されたる時間は、空間の無際限に比例して、亦無際限で其始も無ければ、亦其終も有り得ない、無始無終である、そこで此無始の時間に在りながら、彼の萬物創造の元始者を立つる者の如きは、若し其元始者は何に依て出來したかと糺難せらるゝならば、たとへ千萬言の遁辭を設けても、到底追窮は免れぬ、要するに彼種の原始説は皆邪論である。今敎法としての佛法は勿論佛陀の敎へ給ふ所なれども、併し乍ら所謂原理其ものは佛陀の創造する所ではない、此点に於て特に御注意を希望する、而して今此原理その物の体は、凡ての相對を超越した絶對法で、ただ佛と佛との智見である。決して實踐躬行の修養不足なる吾人、凡愚の認識し得る所ではない。然るに今佛陀菩薩聖者の指導を抑いで、しばらく之を吾人の認識範圍に當て箝めて、以て説明を試みんと思ふのである。

大乘の一法印、即ち實相の原理を窺ふに、其要点が三つある。

一には空、二には假、三には中である。是を空假中の三諦と名ける。諦とは審實と云ふ語義で、而して一般佛敎の説明範圍に於て、此語義を以て敎の眞實なる事を顯す場合と、又理の眞實を意味する場合がある。此語義の適用法二種ある中、今空假中の三諦といふ場合には、之は理体の眞實を意味するのである。

第一に空とは原理の範圍を表はし、第二に假とは原理の存在、狀態を意味し、第三に中とは原理其ものゝ本質に名けたのである。故に斯樣に分けたる三諦は、一原理の上の三種の德目で有つて、是を術語では、性量、性具、性体と云つてゐる。性とは即ち理性である理性の分量と云ふ意味で性量と云ひ、而して其量は無限量である、と云ふ意味で、其處で空諦は原理の範圍と云ふ事になる。性具とは原理の存在狀態が、圓滿に萬有を具足しつゝ有る事を意味し。性体とは原理の本質即ち理性の体質其ものと云ふ意味で有る。是に由て今此三諦は、一眞實の理性に於ける、其特徵としての三種の德目で、理体が各別に三種有ると云ふのではない、此三德が互に融通して、而して本來萬有の一々に具はつてゐるので、現象差別の萬有以外に、別に離れて存在するのでは無いので有る、萬有の一々毎に此三德を具へて、一々が即ち一切である、即ち絶對實相の理に外ならぬ、其處で此意味を以て諸法實相と説いてある。序に諸法の法の字義を解釋せば、法とは軌生物解の義で、有形無形を問はず、物即ち人の意識の軌として、其知解を生せしむるもの、是を法と名くるのが一般佛敎共通の術語である。其他に或は法則、又は敎法、又は佛陀の御德能を意味する場合もある。佛敎會諸君が日常佛書御渉獵の參考に迄、申添えて置く。而して今の所謂諸法實相といふ場合の諸法は、萬有を意味した詞だと知る可きである。

第二節　別説

第一目　萬有の無性

凡そ萬有は一切無自性である。一法として固定的のものは無い、有形物も無形物も、生物も無生物も、物質も精神も、所謂有爲轉變で、如何なるものも皆因緣即ち機會に隨つて其變化は無窮である。山河も天体も悠久なる長時間中に於ける一小變化に過ぎない、世界第一の高峯ヒマラヤ山も、乃至日本一の富士山も、地變に由つて現出した所の、地殼の皺の一部に外ならぬ

所謂桑田變じて碧海となる。手近い處で安宅の關所もは既に海底に沈んで居るでは無いか。忌まはしい事から、首府の東京も瞬間にして荒涼たる原野となつた事を忘れてはならぬ。是を人格に引き當つれば、たとへ社會の尊信を受くる程の善行者でも、一旦罪惡を犯すならば、忽ち變じて惡人となる、如何に親族にすら忌憚せらるゝ程の惡漢でも、心機一轉して改悛すれば即ち直に變じて善人となり得る。舜を學べば即ち舜、盜跖を學ぶ者は即ち盜跖である、已れに克たば、遂に狂者も聖人と爲り、若し己れに克たざれば、則ち聖人も亦墮落して、狂人と云はれねばならぬ、更に各種の團体を見るに、如何に表彰された程の模範村でも油斷大敵で、横様に弛緩し頽敗すれば、忽ち其名譽すらも保持する事が出來ない、敏なれば則ち功有り、勤むれば則ち賢しからず、飽く迄緊張して以て進趣するならば、向上的變化も亦無限である。斯様に萬有其事象を固守せない事、之を諸法無自性と云ふ。然して無自性なれば則ち空なる事を知らねばならぬ、現象のまゝ即ち空が萬有共通の一事實である。

既に萬有は即空が事實である。而して空なれば即ち邊際のある可き筈が無い。それで無邊際を以て實相の範圍とする。然るに吾人の認識は凡て相對的有邊際で此即空の理を直觀し能はぬ、其處で此空諦の理は吾人の認識を超越すると同時に、吾人の相對的有邊際の認識を打破する德用である、と云ふ意は空諦の理が、此無邊際の理を直觀し得ない所の吾人の、相對的有邊際の執着即ち捉はれたる迷妄の、固着的の習慣認識に反して、少くとも今現に、不完全ながら此一場の講演を透して、以て諸君の諒解を啓發して、假令へ仍ほ相對的認識範圍を出でないにもせよ、其固着的習慣認識が虛妄な謬見である事を自覺させる、而して遂に如實な空慧を啓發せしむると同時に、徹底して此相對的有限有邊際の妄執を一掃する所の大力用、是れが即空諦で有ると云ふ意である、其處で此の空諦を破情の德と名けてゐる。情とは智に對して、迷心に名けた術語である。

凡そ空に就いて、一般佛敎の中に於て、其說明の階級が淺深重々に爲つてゐる。然るに若し只諸法の現象が當体即無自性と云ふ耳の程度に止まるならば、則ち所謂權大乘の範圍を出で無い、其處で今實大乘の空は諸法無性の程度、より以上に、實相の範圍即ち性量無

邊際の義と、及び其破情の德を含蓄した空で、之を空諦と名けるのである事を諒解せねばならぬ。

然るに動もすれば、之れを速了して、極端なる否定の一邊に偏執し、猥はしく萬有を無視して、夫れが佛敎の空理だと獨斷を逞ふして、大乘佛敎を誤解する者が少からぬ、斯様な偏見を惡取空と名けて、之を誡めてある。甚しきに至つては、善惡の事實をも、因果業感の理法迄をも否定する者が居る、之を名けて因果撥無の斷見と云ふ、實に大邪見である、感染しては相成らぬ、愼む可き事である。

第二目　萬有の差別

萬有は無性即空なるが故に、各種の因緣即ち諸々の機會に隨つて、如何樣にも相當の變化を現ずる。無窮に變化して現象を呈出するけれとも、抑々無自性の變化で有るから、其現象は只假相に過ぎない。然るに機會は無量であるからして、其假相も亦隨つて無量の差別を呈出する。若し惡因緣に由て惡業を造らば苦報を受けねばならぬ。善業を造らば隨つて樂報を現ずる。如何に假相にもせよ、その業因の善惡に從つて苦樂昇沈の差別を呈出せざるを得ないのである。

傀儡師首に懸けたる人形箱
佛出さうと鬼を出さうと

萬象空なるが故に、因緣機會次第で結果の變化は無量無邊と爲つて來る。是亦萬有眞相の一事實で無くてはならぬ。其處で是を假諦と名ける。然に無は有を生せず、零は到底一個半個をも成立するに足らぬ。其處で如何に假相にもせよ、無量の假相を顯現する事は、即ちやがて、其因緣機會相應に顯現する所の無量の事象を、本來圓滿に具足しつゝある事の明証で無くてはならぬ。下世話にも「種の無いのにや手品は出來ぬ」と云ふ言が有つて、味ふべき事である。今假に極めて卑近な譬で之を說明すれば、恰も滋養分消化の有樣の如くで、先づ土壤や肥料を吸收して草木等の植物が生育する。又其野菜や果實等を食つた動物は、之を消化し成長する。而して又其魚鳥や獸肉を食つた人類は、之を消化して當に身体と爲すのみならず、健康なる能力を以て比較的高等の精神をさへも活動させる。然るに此人類も亦、生者必滅の大法則に支配されて、如何なる者も遂に變じて土壤とならねばならぬ。才子佳人骨皆白く、新墳古墓草同じく靑し。之は五岳先生七律中の

後聯で頗る意味深遠である。かくて土壌は又吸收されて草木と爲り、草木は又食物として消化され、動物とも人類とも爲り、精神とも道德とも爲る。然るに若し土壌乃至道德が本來互にその一々を圓滿に具足し無かつたならば、如何なる機會に遭遇するとも、零からは何も出ぬ如く、決して斯樣に消化も變化も爲し得られぬ其處で此變化無窮の事實に徵する時は即ち以て、其互に本來圓滿具足し融通しつゝ有る事を思はねばならぬ處で此の食物消化の事實は、吾人の制約せられた時間の前後を脫せざる範圍に於ける融通相で、勿論一部分の譬喩に過ぎない。然に絕對界は、時間空間を超越してゐるから、其萬有の融通相は啻に變化の潛在的可能性のみに止まらず、顯在的萬有の互具互有で無くてはならぬ。萬有一々皆かくの如く、何れの一法にも一切法を圓具して、然して差別の假相が宛然として存在する。是を萬有存在の眞相とし、其まゝ實相の原理存在の狀態とする。是に就て古人が簡便な喩を設け、旋火輪の如しと云はれて、火繩の一端にでも火をつけて、是を振廻す時に、宛ら火輪が旋つて居る樣に見える、而して其火輪はイリュージョン、即ち錯覺に由て現れて居るので有る、けれども決して全無ではない。廻るだけは確かに廻りつゝあるに相違無いから、一應は之を肯定せねばならぬ。が、其火輪の全部は繩の一端に於ける、一点の火相に外ならぬではないか。以て一切法が其まゝ一法に圓具されて、其一法が即ち絕對なる事を想像するに足る。

此くの如く、此假諦は萬有の存在狀態である故に、亦は之を立法の德と名ける。

飜つて更に注意すべきは、若し此の萬有が無自性變化の假相で有ると言ふ程度に止まるならば、夫れは所謂權大乘の範圍に屬して、未だ徹底せる假諦とは云はれぬ。今はより以上に萬有が互具互融して、一法每に一切法を全顯しつゝある事を意味すると知る可きである。

第三目　萬有の實相

萬有の諸法は宛然として、其差別相を現じつゝ本來互具し互融してゐる、其處で若し諸法を、確實なる固有性のもので有ると、執着に囚はれて居るのは、大なる過失である。假諦立法と云ふも勿論、同時に因緣に由つて現れたる假相に過ぎないと云ふ事、及び無自性空に即したる立法と云ふ事であるから、假諦は若し空諦を離れたならば意義をなさぬと思はねばならぬ。

然るに動もすれば、佛敎の眞理は空が極度で、佛陀の悟の境界と云ふも、其實は只空々寂々に過ぎないなどと獨斷を逞しふする人がある。抑々空は佛敎敎義の特長の一で、場合に由ては此の空を以て、三諦を代表する事さへも有るには相違なく、又夫れ丈空の一本槍で押通す宗旨もあるけれ共、然しなから其所謂空と云ふ意は、現象の當体その儘の無性即空と云ふ事と、及び囚はれたる萬有確實性の迷妄も否定する事とで有つて決して假諦立法の德までをも破壞する意では萬々ないのである。處が多少佛敎に指を染めた程の人でも、間々阿彌陀如來の淨土の莊嚴相をば否定して、三嚴も廿九種の莊嚴も其凡てが、ただ惑へる凡情に投じて、極めてけば〳〵しく諸の差別相を、縷說したるに過ぎないと、獨斷してゐる事實が往々にある。勿論七寶の樹林だ八功德水だと云ふ樣な事を、若し單純に考へて見れば、甚だ以て怪しからぬと思はれるのは、一應尤もでは有るけれども、然しながら、七寶莊嚴などゝ云ふ事こそ、吾人物質欲に充されつゝある者相應に、己むを得ず人間の現界象の名を應用して、假に此名を設けられたのであゝ、夫れだとて、極樂界中には何等の現象も存在せぬと言ふ譯はない。言ふ迄もなく佛陀証悟の境界なれば、空諦の全顯は當然の事で、而して同時に空諦に即した假諦立法の德は、必ず宛然として全顯しつゝあらねばならぬ。此意味を佛敎學の術語では、眞空妙有と云ふてゐる。妙とは不可思議の義で、不可思議なれば到底迷妄の認識では直觀し能はぬ所であるけれども、決して極端なる偏空が、佛敎の極理でも無く亦悟の境界でもあらう筈がない、其處で所謂眞實の空理に徹底せば、必ず同時に其處に、眞實の現象が宛然として、全顯するに相違ない事を、能く諒解すると共に、佛陀の境界は、人間界を借りて云はば、虛空にも地上にも、又地下の池水に至るまでも、宛然として、而して七寶や八功德水より以上の、所謂眞空妙有の三種莊嚴が現前して、少くとも二十九種の微妙なる差別相が、現出しつゝ有る事を　朧氣ながらも想察するに難からぬ次第である。而して淨土の莊嚴差別相は、いかばかり差別されても、勿論、佛陀証悟の境界で、即ち假諦立法の德の全顯相で有る故に、迷妄に捉はれた

る吾人の、相對的隔歴癖の認識相とは、遙に其事狀が異つて、所謂一即一切である、一々の莊嚴毎に、一切の莊嚴が相互に具足し、相互に融通して、絶對圓滿で無くてはならぬ、此意味を表示するために、廣略相入と云ふ術語が、設けられて有る、廣とは三嚴二十九種の廣開差別相である、略とは總略、要略の義で、即ち統一体と云ふ事を意味し、無量無數の莊嚴相が、互具し互融しつゝある絶對法を、名けて略と云ふのである相入とは入は渉入で、恰も光線と光線とは、無碍自在に相互渉入するが如く、廣と略とが無碍自在に渉入しつゝある事を意味する語である。

お話は圖らず一歩深入りし過ぎたが、要するに空假の二諦は相即で、萬有は本來即空なると共に即假である、空なるが故に假であり、假なるが故に空である、一切即一であるから時間も空間の一切も圓具して、萬有の一々が即ち無邊で、又即ち無量である。此を簡單に換言すれば即絶對と云ふ事になる。是が實相の正体で即ち原理の本質である。

然に絶對は認識の境ではないから、言語の及ぶ處ではない。是に由て此絶對を表現せんが爲めには、寧ろ

沈默を守る方が捷徑である。彼の有名なる維摩居士が文殊菩薩に對した答の杜口、默不二の方法が即ち之である。と云つて今は此壇上で生半可な默不二を氣取つて居ては全く無意味に終る。何とか言はねば説明にはならぬ。其處で由來かうした場合の必要によつて、之を强ひて名けて中道と云つてある。この意味を以て之を中諦と名けて、以て絶對の德を表すのである。

然に此中道と云ふに就いて、若しただ、空と假との何れの一邊にも、偏せないといふ程度の、單純な意味に止まるならば、夫れは勿論低級な中道で、今の實大乘の中道ではない。又若し此中道を、空と有との二諦より以外に、別に存在するものと速了せば、夫れは所謂權大乘の中道で、今の絶對の德とは云ひ得ない。

是に由て、今は萬有即空即假の本質、即不可言絶對の實相を以て、此中諦の義とするのである事を知らねばならぬ。

第三節　結　説

三諦即ち三德の存在狀態は非縱非横で、縱に次第して空假中と、順序を固守するのでは無い。亦横に區々別々の陳列態を有するのでも無い。萬有は即空即假即中で、三諦即一實相絶對の理である。今暫く吾人の認識範圍に引下して、此三即一の條理を思索するに、先つ空諦破情の德には、破有と破空と、及び雙破不二との三種の意義がある。次に假諦立法の德には、立有と立空と、及び雙立不二との三意義がある。而して最後に中諦絶對の德に、雙破不二と、雙立不二と、及び破立不二との三義が含蓄されてゐる。そこで空諦の破有と、假諦の立空と、及び中諦の雙破との三義を綜合せば、則ち唯一の空諦破情に外ならぬ。次に空諦の破空と、假諦の立有と、及び中諦の雙立とを綜合すれば、則ち假諦立法の一德に過ぎぬ。又空諦下の雙破不二と假諦下の雙立不二と、及び中諦下の破立不二とを綜合すれば、則ち中諦絶對の德に外ならぬ、然ば、三諦各々三義を含んで、即ち三々が九義となつて、而して此の九義が、互ひに交渉してゐるから、之を三諦で公約すれば、即空即假即中で、空は一空一切空、假は一假一切假と爲り、中は一中一切中と爲つて、三諦何れも一切で有るから、そこで空は絶對空、假は絶對假、中は勿論絶對中とならねばならぬ。斯樣に三諦三德を開くと雖、抑絶對は無二なる故に、畢竟唯一の絶對に統一される、此點が即ち所謂實相の一法印と云はるゝ所以で、是に由て亦は之を一實諦とも名ける。

此即空即假即中、三諦相即の一實諦と云ふ事に就て亦鏡の譬が設けられてある、先づ空諦の性量と破情の德は、鏡の全面に於ける明皎々たる光澤の如く、次に假諦の性具と立法の德は、鏡面に影現しつゝ有る萬像の如く、後に中諦の性体と絶對の德は、鏡質の完全体が即ち鏡其物なる如く、而して其全面の光澤に由て萬像を映現し、又映現しつゝある萬像に由て其全面の淸淨無垢を顯す事を、以て空假の二諦相且吾せず、其互に調和し相即するに譬へ、光澤と影像と相調和するに由て以て其鏡たり、又其鏡体に由て全面に光澤を放射し萬像を映現する事を、以て中諦と空假の二諦が矛盾せずして、還つて能く調和し相即するに譬ふ、而して復た其全面の光澤と、萬像の影現と、及び鏡質とが具備してこそ、鏡としての完全なるものであると云はるゝ點を、以て三諦即一の實相、一實諦に譬へる、頗る上品で且つ緻密な巧喩で、以て三諦一諦の理趣を考察するに適切である。然るに實相や實諦と云ふ言は、權大乘以下にも共用されて、其名は今の專有では無い、依て若し

此名に捉はれて、所謂實相だ實諦だと云はるゝ所の、固定的一法が存在するのだと迷執するならば、所謂佛魔一髪で全く佛敎の正理を脫線して了つた者である。そこで此の固定的一法の迷執を豫戒して、之を名けて亦は無諦とも言つてある、夫れ丈、捉はれぬ樣に眼醒めてこそ、即空乃至即中の一實相義を得るに近かけれと謂ふへきであらう。

然に、若し此原理を萬有の事象以外に置かず、萬有の一々に即して、之を三諦即一の實相だと云ふのが、即ち今の原理論であつて、其處で今原理と云つて、理の字を用ひても、其所謂理体は、事象以外の別法だと云ふのでは無い。抑々事と理とは、本來一体で、別法があるのではない。然らば何が故に事と理との名辭を別つかとなれば、他なし、其平等普遍性を意味して之を理と名け、其萬有の差別相を意味して、之を名けて事と云つた迄で、萬有は相對差別の儘が絶對平等であるから、差別即平等で事が即理で無くてはならぬ。實相の原理は絶對の儘に、萬有差別の相を現じつゝあるからには、平等即差別で有る故に其處で理が即事で無くてはならぬ譯で有る。

納豆も味噌も豆腐も湯波醬油
素麵にまで豆なはたらき

之れは最近に、滿州に於ける同信の一道友から、他力回向の信仰生活の感謝に添へて、送り來つた狂歌ではあるが、移し來つて以て、諸法實相の妙味咀嚼の栞とするも妙であらう。而して諸法實相が所謂今の原理なるものである。

第三段　餘　講

第一節　修性の二德

所謂原理を性德と名ける。言ふ意は法爾本來理性としての德なるからである。而して此の性德を体驗し証語せんが爲に、幾多の善行を實踐する事を修德と名ける。幾多の修德の中、之を大別すれば、自行と化他の二德で、更に之を換言せば、智慧と慈悲との二である然るに智慧は、戒律と及び禪定との準備を俟つ、其處で之を戒定慧の三學と云ふ。戒律は以て緊張し、禪定は以て寂靜たる可く爰に明智を啓發して、以て如實に性德を觀照するものとする。故に此幾多の修德中で、其中心たる者は、智慧である事は想像に除あるであらう斯の如く修性の二德は一應之を對立的に差別するけれども、其實は二德本來別体有るものでは無い。修性は不二である。之を實大乘の本領とする。抑々萬有は即一實体であるから、今修德も亦性德の外なく、性德は本來修德の一切を具へて居らねばならぬ、是に由て一々の修德は此本具の性德を体現するに過ぎないのである。而してその中心の智慧が、能く其性德の原理を觀照し證悟して、理智一体の妙境に達する。例へば、火光は以て能く火体其物を照すと雖、其火光は火体の外無く、火光と火体とは二而不二で、而も能く照す物と照さるゝ物と爲つて居る樣な關係狀態である。

既に本來修性二德は二而不二即一である、其中に於て比較的に、其の性德を理想として、進取せしむる佛敎が、所謂聖道自力の法門で、其の彌陀佛の修德を信仰の對象として、之を透して性德即ち今の實相の原理を証悟する宗旨が、淨土他力の往生法である。

然に動もすれば、他力往生の宗旨は、其原理が別格で、一般實大乘の法門と、遙に程度が低いものゝ樣に誤解する人が居る。甚だ以て遺憾である。勿體ない事と謂はねばならぬ。玆に序ながら今日の勝緣に乘じて他力往生の彌陀法は最尊高な實大乘で有る事の一端を説明する。抑阿彌陀の三字は無上甚深の妙義を含蓄して、而して今の三諦を象徴してゐる。先づ阿の音には本不生と言ふ深義が有つて即空だ、次に彌は即假で、後に陀は法界圓滿の深義で即中諦絶對である、此くの如く三諦即一の實相修顯の無上法で、逆惡を漏さぬ救濟の特徴も、直ちに彌陀同体の妙果を證得せしむる勝德も、其原則は、全く爰に存して、即ち彌陀佛修德の妙用として、徹底的に性德の原理が、活動しつゝ有るのが、他力往生の彌陀法である事を御紹介しておきたい。

第二節　入理の四門

此原理に証入するためには、その門戸が四方面に開かれてある。抑々相手は等しく圓熟の人であるけれども、然しながら個性は各々別であるから、この証入の門戸は必ずしも一樣ではない。四方面とは、一に有門二に空門、三に亦有亦空有、四に非有非空門である。一に有門とは、假即諦ち立法肯定的の側面である。二に空門とは、空諦即破情で否定的の側面である。三に亦有亦空門とは、中諦即絶對の上の、超越を肯定するものである。

四に非有非空門とは、即中諦に於ける肯定を超越するものである。

斯の如く、入理の四門は各別なれども、能く如法に修行して、大涅槃の彼岸に達すれば、則ち同一無上菩提の大覺で、誠に尊い事である。

第三節　各宗の特徴

扨、入理の四門を現存の實大乘各宗の特徴に配合せば、先づ有門は眞宗、淨土宗各派、及び時宗であつて此三宗が即ち所謂淨土門佛敎である。

次に空門は禪宗の各派である。

次に亦有亦空門は、華嚴宗及び眞言宗の各派である

最後に非有非空門は、天台宗各派、日蓮宗各派、及び融通念佛宗である。

以上禪宗等の各宗が即ち所謂聖道門佛敎である。

斯の如く、各宗其門戸を異にすと雖、基く所の原理は等しく、唯實相の一法印に外ならぬのである。而して此一法印の大旆の下に各宗蘭菊の美を競ひ、自利利他圓滿の大理想を以て、佛果に對向すると共に、現實界を對觀して、皇室國家に貢獻する事、爰に一千數百年、幾多の法益を施し來つたのが、我國思想界の史實である。其處で現在以後に於ても、冀はくは此の如く高尙なる原理に基くところの佛敎々義を確く信じて、以て思想の根底に備へ、如法に實踐躬行の道を邁進して、益々此正法を興隆すると倶に、愈々實社會に自利利他共存共榮の美德を發揮する事が、寔に今日の諸君と共に、雙肩に荷つた所の光榮で有ると思ふ。

（終り）

自然科學と精神修養

金澤醫科大學教授醫學博士　須藤憲三先生述

自然科學をやる人々、物理、化學、數學をやる人々にはそのものに執はれる事が多くして精神科學に關すると云ふ樣な事は幾分なり閑却されて居る傾きがありはしないか、所がさうでないと云ふ考へを私は持つて居るのであります。無論私は別に人格がどうーと云ふ事は無論ございませんけれども、而しながら、さう云ふ風な考へを持つて居る日本國民の一員であります、どうしても此自然科學を立派に仕上げて行くには立派な精神と云ふものを養つて其上に築き上げた所の自然科學と云ふものでなければ本當の發達を圖る事は、即ち世界の競爭場裡に立つて優勝者となる事は出來ないのであります、其意味に於きまして茲に演題を「自然科學と精神修養」と云ふ事にして置きたいと思ひます、私が此處で改めて申すまでもなく明治維新以來我が國に於ける自然科學は長足の進歩をなし今日に於きましては諸君も十分御承知の通り世界の競爭場裡に立つ事が出來る樣になつたのであります、是は申す迄もなく明治の初年に先帝陛下が五ヶ條の御誓文を御出しになつて「廣く智識を世界に求める」と仰せられてありまする其仰せに隨つて日本國民が共同努力した外にならむと思ふのであります、其自然の發達の經路はどうして今日の狀態になつたかと申すと、日本に在來自然科學と云ふものは無論あつたのでございますけれども、而し深く今から考へて見れば頗る幼稚なものであります日本に於ける所の科學は例せば近く金澤の藩に數學の大家が居りました事は私は知つて居ります、又地理、測量と云ふ事に對しても發達した所があつて、今日に於ける所矢張り其土地の測量すべき地勢を見て計算して居る、而しながら夫はほんの一極部であります、即ち其土地に於ける天才的の人であつた、一般日本國民としての智識は至つて低くかつたのであります、所が歐羅巴の文物が日本に這入つて來る、其這入つて來た

が爲に今日の進歩を見た、先ず一番初めに和蘭から這入つて來たのであります、和蘭の人に聞いて見ますると、さつぱり知らない樣に云つて居りますが實は蘭學ですと其蘭學は即ち醫學が始めに這入つて來たのであります、何處の國も同じでありますが宗教とか醫學と云ふものが這入つて來開の地を開發し來つたもので和蘭の船が日本に這入りまして殊に長崎の出島で其貿易をやつた其時も醫學を日本に持つて來て威力を示さうとして居たもので日本に取つて珍らしい所の學問をする事が出來ないから蘭學が盛んになつて居つたけれども其後幾分か佛蘭西の方の學問も傾聽される事になつて殊に陸軍の如きは佛蘭西の式を取つたと云ふ事であります、所が一八六七年明治九年から四年の間佛蘭西と獨逸が戰爭となり其の戰爭の結果後に即ち獨逸が優勝したのでありまして夫迄壓迫を受けた所の後の獨逸帝國が頭を持ち上げて來たのであります。世界の人が良く見て居つてどうも獨逸の遣り方が非常に良いからして獨逸の學問と云ふものを日本に取り入れると云ふ事が日本の爲に最も良いと云ふ考へになつたのであります、其結果からして元蘭學で醫學をやつて居つたのが獨逸語を用ふる樣になり獨逸の學者を聘する事になつたのであります、一一申しませんが獨逸人を招聘致しまして色んな醫學を傳授して貰つたのであります、其當時の醫學と云ふものは今から申しますると實に貧弱なものであります、先輩からの言に依て知つて居りますが一人の人がたとへばベルツと云ふ人が凍傷にヒビにリスリンにアルコールに水を交せた所のアルコール液がある夫を付けて居たと云ふやうなもので、夫から又アンフエルと云ふ獨逸の大學の教授であるあの人一人で內科もやり外科も何かも一人で數科目を擔當して一人で大學の講義をやつて居つたさうであります、夫から後に至つて生理學の教授に二人が居る內科の方には二人乃至三人婦人科の方にも一人乃至二人と云ふ風にやつて擔當して講義をして居られたと云ふ事であります、日本の醫學は夫でも非常な權威でありまして日本の有爲な青年が東京に集つてその傳授を受けた譯であります、さう云ふ事をして居る間に一九一四年即ち大正三年……大正三年でありますが世界の大戰が始まりまして獨逸が彼の悲慘なる狀態の敗北を致したのであります、が戰爭では……實は負けなかつたの

であるけれども而しながら政治上の意味から云ふては非常な失策を致したのであります殆んど詰り極端に不況に沈んでしまつたのであります、諸君の御承知の通りさう云ふ風な關係からして又世界の學界と云ふものが幾分なり獨逸を離れまして……幾分所じやない、さうして矢張り英、米、の方の學界が向く樣になり近く東京に開かれる所の極東熱帶醫學會を三週間程開きますが其會に於ける所の用語等も總て英語じやなければいけないと云ふ事になつた是は日本の醫學界のために喜ふべき事であるや否や頗る考へなければならない私は夫に出席する事だけは申込んで置きましたが演題の方は未だ申込みません、此の數日中に何とか決する心算りで、詰り用語が英語でなければならない、今の用語は獨逸語を以て、留學も獨逸に留學を命せられて居るのであります、さう云ふ樣な關係で何處の萬國學界でも私も數回萬國醫學大會に倫敦、巴里、獨逸等數回列しましたが何の學界に於ても英語のみに限つて參加する事は未だ嘗て經驗した事がないのであります、英佛獨は詰り許してあつたのであります、今度は英語でなければと限つて居る而も日本語が這入つて居らんのであります、自國に於て開く所の學會に於て其自國語を除かれたのは今度が始めてじやないかと思ふのであります、斯う云ふやうなことは今此處に於ての皆樣には關係ないことゝ思ひます、而しながら良く考へて置かなければならないと思ひます、話は大變餘談のやうでありますが私は用語は何んであるかと云ふ事を幹部に電報を出しまして問ひ合せました返事は兩三日前に、向ふの答へが用語は外國語と云つて來た更に歐語で即ち支那語でやつて良いのである、と云つて來た私は支那語はちつとも出來ませんから困りますそれでもまあ大分其處は開けたなと思つて居ります、私が大學の名を以て是は向ふに打電したのであります兎に角是は人間の考へと云ふもはのは……戰爭で負けたと云ふと斯ふ云ふ風な悲慘な狀態になる事を痛感するのであります、我々の考へでは日本の國語が隆盛になる事を喜び最も望ましいが殊に人種、言葉を異にして居る所の各國が共同一致して同じ方針で進むのは頗る良い事であるけれども頗る困難であると云ふ事は即ち我々日本國民としてはどう云ふ具合に考へるかと云ふと日本國の隆盛と云ふ事に向つて外の人を傷付けずに

は如何にしたならば良いかと云ふ事の考へを以て進まなければならない、獨逸語でやると云ふ事は良いと云ふ譯でない英語、佛語決して良いと云ふ譯でない要は日本國を利する所のものであるならば英語であらうと獨逸語、支那語、佛語であらうと何等問ふ所でないのであります、是が最も我々として注意すべき事であります、獨逸が良ければ獨逸を取り佛蘭西が良ければ佛蘭西を取り英吉利が良ければ英吉利を取り米國が良ければ米國を取り支那が良ければ支那を取る、是が日本人の最も注意すべき所であると思ふ、實際是迄のやり來たりを見まするとは是に對し日本國民の精神の訓練と申しますか即ち明治維新の科學と云ふものは世界の驚歎した所であります、あゝ云ふ改革は仲々我々の國では容易に行はれない、短時間の間に大改革を行て數十年間に光輝ある日本帝國を造つたと云ふ事は實に驚かさるを得ない、どう云ふ譯であるかと云ふと是は要するに日本人が歐米各國の中庸を攝取、吸收同化し得ると云ふ即ち優秀なる考へを持て居ると云ふ所の問題であります、歐米人は秘かに驚き驚歎して居るのであります、人類愛と云ふ事を申しましても、どつちかと云ふと大きい聲で申せませんが我々の國が非常に隆盛になると云ふ事は一方では非常に是を苦痛に思つて居る國があるかも知れませんのでありますから日本の國民の考へがさう云ふ方面に年々進歩された分には隨分困る人があるかも知れませんと思ふのであります何處へ行ても日本と云ふ國は始の内は申しません、私共が段々親しくなつて行くと實にお前の國は不思議な國だ……と云ふ英吉利は眞似をする事が嫌いな國であります

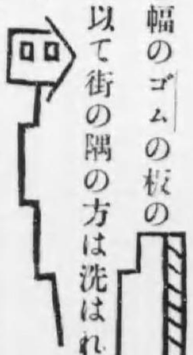
けれど何處のデパートメント東京の三越みたいなものが何處にでもありますが皆な何處の國の語でもいけるやうにして居るのであります、是れは矢張り國民の訓練の仕方に依るものであります、貴下方が簡單に英語を排斥するものでない佛蘭西語を排斥するものでない日本の何處の國でも人に物を賣るに佛蘭西のお客さんが來た時には佛蘭西語で應對する英吉利のお客さん、米國のお客さんが來た時は夫々其國の語で應對する、さう云ふ事が出來るならば困難であるが頗る是は良い事の一つに相異ないのであります、其人に忌な感じを與へないと云ふ事は商業政策から云つても他國の言葉を知ると云ふ事は非常に良い事に違ひないのであります、我々が方々の外國語を話しするのを奴隷になるために外國語を修める。さう云ふ風な詰り國に依て非常に考へが違ふ、段々話が横道へ這入りますが座談的に御話致しますが夫で例へば獨逸であると云ふと私が行て見ましたから申しますが、主に若い婦人を使ふ小學校で非常に語學を奬勵して居る、店の店主が夫に一つの補助を與へまして英語、佛語、主に英佛語を稽古する一つの機關を經て相當に話が出來る、客の待遇が相當に行くと云ふと婦人の給料を上げてやる、さう云ふ風な一つの成算を作つて貰て夫が店主が授業料を出すのであります、後は僅かなものでありまして賣子が負擔する一つの授業料は五十錢で後の部分は是を店主が負擔するさう云ふ風に語學を授けてやる、其人の給料を上げてやる、夫は云ふ迄もないが總て賣上げの利得から出す事は云ふ迄もない、全般に夫を擴げてさうして外の國と競爭しやうと云ふのであります、歐米に於ては優良製品の多産多量製産であります、良い品物を多量に製産して、さうして夫を各國に出さうとするのであります、其優良製品を短時間に多量に製産するにはどうしても今の自然科學と云ふものを應用しなくてはどうもいけない自然科學の研究と云ふ事に多大の努力をして居るのであります、さう云ふやうな具合にしてさうして世界と競爭しやうと試みたのであります、即ち今日の戰爭と云ふものは諸君も御承知の通り何んのためにするかと云ふと元の封建時代の戰爭と趣きを異にして市場獲得であります、街に於ける商品を自分で一手で受けて市場を得んがための戰爭で夫れが重要な点であると承知して居るのであり、歴史家が敎へて居るやうであります、最近はさう云ふ風に考へて居る、色んな意味はあらうが大体の意味は市場を獲得する意味であります、市場と云ふ事は政治家のみが一人立つて居つて製産品が劣惡でさうして工場の方の局面に當る所の個人々々の例へば今の賣子一人にしても其賣子が下手であれば富强する事は不可能となるのであります、一人位の唯だ申しますが一人位と云ふ事は例へば昔から云つて居る所の大海の一滴、九牛の一毛と申しますけれ共大海の一滴の集まりが、九牛の一毛の集まりが、九牛、百毛にも成り得るのであります、若し一滴の水がなかつたならば大海を作る事が出來ない、水は酸素から自由に構成する事が出來ます、其の一滴の

水がなかつたなら大海を作る事が出來ないのであります、各其の物構成と云ふものは極めて錯雜なものである其意味に於て考へると一毛である、毛の一つを十分に作る事が出來る即ち體があつてこそ一本の毛百本の毛が出來るのであります、だから一人であるからよいと云ふ事は到底贊成する事は出來ないのであります、一人が堅實であると云ふ事が一人、一人が堅實であると云ふ事が百萬億萬の堅實であると云ふ事になるのであります我々の體で云ふならば私共の体には小さな顯微鏡に見える所の單細胞、其細胞の集團である、樣々に怒つたり笑つたり、非常に變な事を云ふたり樣々の事をやる其細胞の集團が約何程あると云ふと約三兆とか七兆とか云つて居りますが夫程の細胞から成て居るのであります、其細胞が例へば癌腫の細胞、諸君の御承知の通り恐れて居る所の癌腫、胃癌と云ふ癌であります癌腫の發生と云ふ事に付ては十分に學術では鮮明になつて居りません、此處に詳しく申しませんが癌が增殖致しまして一年を經過しなくても數ヶ月乃至一年にして其人間を殪す事は疑ひないのであります、小さな芥子粒から大きな芥子の草が出來、花が咲く、其一つと云ふものが最も肝心な胃癌であります、今日我々醫者が研究して居る所の生理學と云ふものは生活の原素を根據としたものであります、一般に行はれて居るのは細胞狀態を研究するのであります、例へば水の中にアミーバと云ふ細胞があります、アミーバの一つの小さい細胞です、諸君に判りよく申しまするならば今頃ある庭に咲いて居る所の紫露草の中に小さい糸が生えて居る所の紫露草がありませう、あの紫露草の一つの細胞が(圖解)こう云ふ具合に原形質があつて極く整然として一糸亂れざる所の構造を持て居るのであります、如何にして其細胞が生きるか、如何にして生長するか蕃殖するかと云ふ事が判つたならば引いて人間と云ふものが如何にして生長し發達し得ると云ふ事が判るのであります、其小さい細胞の生理的機能と云ふものが今日遺憾ながら未だ明瞭に判らないのであります、さう云ふ具合でありますから一つと云ふ事に對し輕視すると云ふ事は出來ないのであります、紫露草の一つの草と云ふものは輕視する事は許されない事であります、さう云ふ風な具合であるから話は元に返つて詰り獨逸邊りでやつて居る所のやうな遺り方は微に入り細に入り良く

さう云ふ事を考へてさうして一つ一つの個人を敎育しなければならない、製造しなければ世界の競爭場裡に立つ事が出來ないと云ふ考へであります、さうすると獨逸の事を賞揚する事になります、私は獨逸人ではありません、日本に都合が良ければ良いのであります、夫でさう云ふやうな具合にして自然科學は御知承の通り普、佛戰爭の後に非常な勢ひを以てビスマルクに反對したウェルフヘルムフンベルトと云ふ自然科學者を、御承知でありませうがウェルヘルムフンベルトと云ふ人は即ち文部大臣であります、文部大臣の考へが國の政策が矢張り自然科學と云ふ事に努め、自然科學に依て進まなければ本當の勢力を得る事が出來ないと云ふ事であります、何故ならば獨逸と云ふ國は不毛の土地であると云ふ譯でもありませんけれども砂地ださうで又私等が日本に居て端西と云ふ國は非常によい國であると云ふ憧れを以て參りましたが行つて見ると非常に裏切られた点がある、日本と云ふ國は非常によい國である家は良い、人間は色が白いとか黄ろいとかそんな事は別であつて向ふの建物は鐵筋コンクリートの家に這入るし道はアスファルトである獨逸と云ふ國は地理で御承知の通り氷河の土地である今でも伯林のヒンスゲルと云ふ所があるが夫が氷河の終点である、其氷河が數萬年の間に伯林に襲ふて來て端西、威諾と花剛岩が獨逸全部をおうて居るのであります、即ち獨逸の地と云ふものは砂の層である、砂の層は伯林の調査した結果に依りまするとと伯林の砂の深さが平均十間堀つたつて水なんぞ出やしない、路の修繕には極く良い堀じくりさへすれば洗練された氷河が一千萬年とかで運んで來た所の氷河の砂であるから實に綺麗なものである其上に建てる處の都、西洋の諺に砂上樓閣砂の上に建てるべき家は危ぶなしと云ふが夫は間違ひだ、偶には間違ひがあるが砂の上に建てる事は非常によい、砂がさ〳〵ではいけませんが少しも動きの取れないものであります、人間にも色々長短がある、其人の長を取り短を捨てると云ふ事は我々の良く敎はる事であります、決して人間は萬能ではない、我々は偏見であるかも知れませんがさう云ふ風に考へて居るのであります砂上樓閣が惡いとは私は思つて居らない所の一員であります自然科學に返つて其自然科學の研究と云ふ事はどうであるかと云ふと卑近な例を申しまするとと即ち人

造肥料が非常に發達して來た大分人糞肥料と云ふやうなものを肥料にして來たけれども運搬が非常に不便至難の關係樣々の關係から段々すたる關係から大都會には糞便に非常に困つて居ると云ふ事であります日本はさう云ふ風でありますけれども向ふでは不毛の土地であるから優良なる所の農產物を澤山に得たいと云ふ考へから即ち人造肥料が出來ました譯で矢張り是は自然科學の賜と思ふのであります、さう云ふ風な具合にして詰り其不毛の土地から相當な收獲を得て所謂方針學業すると云ふ事に依て國の繁榮を圖つた次第であります、是は世界の人の良く云ふて居る所でありまして今日の日本にも起つて來て段々各國に擴まりまして我が國でも段々實現されるやうになつたのであります、事柄は肥料一つの事でありますけれども人間と云ふものは猿が人間になつたとか…私は知りませんけれども兎に角變遷を經て立派に人間になつたのであります例へば獨逸が世界の優勝者にならむとして居つた時、即ち一九一四年大正三年にカイゼルウイルヘルム第二世、即ち今和蘭に蟄居して居る所の皇帝が邪念を起したのであります、バクダット鉄道を敷きました外の方に頭を出

さうとした野心が祟りをなしてさうして到々獨逸の方では佛蘭西を一擊の下に陷れて自分の思ふ通り自分の意を滿たさうと云ふのでやつたのであります私はあの時分に向ふに居つて見て居つたのでありますさう云ふやうな事をやつて居つたが仲々天はさう云ふ事に組しないで到々一週間の後に失敗に終りを告げたのであります日本は獨逸に當時味方であると一般は深く信じて居つたのであります、私は醫者ですからそんなことはない面白いやうな懼いやうな思ひで萬感交々でありました目の當りさう云ふ事を見て居る次第であります、獨逸人の大多數は一週間に佛蘭西を陷落し汽車等には巴里の方へ否な巴里と書いてあります、汽車に落書をして居る箱の全体に書いてある、其意氣たるや昇天の勢であります、私は停車場の側ダーリーと云ふ所に住んで居つた、其處で兵士等も非常な勢ひを以て行つた所があの年露西亞が東の方で加勢したために西の方に向つた所の兵即ち白耳義の方に向つた所の兵を裂いて先づ東の方に向けたと云ふ事が大失態であります、夫れがために途に喰ひ止める事になつた、それが禍ひして獨逸があんな風になつたのであります、因緣因果と申しませうか獨逸が天罰を受けた次第でありますさう云ふやうな狀態になりましたが而し夫は政治上の問題であります夫は別にしまして獨逸の都市即ち首都伯林の街の組立及家庭の制度學校の制度、恩給制度は良く御承知でありませう我々の友人でさう云ふ風な事を良く書いて居りまする吉田君や保科君は學校に一所に居つた關係上さう云ふ風な方面も私は少し知つて居ります、總てさう云ふ風に注意して獨逸の國民が如何に生活し世界の落伍者とならないやうに努めた結果、即ちナポレオン時代には長足の進歩をなし、世界一の綺麗な都會は伯林、其の獨逸が戰爭に敗けたものですから獨逸と云ふと餘り聞えが惡い、其處でどう云ふ風な具合にしたかと云ふと大要を諸君に御話しやう、道路の下に於て大体の自然科學の應用に付て御話しやう今の話の關係上無益じやないと思ひます、伯林のローマ式の道路の作り方は花崗岩の方五寸、五寸立方賽目形の花崗岩のがたゞ〳〵のものを砂の中へ合せ込んで水をざぶ〳〵流しさへすれば、ぎつしり固まつてしまふ詰り此都會が中心で金澤を中心とするならば金澤から小松迄一本道の眞直ぐな道を作る、街の中へ這入つて見るとローマ式時代の極く古い式のやり方、それでは今では滿足しない方々どん〳〵アスファルトと云ふ事になつて夫れを使ふ事になつて居る、なんで花崗岩を咀止して居るかと云ふと、見本に東京市内に運轉されて居りますが長さが二米突即ち直經が一尺か一尺四五寸の白のブラッシが付いて居て夫れが自動車の運轉に隨つて道路の上をこすり後を水で以て洗ふ街の隅の方は二尺程の幅のゴムの板の斯ふ云ふ風なゴムの板で以て街の隅の方は洗はれて居ります、夫からして街の



此の處がアスファルトで人道でありまして是が矢張りローマ式に出來て居るそれが皆な一寸四方位の

こんなやうなものを寄木細工のやうに列べまして固める此の下に瓦斯管や色々のものを敷設してありますから中の修繕をするやうに伯林ではしてあります、こんなやうな具合で人道車道の境に樹が植えてあります、交通機關は申す迄もなく日本でも交通機關が非常に發達しまして汽車にしても電車にしても仲々宜しくなつた和蘭であるとか

墺太利のやうな所より非常に良くなつた一番綺麗なのは獨逸でありまして近頃は日本の奇麗なのも獨逸に習つたのであります、鐵道は場所に依て高架鐵道又は地下鐵道此の地下鐵道は最も金が掛かる、夫れには亞米利加の紐育でありまして、上段の地下鐵道、下の地下鐵道、上段は少く下の方は停車驛を澤山に慥へ街の眞中は街全体が鐵橋である、鐵橋の下を電車が走る、さう云ふやうな具合にして非常に交通の便利を圖つたのであります、後は自動車、馬車と云ふやうなものは勿論の事であります、こいつはどうも良い所は取るが惡い所は取らない、是は何故惡いかと云ふと眞側の街は實にかなわん全部鐵であるから鐵の橋の眞中から電車が通る其處をどん〳〵走る八ヶ間敷て仕方がない他の國は眞似等をしない、亞米利加は平氣なものでありますから惡ければ後から打ち壞してしまふと云ふやうな具合であつて是だけは日本は眞似をしなかつた所が外國の者は日本人はどうも非常に利口だと云ふ、又下水で最も有名なのは佛蘭西の巴里の下水でありまして下水の中を一つ市長の承諾を得ますと中を見せる、下水があつて下水の眞中の所に船舶の航路が出來て居て船が通ふことが出來る從つて電灯などの裝置も充分出來て居る、中が皆んな見えるやうになつて居る、臭いだらうと思ひますけれども水量が多いから是が臭いかと思ふて居つたが決してさうでありません、それを海へ流し、そいつを別な所へ持て行き其處で乾かして作物を作る糞便を大仕掛けに是を淨化して行く是は流れ出す所の水が淨化された所の水でありまして夫れは汚くない飲んで居るやうな有樣であります、我々の所でもおかしいが大概の所は吸込みで下水の水がうつかりすると肥料が這入つて居ると云ふやうな事を私は多數に實驗して居ります夫れから又電燈丈けの使ひは日本は非常に澤山ありまして誠に結構な事であります水力が多いから水力を完全に使用されて居る、眞實に電燈が付いて居るだけ位のもので未だ電燈の使用が幼稚である我々が誰でも夜遲くなりますと十時には門を締める學校等も締めてしまふ、家の中には付けてない、付けつ放しにすると云ふことはない是は規則正しくやつて居ります、日本の普通家庭は大概付けて居ります、是は豊かであるから付けて置いても差支へないと云ふ事はない、是は注意が足らんから、伯林の屋上制限が決つて居りまして夫れに地下室がありまして六階、亞米利加は五十階だなどとありますが夫れはどちらが良いか問題であるが其家に這入つた所にスイッチがあります、捻ると五階迄全部明りが付く自分の家の点火時間は皆な二分間付け放して其二分間が立てば消える、必ず二分間だけ付けて置く、例へば鍵と云ふても日本は此の學校の鍵等は其處の鍵も此處の鍵も皆な同じでありますが西洋では決して二つ合はない一つ一つに鍵が違ふ何處へ持て居つても開かない、だから同じ建物の中でも三階に住んで居る人の家へ他の人が間違へて開けやうとしてもがいて居ると中からお神さんが出て來て間違つて居るだらうと云はれて始めて氣が付いて自分の室に這入つたと云ふ事があります、さう云ふやうな具合に小さい事であるけれども整頓の具合が此一事を以て良く御判りになることゝ思ひます、それから又家の中を暖める事が日本人は餘り暖房の完全ではありません、袷で以て嚴寒を凌ぐと云ふ有樣で日本の人間に取つては柔弱になる而し別問題と致しまして冬分の氣温が大低攝氏の二十六度で金澤は大低六度か二度違ふ十度下ると云ふ事は殆んどないかと思ひます、下つて零下一度位です、さう云ふ所で冬嚴寒の際に袷で日本の着物ならシャツのフランネルに單物と合せて着る位で以て生きることが出來る又航海の時に離れ島の所になると燈臺守を置くと云ふ事は非常に良い事でありまして是に對しては少なからざる所の經費と云ふものがあるのでありますがそれが太陽が出て來ると獨り消ゑるそれであるからアセチリンカーバイトあれで以てやつて居ります、さう云ふやうな具合に成るべく人手を少くして經費を節する、何んの力に依るかと思ふと自然科學の力に依るものと思ふのであります、翻つて日本の狀態を見たならばどうであるか日本も今申した通りに進歩し世界の人が驚嘆して居るから此上に望むと云ふ事は餘り過ぎると云ふことを考へても宜しいが人間には相當な慾望と云ふものを十分にやると云ふ事は進歩と云ふ事になるから漸次實行して行きたい、チエツク、スロバツキヤのコラバーと云ふ所に有名な醫者が居て私にお前にチブス患者を見せると云つた、私等が夫れを聞いて實に不思議な感じがする、日本ではチブス患者はなんぼもある、向ふではチブス患者が二人居ると云ふので其人が先に立つて案内してそれを

見せて得意と云ふ事ではありませんけれども異樣に感ぜられるのであります、どうも面白い事であると今に尙忘れずに居るのであります、日本にはチブス等は澤山ある、だけれども日本國の全体としては矢張り決して喜ふべき狀態でないと思ふのであります、健康を害しないやうにするには矢張り此の今の自然科學と云ふことの智識を十分に遺憾なく應用する事に依て更に其目的を達することが出來ると思ふのであります、日本では如何してもさう云ふやうな方面が閑却されて居る諸君の始終使つて居る所に付てもう少し申しますると石炭の事でありますが是は餘程不思議な事であります石炭は目方で買ふじやない値打を買ふのであります、石炭は何万斤と云つて目方で買ふが私の最近の經驗を申しますと、數百斤の石炭を消費して居る者が皆な斤で買ふが其實効は値打にあるのでありまして、今日實効の点に至つてどうであるかと云ふとお互ひの背中に汗をしなければならない、石炭は熱量を出す、どれだけの熱量を出すか極く良い石炭が八カロリー一グラムに二分六厘の石炭を炎やすと云ふと使用の八分だけ分けなければならない、それを炭だけ分けたならば半分しか値打かない、其處で私はさう云ふ風な專間であつたから自分もやりました即ち講議も無論やる、夫れを調べて見た所が四割六分灰があつた……石炭の運搬に其四割六分の運賃を掛けて非常に苦しんで居る隨分面白いことのやうに考へる而しながら夫れは段々改善をしなければならむのであるけれども大學にして若しさう云ふことであるならば大學は敎へる所でないのである、實行する所である、屁理窟を述べて居る所でない、幸ひにして澤山買ひませんのでしたから宜しうございますけれども何百斤も買はれた日にや、さう云ふ性質がいけないさう云ふ事を好まんものであります、九牛の一毛であるからそれが整理して身代の整理財政の整理、共存共榮と云ふ事が出來ると考へるのであります、例へばさう云ふ風に瓦斯の中に空氣が這入つて居る、一立方尺熱量が何程であるかと云ふ考へで買ふ電壓を計つて見ると云ふと普通の所百ボルトか八十ボルトしか來ない、電壓を計られた人もあります、それを知つて注意すると、夫れで惡ければ使はないで呉れさう云ふ風な事を云ふそんな事を云ふ方が間違つて居る、それで惡ければ使はんで呉れ、さう云ふ風な意嚮

であります、さうしてどうかと云ふと一方には金の利子の勘定をやる時に一プロセント百分の一間違つたならば必ず目を圓くする、何を標準にするかと云ふと外面の量を標準にして居るのであります、さう云ふ事を云つて居る人がそんな經驗がないためであります、全般の人がさう云ふ風な氣分にならなければ注意して呉れた、さうかと云ふ風にならないのであります、針金の抵抗と云ふ事を考へて是はどれだけのボルトが通るに必要であるか、澤山に引くと云ふことは電壓が下り危險であり漏電と云ふこともあります、動力のモータの作用が不完全になる、今現在新聞で御承知でありませうが川崎造船所あそこと大倉との間に一つの裁判事件が起つて居る何の問題であるかと云ふと川崎造船所が大倉組から鐵を買入れた其價格が可なり大きなものであります、戰爭が終り不景氣に伴ひ買手がなくなつたので川崎では鐵が惡いと云ふのである。御承知の如く實際に現實に行はれて居る所の社會の人の繫爭の一部分を御照會すると裁判官は法律に依て善惡の斷定を下す者で裁判官と云ふものは法律を適用する者であつて自然科學の力を借らなければ鐵が惡いと云ふ事は、何處を境で鐵の良し惡しと云ふ標準と云ふものを、極めてない、所で或學者に向つて分析を命じた、それが判れば何れかが一千萬圓損するのであります、さうなると云ふと皆んな考へます、一千萬圓取られてしまつたら可なり大きな會社でもぐらつく、分析した所が鐵が惡いと云ふやうな具合になつた惡いと云はれては困るから更に抗義を申込んで農務省の工學士に更に分析の方法を研究してもらひ分析の結果を出した再三辯論を繼續したが今に落着しないさう云ふ事は詰り學問かはつきりして居らない、學問的に行つて居らんために、さう云ふ風になつたと思ひます、或人間が電氣を盜用した物か物でないかと云ふ事が問題になつた御承知でない方もありませうが電氣の盜用であります　だまつて引いて問題にする夫れでその鑑定人は面白いことだから申しますが東京の理科大學の敎授で田中館さんが是は物か物でないかと云ふ事を鑑定を命せられて今は電氣は無論物であります「電氣と云ふ物」であります、今では決してさう云ふ事の疑を持たないやうになつたけれども漫然として餘程疑がはしい自然科學の影響を受けて樣々に改善されると云ふ事は何等疑ない事であり

ます、……さう云ふ具合でありますから自然科學と云ふ事の發達と云ふ事は我々日本人として最も此方面に對し希望する所でありませう、而しながら自然科學のみの發達と云ふ事は、夫れは非常に發達する、今の無線電話電信を發見した所の非凡な人が居れば夫れでも或は良いかも知れないけれども、自然科學の發達のみに依て滿足すべき事でない、自然科學と云ふ事は優良なる人格の上に基礎を置くべき所の更に生々した所の自然科學、即ち第一に人格が必要である。人格がなくて自然科學を眞實に發達せしめると云ふ事は、六ヶ敷ことでありますもやかしをやつて研究したと報告して眼前の營利に齷握して居るやうでは自然科學の發達と云ふことは出來ないと思ふのであります、どうしても人格の必要と云ふ事は非常に大切であります、人格と云ふ事は例へば土地の如きものであります、土地が即ち人格であります、或不沃な所に於ける米でも麥でも何でも種子が人格と云はれた所の土地の如何によつて始めて大きな立派實を作ることになるのであります。沙漠の上で播いた所の種では眞實の發達をする事が出來ないと苦心して居るのであります、さう云ふ風な譯であります、獨逸の事情を比較的知つて居りますから、獨逸の事情を比較的知つて居りますから申しますが前に申した通り獨逸人も非常に悲慘なる狀態になつてマークが數へることの出來ない程下落した二、三年前に郵便切手代が四千萬マーク、日本の二千萬圓程、如何に獨逸が悲慘であつたらうか、外の國と貿易をしやうが一圓に對して一億萬マークも出さなければならない一マーク四十七錢八厘位であるから三マーク約一圓五十錢夫れが一圓に何千萬マーク、實に悲慘などん底迄落ちてしまつた、どうして此の悲況を充實したならば良いかと云ふ事であります、非常に頭を惱ましたのであります、其處が我々の良く見て居なければならないと思ふのであります、樣々に頭を惱まして作つた所のレンテンバンクと云ふ銀行が發行した所のレンテンマークと云ふもので獨逸國民の無形の財產を信用して發行せしもの詰り是は獨逸國民の無形財產是が擔保になつて居る所の財產であります、殆んど斯ふ云ふ事を未だ嘗て見ない所の獨逸國民が「我々の力」を信賴して夫れに對して紙幣と云ふものゝ價を出して貰ひ獨逸の自然科學を應用して作り出した所の優良品を世界に供給してさうして獨逸の紙幣の價ひを求めるやうにしたのがレンテンマークである

戰後大正九年十月頃私は巴里の學會に參りましたが其時には一マークが五錢三厘、今日は如何かと云ふに一マーク五十七錢、戰前が四十七錢八厘だからその値が大戰前よりも上つた譯である、然るに更に奇妙な事は戰勝國たる佛蘭西の貨幣は如何なつたか、佛蘭西の一法は今日十二錢幾等であります、戰前は四十錢の一法が戰後に十二錢、獨逸の一マークが四十七錢八厘それが戰後暴落して居たが今は反つて上つて戰前より高く佛蘭西の一法が十二錢內外、如何ですか是が經濟學の原則が示している如くその國の金の値はその國にある勢力と比例するものでなくその國に居る人間の値に比例するものである、斯ふ云ふ譯でありまして獨逸が供給する所の機械醫料顯微鏡に至る迄獨逸の製品が優良であるがために米國が幾等やきもきしても獨逸に壓倒されるのであります、詰り此の点が獨逸の馬克の値を生じた所以であらうと思ひます、專門學者でないから極く細かい所は專門家に委かして置いてさう云ふ風な具合であるから獨逸が即ち世界の大戰爭を惹起した所の發頭人は政策に於ては政治上到々失態を演じたものであるが獨逸國民一々は可成り洗練された人間と思ひます、我々が感情的に排斥し感情的に良くすると云ふ風に感情に支配されて動くならば日本のために悲しむべき事である、よくその人の觀察をすると云ふ事は佛數で云ふ所の覺であります、日本國民全體が國況と云ふものは如何、國体と云ふものは如何と云ふ事に細心の注意を拂つて進まなければならない、私が伯林に滯在している時分から四年間勞働者を備つて仕事をやらしてをりました幾日か賴みました或る時に御馳走してお前は露西亞を如何云ふ風に見るかと題を出した所が云ふ樣には、どうも露西亞があゝなつたのは實に悲慘である獨逸も今輕んずれば露西亞の樣になるから我々勞働者は此の數年間最一の努力を盡して勸認するより外ないと云ふさう云ふ事を力强く私に云つたので私は實に感心したのであります、一勞働者であるけれども感せざるを得ないのであります日本の勞働者は今現在果して如何と云ふ事に諸君が思ひ起されたならばどうであるか、私が明丁に申しませんけれ共、震災と云ふ事に對しての觀察が丁度私が雇つた人間の今のさう云ふ風な明快なる答を與ふべき所以でありませうが、如何

次に風儀の点であるとか、親子の愛の点であります、外國の様に決して子供だから愛さないと云ふ事はありません親子の愛と云ふものは非常なもので是れは日本の國邊りはその点は良い按配になつて居るやうに思はれます必ずしも向ふの方が全部良いではない、さう云ふ風な具合であるが而し乍ら全部がさうかと申しますと決してさうではない、矢張り日本の武家政治が行はれたやうに武士堅氣の共通した点が澤山にあります、例へば自分の家の家名と云ふ様な事には非常に注意してゐる、家族制度は日本の様な氣分が非常に濃厚である、或は猶太から這入り込んだ人にはさう云ふ事がありませんけれども日本のやうに神と云ふものに對し相當な注意を拂ふてゐる日本等の此の習慣と云ふものを打破すると云ふ事は實に惜しい事であります個人主義と申しますか段々過激になりますから日本の共存共榮のために日本國民全体が共同一致して安寧幸福と云ふ事を保つやうにすると云ふ事が頗る必要であると思ひます、この点は佛教でも皆云ふて居るところでありまし儒者でも等しく云つて居る所の難を先にして得るところを後にするを仁とすと云ふやうに强寛仁敏惠と云

はれた此の五者を天下に行ふを仁とすと云ふて居る、「强」なれば即ち侮られない「寛」なれば即ちおだやかで仁なれば即ち人に信ぜられる「敏」なれば此機を制し惠なれば即ち惠み深く慈悲の心にとむことになります、以て人の我々の挙々服膺しなければならない、点である、さう云ふ風な具合で聖人の云ふて居られる事である別けて永平寺の開山である所の道元禪師は經文の中に自分の利益と云ふ事を考へず人を利すると云ふ事が即ち自分を利する事である、愚人思はく利他を先とすれば自利はぶかるべしと然らず利行は一法なり汎く自他を利するなりと、かやうに詰り他人を利すると云ふ事が即ち此の人間の最も高尚なる所の考へであると思ひますさう云ふ事が判つて居つても實行と云ふ事になると躊躇するのである最善の注意を拂つてさう云ふ風にならぬやうにするのが即ち我々の努力であると思ふ、又如何なる動物に於ても子供を愛しないと云ふ事は決してない、況んや人間に於てをやであります所が實際の所愛してゐないかの　うに思はる、それは何であるかと云ふに因果の理法に對して無關心であるからである因縁因果と云ふと古るくさいやうに考へている人が多いやうに思ふ私は自然科學も少し計り敎はつたが因果因縁と云ふ事に對しては非常に興味を持ち又、眞理であると云ふ事を感知する一員であります、例へば此度に自分だけの興味、自分だけ良ければ良い、人生僅か五十年だ齷齪してをると云ふ事は自分の贊成しない所である

少しの時間をも惜しみ共に苦しみ共に樂んでその中に自らの眞心を行ひ社會人類のために仕事をすると云ふ事が是が愉快であると云ふ事に元來あるのであるから夫れが誠の樂しみである、多少の苦しみを忍んでよく已上の大きい樂しみを目的とするが人間の最高の考へであります、でなければ眞實の社會改善が出來ないと私は考へるのであります、であるから自分だけで眼前の勝利に齷齪して　供は子供と云ふ様な考へを持つて居ては子供の方では親孝行をしない、親が子供を愛すればこそ自分の身を愼しみ、さう云ふ性質が引いてその子供に遺傳して來るのであります、今の遺傳學と云ふものはさう云ふ事も研究している、さう云ふやうな事はその一部分を說いたものであります、自分の考へと云ふものは何代目かに必ず遺傳すると云ふ事は決して間違いない、自分が非常に努めたに關らずその子供に不良不善が出來たとてそれは他からの原因關係の場合ばかりでない自分の種にその要素が含まれて居るのであります。

因果因縁と云ふ事は非常に興味ある問題で自然科學の上に當然認めらるべきもので決して矛盾はない、宗敎家の方にありますが　道元禪師の云はれた所の因果の道理歴然として變易なしと因果の道理は決して間違ないと云ふ事は宗敎家の信仰であります、是が我々の非常に尊敬する所で決して自然科學に萬能ではないが決して輕視するものでない尊重すべきものであります、この因果の道理の上に立ち自然科學の研究こそ實に我々の幸福を增進する所のものであるのである。

尙御話ししたい事もありますけれども時間も來ましたから大体云はんと欲する所のものは十分ではございませんけれども御判りになつたかと思ひます、專問の事で御話ししたならば良いと思ひますが所謂總論的の意味に於て無益ぢやないと思ひまして諸君の御靜聽を煩はした次第であります

（終り）

大正十五年七月十五日印刷
大正十五年七月十八日發行

石川縣能美郡苗代村字北淺井ハノ七十三番地ノ一
發行兼編輯者　淺井惠定

石川縣能美郡板津村字犬丸甲十九番地
印刷者　藤森彌三右工門

石川縣能美郡板津村字犬丸甲十九番地
印刷所　藤森印刷所

發行所　石川縣能美郡佛教會

終